

兵庫県文化財調査報告書 第26冊

松ノ本古墳群

— 近畿自動車道舞鶴線に伴う

埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) —

1985.3

兵庫県教育委員会

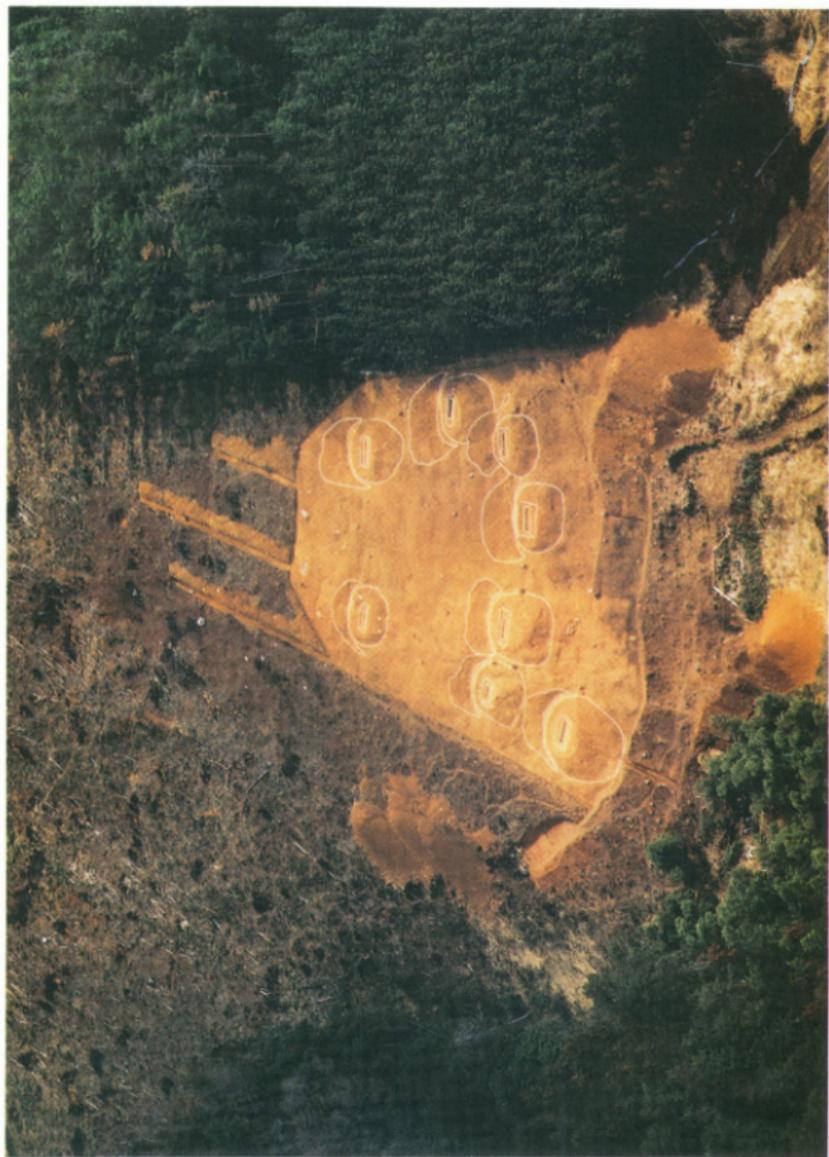
松ノ本古墳群正誤表

頁	行	誤	正
本文目次	19	4 古墳	4 号墳
25	11	認められる。	認められた。
33	5	Ⅱ・Ⅳ区	Ⅱ・Ⅲ区
40	第 27 図	(禪図等高線) 118~ 120m	119~ 121m
51	12	0.3cm	0.3
83	第 2 表	高坏 9.5%	高坏 9.6%
"	"	短頸壺 8.7%	短頸壺 8.8%
96	3 設目	やや突り	やや尖り
99	27	類似した を	類似した方法を
99	30	下方に	下方の
105	7	「陶邑古窯址 I」	「陶邑古窯址群 I」
図版五	下	(西から)	(東から)
図版二八	右 2 段目		4 3 - 4

松ノ本古墳群

— 近畿自動車道舞鶴線に伴う

埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) —



調査区全景（西から）



古墳群遠景（西から）



古墳群遠景（西より）

序

兵庫県は、瀬戸内海から日本海まで広がる広大な面積を有し、歴史的にも、その中で様々な文化が育まれてきました。

特に丹波地方は、山々の緑にかこまれた豊かな田園地帯で、古くから文化が開け、貴重な文化財が数多く残されています。

兵庫県教育委員会は、丹波地方を縦断する高速道路である近畿自動車道舞鶴線建設に先立ち、路線内にある埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を進めていますが、本書はそのうち、昭和58年度に実施した氷上郡春日町にある松ノ木古墳群の調査結果をとりまとめたものであります。

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査は、なお、数年に亘って継続される予定であります。これまでの調査により二万年数千年前の旧石器時代から近世に至るまでの間の数多くの重要な資料が提供されています。

本書もその成果の一部であり、幅広く活用され、文化財保護の普及、啓蒙に少しでも役立てばと願うものであります。

なお、最後になりましたが、発掘調査に際して御指導、御協力頂いた方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月

兵庫県教育長 井野辰男

例 言

1. 本書は近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和58年度に実施した兵庫県水上郡春日町多利所在の松ノ本古墳群の事前調査報告である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本書で使用した標高値は、日本道路公団が設定したB、Mを用い、方位は国土座標系(第V系)で示し、座標北から真北は $N 0^{\circ} 27' 50'' W$ 、磁北は $N 6^{\circ} 53' W$ である。
4. 使用した写真のうち、遺構は調査員が撮影したが、遺物については森 昭氏の手を煩せた。
5. 本書の遺物の図版番号は図面番号と一致する。
6. 本文中の第4図は、青木哲哉氏(立命館大学大学院研修生)が作成されたものを使用させて頂いた。
また、石材の鑑定は、矢崎清貴氏(通産省地質調査所燃料部主任研究官・創価大学講師)をお願いした。
7. 墳丘測量図(調査後)と、地形測量図(調査後)については、国際航業株式会社へ委託して作成したものを編纂した。
8. 第5図 周辺遺跡分布図は、国土地理院発行2.5万分の1「柏原」・「宮田」・「黒井」・「市島」を使用した。
9. 本書の執筆分担は次のとおりである。
第1章……井守 徳男
第2章……村上 泰樹
第3章……村上、山下 史朗
第4章……西尾知恵子、井守
第5章……井守
10. 本書の編集は、井守と村上が共同して行った。

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 近畿自動車道に伴う調査	1
第2節 調査に至るまでの経緯	1
第3節 調査の経過	2
第4節 整理作業	4
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 松ノ本古墳群の調査結果	13
第1節 古墳群の立地と分布	13
第2節 1号墳の概要	16
第3節 2号墳の調査	17
第4節 3号墳の調査	25
第5節 4号墳の調査	32
第6節 5号墳の調査	40
第7節 6号墳の調査	47
第8節 7号墳の調査	55
第9節 8号墳の調査	63
第10節 9号墳の調査	70
第11節 箱式石棺の調査	77
第4章 出土遺物	79
第1節 土器	79
第2節 鉄器	85
第5章 ま と め	99

挿 図 目 次

第1図	調査前の状況	2
第2図	調 査 風 景	2
第3図	現地説明会	3
第4図	地形分類図	7
第5図	周辺の遺跡分布図	9
第6図	カナツキ古墳	10
第7図	古墳群の位置	14
第8図	1号墳墳丘測量図(調査前)	16
第9図	2号墳墳丘測量図(調査前)	17
第10図	2号墳墳丘測量図(調査後)	18
第11図	2号墳土層断面図	19
第12図	2号墳埋葬施設	22
第13図	2号墳出土土器	23
第14図	3号墳墳丘測量図(調査前)	25
第15図	3号墳墳丘測量図(調査後)	26
第16図	3号墳土層断面図	27
第17図	3号墳埋葬施設	30
第18図	3号墳出土土器	31
第19図	3号墳出土鉄器	31
第20図	4号墳墳丘測量図(調査前)	32
第21図	4号墳墳丘測量図(調査後)	33
第22図	4号墳土層断面図	35
第23図	4号墳埋葬施設	37
第24図	4号墳墓板上出土土器	38
第25図	4号墳棺外出土土器(1)	38
第26図	4号墳棺外出土土器(2)	39
第27図	5号墳墳丘測量図(調査前)	40
第28図	5号墳墳丘測量図(調査後)	41
第29図	5号墳土層断面図	43
第30図	5号墳埋葬施設	45

第31図	5号墳出土土器	46
第32図	6号墳墳丘測量図(調査前)	47
第33図	6号墳墳丘測量図(調査後)	48
第34図	6号墳土層断面図	49
第35図	6号墳埋葬施設	52
第36図	6号墳墓壇上出土土器	53
第37図	6号墳出土土器	53
第38図	6号墳出土鉄器	54
第39図	7号墳墳丘測量図(調査前)	55
第40図	7号墳墳丘測量図(調査後)	56
第41図	7号墳埋葬施設	58
第42図	7号墳土層断面図	59
第43図	7号墳棺外出土土器	61
第44図	7号墳出土土器	62
第45図	8号墳墳丘測量図(調査前)	63
第46図	8号墳墳丘測量図(調査後)	64
第47図	8号墳墓壇上出土土器(1)	65
第48図	8号墳墓壇上出土土器(2)	65
第49図	8号墳埋葬施設	66
第50図	8号墳土層断面図	67
第51図	8号墳出土土器	69
第52図	9号墳墳丘測量図(調査前)	70
第53図	9号墳墳丘測量図(調査後)	71
第54図	9号墳埋葬施設	72
第55図	9号墳土層断面図	73
第56図	9号墳出土土器	75
第57図	その他の土器	76
第58図	箱式石棺	78
第59図	埋葬施設出土遺物	81
第60図	須恵器の変化	101
付図1	氷上郡春日町多利・松ノ本古墳群測量図(調査前)	
付図2	氷上郡春日町多利・松ノ本古墳群測量図(調査後)	
付図3	松ノ本古墳群縦断面図	

図 版 目 次

卷首図版1 松ノ本古墳群		調査区全景
卷首図版2 松ノ本古墳群	上	古墳群遠景
	下	古墳群遠景
図版1 松ノ本古墳群 1号墳・2号墳	上	1号墳全景
	下	2号墳調査前
図版2 松ノ本古墳群 2号墳	上	全 景
	下	埋葬施設
図版3 松ノ本古墳群 2号墳	上	埋葬施設
	下	弧状溝内須恵器出土状況
図版4 松ノ本古墳群 3号墳	上	全 景
	下	埋葬施設
図版5 松ノ本古墳群 3号墳	上	埋葬施設
	下	棺内鉄鍬・刀子出土状況
図版6 松ノ本古墳群 4号墳	上	調 査 前
	下	全 景
図版7 松ノ本古墳群 4号墳	上	埋葬施設および土器出土状況
	下	棺外須恵器出土状況
図版8 松ノ本古墳群 4号墳	上	墓壇上土器出土状況
	下	箱式石棺〈左〉・2号墳〈中央〉・ 4号墳〈右〉・3号墳〈手前〉
図版9 松ノ本古墳群 5号墳	上	調 査 前
	下	全 景
図版10 松ノ本古墳群 5号墳	上	埋葬施設
	下	2号墳〈奥〉・4号墳〈中央〉・5 号墳〈手前〉

図版11	松ノ本古墳群 6号墳	上 調査前 下 全景
図版12	松ノ本古墳群 6号墳	上 埋葬施設 下 埋葬施設
図版13	松ノ本古墳群 6号墳	上 棺内刀子出土状況 下 墓底上土器出土状況
図版14	松ノ本古墳群 7号墳	上 調査前 下 全景
図版15	松ノ本古墳群 7号墳	上 埋葬施設 下 6号墳〈左〉・7号墳〈右〉
図版16	松ノ本古墳群 8号墳	上 調査前 下 全景
図版17	松ノ本古墳群 8号墳	上 埋葬施設 下 埋葬施設
図版18	松ノ本古墳群 8号墳	上 墓底上須恵器出土状況 下 7号墳〈左〉・8号墳〈右手前〉・ 9号墳〈右奥〉
図版19	松ノ本古墳群 9号墳	上 調査前 下 全景
図版20	松ノ本古墳群 9号墳	上 埋葬施設 下 埋葬施設
図版21	松ノ本古墳群 箱式石棺	上 蓋石の状況 下 蓋石の状況
図版22	松ノ本古墳群 箱式石棺	上 石 棺 下 石 棺
図版23	松ノ本古墳群 出土遺物	(15—1～10 2号墳棺内、13—12 2号墳弧状溝)

図版24	松ノ本古墳群	出土遺物	(24-1~8 4号墳墓壁上、26-2・3 4号墳棺外)
図版25	松ノ本古墳群	出土遺物	(26-5~13、25-1 4号墳棺外)
図版26	松ノ本古墳群	出土遺物	(31-2~10 5号墳墳丘裾部・弧状溝、36-1~3 6号墳墓壁上)
図版27	松ノ本古墳群	出土遺物	(36-4~8 6号墳墓壁上、37-3~9 6号墳墳頂部・墳丘裾部・弧状溝)
図版28	松ノ本古墳群	出土遺物	(43-1~12 7号墳棺外)
図版29	松ノ本古墳群	出土遺物	(43-13・14 7号墳棺外、43-15 7号墳墓壁上、44-1~8 7号墳墳頂部・弧状溝・その他)
図版30	松ノ本古墳群	出土遺物	(48-1~4、47-1 8号墳墓壁上)
図版31	松ノ本古墳群	出土遺物	(51-3 8号墳墳頂部、56-1~10 9号墳墳頂部・墳丘裾部・その他、19-1~5 3号墳棺内、38-1 6号墳棺内)

表 目 次

第1表	出土別個体数	79
第2表	器種別による分布比	83
第3表	出土土器観察表	87
第4表	松ノ本古墳群の概要	98

第1章 調査の経緯

第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う調査

近畿自動車道舞鶴線（以下「近舞線」と略する）は、中国縦貫自動車道・吉川ジャンクションから、舞鶴インターチェンジに至る総延長76.5kmの高速自動車道である。近舞線に関連する埋蔵文化財の包蔵地は、昭和53年度に実施した分布調査では約53か所が確認された。このうち、分布調査以前に周知されていた数か所の遺跡を除くと、多くは新発見の遺跡である。

近舞線建設予定地内の発掘は、昭和57年度から主として多紀郡、水上郡内を対象として実施している。

第2節 調査に至るまでの経緯

松ノ本古墳群は、兵庫県水上郡春日町多利字松ノ本195に位置する。調査の結果、古墳群は9基の木棺直葬を埋葬施設とする円墳、無墳丘の箱式石棺1基から構成されていることが判明した。

古墳群の発掘調査は、近舞線建設に伴う事前調査として実施したが、古墳の存在は、前述の分布調査からは脱漏しており、新規に発見された古墳群である。

古墳群は、昭和57年度に実施した春日町多利に所在する多利向山古墳群の発掘調査の際に、付近を踏査した県教委職員によって発見された。当時、すでに立木は伐採されていたが、雑木については切り倒されたままの状態では放置されていたため、かえって古墳の存在を識別するのは困難であった。この時点では、3基程度あるらしいとの報告があり、日本道路公園へも、新規発見の通知を行った。したがって、松ノ本古墳群の発掘調査の場合、明確に存在基数を確認できないまま、発掘調査に入らざるをえない状況であった。

58年10月には、県中・北部では最大級の弥生時代集落であると推定される春日・七日市遺跡の調査も、工事工程上急を要する事態となりつつあったので、松ノ本古墳群の3基の古墳調査終了後に、春日・七日市遺跡の一部の調査を実施するというので、日本道路公園と合意し委託契約を交した。

調査は日本道路公団が実施している山陽自動車道建設に伴う発掘調査が、用地買収で難行し、調査が不可能になった井守と、同じ近畿自動車道関係の多紀郡西紀町に所在する西木ノ部遺跡から村上の両名が担当し、昭和58年10月24日から開始した。

第3節 調査の経過

発掘調査は前述のとおり、昭和58年10月24日から開始した。調査に先立って慰霊祭を行い、終了後、すでに存在が確認されていた古墳を中心に、伐採されたままの状態で放置されていた草木類の片付け作業から開始した。その結果、8基の古墳状の隆起を確認し、大幅に基数が増加することが明らかになった（このうち、2基については古墳でないことが判明した）。

このような状況を考慮すると、さらに古墳数の増加も予測されたので、各古墳の名称については、発見順に仮番号（アルファベット）による呼称をとることにし、それぞれA～H号墳と仮称した。その後、伐採の面積を斜面上方の傾斜変換点付近まで拡大したところ、更に3基（I～K号墳）が新規に発見された。

さらに、用地内にあたる斜面上方や、北側に続く斜面、尾根稜線も詳細に踏査したが、古墳と思われる隆起は認められず、古墳は築造されていないと判断された。特に斜面上方については、3本のトレンチ（第1トレンチ30×1m、第2トレンチ29×1m、第3トレンチ15×1m）を設定し、慎重を期したが、遺構、遺物などは皆無であった。ただ、用地外ではあるが、南に続く斜面は踏査したところ、明瞭な古墳状の隆起は認められなかったが、造林が行われており、下草も繁茂しているので、松ノ木古墳群のような墳丘の高まりが明確でない古墳の場合、その存在の可能性は否定できない。



第1図 調査前の状況



第2図 調査風景

以上のような踏査の経過を踏まえて、古墳基数に増加がないこと、また古墳ではなかった段状の隆起を除外できた時点で、数字による呼称に変更し、現地説明会から1～9号墳という通常行われている数字による呼称に変更した。

伐採、片付け作業と並行して、縮尺100分の1、25cmの等高線による調査前

の地形測量を調査区全域において、深井明比古の応援をえて行った。

発掘調査は墳丘を4区画（南東隅より時計回りにⅠ～Ⅳ区と呼称）し、それぞれ墳頂部中央で直交するように、斜面上方の東側をA、南をB、西をC、北をD点とし、A—C、B—Dを結ぶ線上に土層観察用の畦畔を設定した。検出した埋葬施設からはずれる場合も多かったので、新たに墓坑検出面で埋葬施設を縦横断するように畦畔を設定しなおした。

調査は4号墳から開始し、順次北側へ向って調査を行ったが、埋葬施設、あるいは墳丘裾の平面的な検出が極めて困難であったので、一部、小トレンチを設定し、断割って断面観察を併用しながら検出作業を行った。このうち、D・H号墳については、トレンチや、4分割法で調査を行ったが、古墳でないことが判明したので古墳番号から消去した。

特に今回の調査では、59年1月末から3月中旬にかけて記録的な豪雪となり、連日の積雪に悩まされたが、作業員諸氏の協力の下、除雪を行いながらほとんど作業を中止することなく継続することができ、予定どおり、3月30日をもってすべての調査を終了することができた。

また、墳丘の全景撮影には、古墳群がきわめて急斜面に立地していることから、従来の写真用足場が使用できないため、モニター用のテレビカメラを搭載したポールによる写真撮影を行い、調査後の古墳群全域の地形測量については、航空写真測量を行った。

3月20日には、現地説明会を行う予定であったが、当日は前日の積雪があり中止せざるをえなかったが、それでも約50名近くの参加者があったので説明を行った。

現地説明会の終了した翌日からは、墳丘の断割りに重機を導入し、墳丘断面を残しながら、墳丘盛土と旧地表下の堆積土の除去を行った。なお、この期間中、断面実測に山下史朗の応援をえた。

松ノ木古墳群の場合、いわゆる「記録保存」を前提としていたため、重機を導入したが



第3図 現地説明会

小トレンチによる断面観察では、応々にして堆積状況が把握しづらいことが多いのに比較すると有効であり、且つ、調査期間も大幅に短縮することができた。しかし一方では、7号墳のように掘削土中から棺外遺物と思われる須恵器が発見された場合、原位置の確定することが不可能であるなどの支障があった。

なお、2月27日からは春日・七日市遺跡のうち、全面調査区に最も近いインターチェンジ西端部分の確認調査もあわせて行った。

第4節 整理作業

整理作業はすでに一部、現地調査中においても、水洗・ネーミング・実測などを行ったが、本格的には調査の終了した昭和59年度に整理作業を受託し実施した。作業は主として春日・七日市遺跡の調査事務所で行い、復原作業と遺物実測の一部は、魚住分館（昭和59年7月閉鎖）で行った。

調査の体制

発掘調査とその後の整理作業の体制は次のとおりである。

発掘調査 一昭和58年度一

社会教育・文化財課	課長	西沢良之
	参事	大西章夫
	副課長	森崎理一
	同	馬田力
	課長補佐兼管理係長	福永慶造
	主任	八家均
	係員	杉本恵子
	課長補佐	池田義雄
	埋蔵文化財調査係長	榎本誠一
	事務担当係員	大平茂
	調査員	井守徳男
		深井明比古
		村上奉樹
		山下史朗

整理作業 一昭和59年度一

社会教育・文化財課	課長	西沢良之
	参事	大西肇夫
	副課長	森崎畑一
	同	馬田力
	管理係長	小西清
	主査	坂本豊明
	係員	杉本恵子
	課長補佐	和田富男
埋蔵文化財調査係長		榎本誠一
事務担当係員		大平茂
	調査員	井守徳男
	同	村上泰樹

調査補助員

青木哲哉（立命館大学大学院研修生）

西尾知恵子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

松ノ本古墳群は、氷上郡春日町多利字松ノ本に所在している。古墳群の所在する春日町は、兵庫県中央部東寄りに位置し、東は京都府天田郡と隣接している。春日町の地形は、丹波山地系多紀連山山地・播丹山地系東部中央山地に囲まれ、その間は、氷上低地と呼ばれる沖積平野が形成されている。

春日町の西側、氷上町石生水分橋付^{いそうらわかれ}付近には標高95mの低い分水界がある。この分水界より南は、佐治川・加古川を経て瀬戸内海に流れ、北は山良川の上流である黒井川・竹田川を経て日本海に続く。

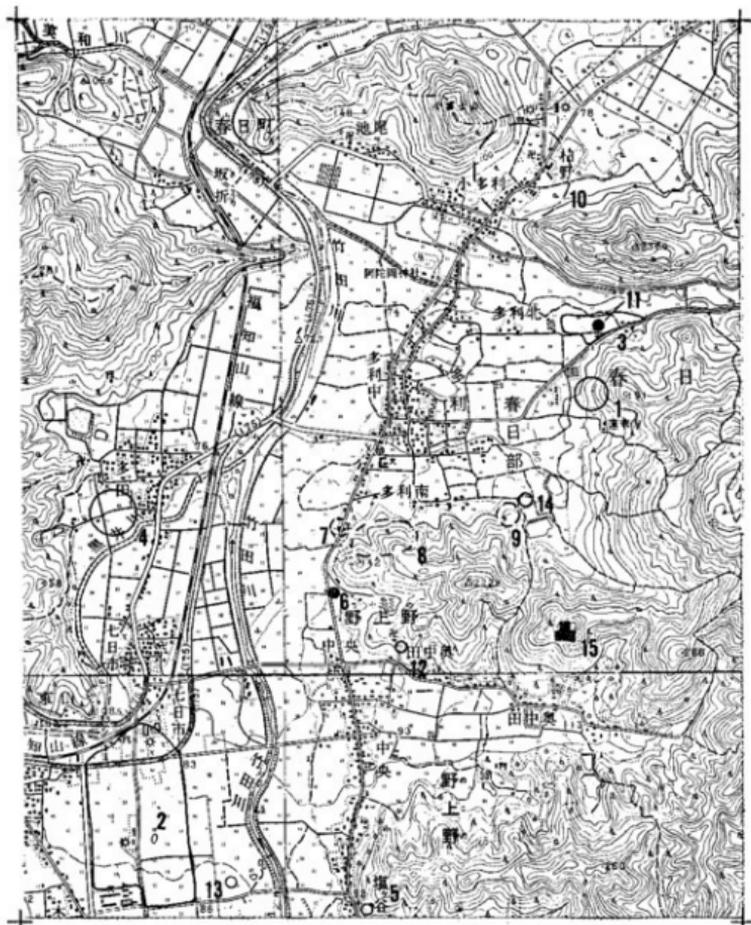
黒井川は、いったん東に流れ、多田地区で竹田川と合流する。小富士山以南における両河川の左・右岸には、1～3段の段丘面（上位・中位・下位段丘）および低地が形成されている。

松ノ本古墳群の立地する場所は、標高564.8mを測る多紀連山山地の一部である妙高山より西側に、多利集落を囲むように張り出した支脈の急斜面に位置している。古墳群が存在する標高は110～130mである。この尾根の急斜面からは、多利地区・竹田川流域および多田地区が一望できる。

この斜面から下方には、緩斜面が広がり、さらに西側下方には、多利地区・野上野地区にかけて中位段丘面が展開し、現在の多利・野上野集落が立地している。この段丘面上に二筋の開折谷が入り込んでいる。中位段丘より上位の段丘は、本遺跡の北側に位置する柏野・坂折地区に僅かに残っている。さらに下方の竹田川両岸には、下位段丘面、低地の順で平坦面が形成されている。竹田川を挟んだ多利地区および多田地区にかけては、上記したように2段（中位・下位段丘）の段丘面が形成されている。松ノ本古墳群周辺の遺跡は、これらの地形上に立地している。

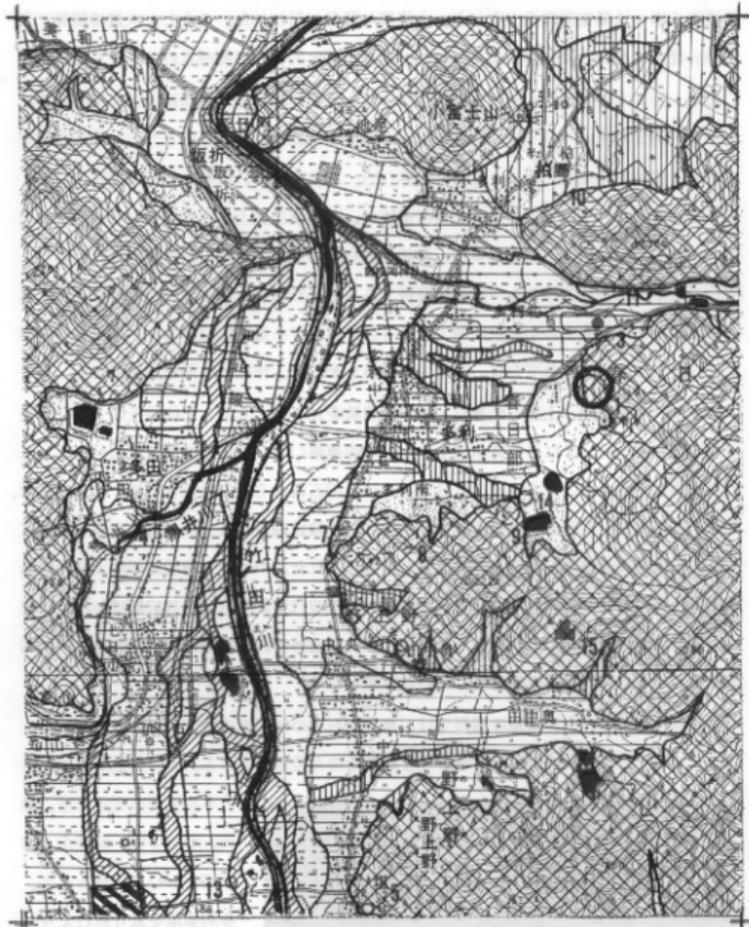
第2節 歴史的環境

松ノ本古墳群の存在する春日町周辺は、これまで、考古学的な発掘調査がほとんど行わ



- | | | | |
|------------|-------------|---------------|-----------|
| 1. 松ノ木古墳群 | 2. 春日・七日市遺跡 | 3. カナツキ遺跡(仮称) | 4. 多田散布地 |
| 5. 野々間遺跡 | 6. 二間塚古墳 | 7. 芝ヶ西古墳群 | 8. 多利古墳群 |
| 9. 多利向山古墳群 | 10. 柏野古墳群 | 11. カナツキ古墳 | 12. 野上野窯跡 |
| 13. 山廻遺跡 | 14. 多利前田遺跡 | 15. 野上野城址 | |

第5図 周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)



- 凡例
- | | | | | | | | | | |
|-----|------------|-----|-------------|-----|---------------|-----|-----------|-----|-----------|
| | 山地 | | 上位段丘 | | 中位段丘 | | 下位段丘 | | 低地 |
| 1. | 1. 松ノ木古墳群 | 2. | 2. 春日・七日市遺跡 | 3. | 3. カナツキ遺跡(仮称) | 4. | 4. 多田古墳群 | 5. | 5. 相模川遺跡 |
| 6. | 6. 相模川遺跡 | 7. | 7. 相模川遺跡 | 8. | 8. 相模川遺跡 | 9. | 9. 相模川遺跡 | 10. | 10. 相模川遺跡 |
| 11. | 11. 松ノ木古墳群 | 12. | 12. 相模川遺跡 | 13. | 13. 相模川遺跡 | 14. | 14. 相模川遺跡 | 15. | 15. 相模川遺跡 |

第5図 周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

れず、とくに中世以前の歴史については、未解明な点が多かった。近年、近畿自動車舞鶴線建設工事・ほ場整備事業工事など、大規模な開発が行われた。こうした大規模開発工事に伴い埋蔵文化財の調査が数多く行われ、徐々に歴史的様相が解明されようとしている。

以下、松ノ本古墳群をとり囲む遺跡について、新たに発見された遺跡も加えて述べる。旧石器・縄文時代については、いずれも、これまで確認されていなかったが、最近の調査の結果、旧石器時代は、春日・七日市遺跡(2)。縄文時代は、仮称カナツキ遺跡(3)が、それぞれ確認されている。春日・七日市遺跡は、下位段丘面上に立地している。現在確認調査の段階で、詳細は不明であるが、遺跡は始良火山灰層の下層中より確認されており、年代を比定できる可能性をもつ重要な遺跡であると思われる。縄文時代の遺跡は、松ノ本古墳群の北側に展開する中位段丘面上にある仮称カナツキ遺跡(3)がある。ほ場整備事業によって地形が改変されており、また表採資料も細片で、詳細な時期は不明である。

弥生時代の遺跡は、上記した春日・七日市遺跡をはじめとして、下位段丘面上に立地する多田散布地(4)、2口の銅鐸が出土した野々間遺跡(5)、銅剣形の磨製石剣が出土した野村遺跡などがある。うち春日・七日市遺跡は、旧石器から平安時代まで続く複合遺跡で、昭和56年の春日・七日市遺跡発掘調査団の手による確認調査では、弥生時代中期～後期にかけての方形周溝墓群・竪穴式住居跡などが確認された。つづいて昭和59年度より兵庫県教育委員会によって行われている発掘調査でも弥生時代中期～古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡が数十棟検出されており、春日・七日市遺跡は、上記した多田散布地、野々間遺跡などのなかで拠点的性格を有していたと思われる。

古墳時代になると春日盆地の西部では、氷上町石生の親王塚古墳、後期古墳と考えられている西野々古墳群・大野氏亀古墳群など数多くの古墳が点在する。春日盆地の東部、松



第6図 カナツキ古墳

ノ本古墳群の周辺には、後期古墳が多い。妙高山(海拔564.8m)を主峰として、多利集落を取り囲むように延びる尾根の先端部に沿って、前方後円墳(全長37m)である二間塚古墳(6)、芝ヶ西古墳群(7)、多利古墳群(8)、多利向山古墳群が

ある。また松ノ本古墳群の北側には、最近、新たに確認された横穴式石室をもつカナツキ古墳(11)がある。さらに北側の小宮土山東側山麓および上位段丘面上には柏野古墳(10)がある。これらの古墳のうち、多利向山古墳群・多利古墳群については、確認調査ないし、本調査が行われている。調査の結果、多利向山古墳群では、直径10~20m前後の円墳が4基確認された。1・3号墳は、木棺直葬墓で、2号墳は、方形プランをもつ両袖式の横穴式石室をもち、2回以上の追葬が行われている。これらの築造時期は6世紀前半~中葉と考えられている。多利古墳群では、4基の直径10m前後の円墳が確認され、うち1基が調査されている。埋葬施設は攪乱を受け消失して不明であるが、木棺直葬と考えられる。築造年代については、明確に時期を決定できる資料がないが、おそらく古墳時代後期の範疇で押さえられるであろう。

松ノ本古墳群周辺の古墳の時代的変遷は、今後、調査・検討を加え明確にされていくと考えられるが、古墳群としての捉え方の点より、名称の再整理が必要と思われる。

歴史時代には、奈良時代の里長の館跡と推定される山垣遺跡(13)が、春日・七日市遺跡と同じ下位段丘面上にある。山垣遺跡からは里長館跡と推察できる木簡が出土しているが、他に木製農耕具が多量に出土している点は、特筆すべきものがある。奈良から平安時代にかけての遺跡には上記した春日・七日市遺跡がある。最近の調査では大規模な掘立柱をもつ建物跡群が数十棟検出されている。山垣遺跡との関連を考える上で、その成果が期待される。また中世の遺跡としては、多利前田遺跡(14)がある。多利前田遺跡は、山裾の緩斜面上に立地し、平安時代末~鎌倉時代初にかけての掘立柱建物跡・土壇墓が確認されている。とくに土壇墓内には、和鏡、鉄製品、青白磁小壺・合子、白磁小皿、土師皿が副葬されており、多利前田遺跡の性格を知る上で重要な資料である。他に建武3年(1335年)に赤松貞範によって築城されたとする黒井城(保筑城・保月城)、吉住氏の居城と考えられている野上野城(14)がある。

松ノ本古墳群がある春日盆地は、古代から現在に至るまで、摂津より粟刺峠を経て丹後へ抜ける摂津・丹後道と、京都より栗柄峠を越えて但馬・丹後へ通じる街道の合流点にあたり、交通の要所である。このような地理的条件は、歴史的にも重要な地域であったことは、間違いないと思われる。しかし、現在のところ、これを実証する資料は少なく、今後調査資料の増加によって、徐々に解明されてゆくであろう。

(参考文献)

- ・経済企画庁総合開発局国土調査課 『縮尺20万分の1 土地分類図付属資料 兵庫県』昭和49年

- 岡田篤正・高橋健一 「由良川の大規模な流路変更」『地学雑誌』78-1 昭和53年
 - 村川行弘・村川義典・春日七日市遺跡発掘調査団 『春日七日市遺跡確認調査報告書』 昭和59年
 - 兵庫県教育委員会 『春日・七日市遺跡現地説明会資料1～3』 昭和59年
 - 兵庫県教育委員会 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』 昭和58年
 - 春日町歴史民俗資料館 『春日町歴史民俗資料館展示あんない』 昭和59年
 - 余田邦雄 「丹波春日町出土の磨製石剣」『考古学雑誌』54-4 昭和39年
 - 村川行弘 「銅鐸3例」『考古学雑誌』68-1 昭和57年
 - 兵庫県教育委員会 『多利向山古墳群現地説明会資料』 昭和57年
 - 榎本誠一・瀬戸谷吟 『日本の古代遺跡2 兵庫北部』 保育社 昭和57年
 - 財団法人国土地理協会 『全国遺跡地図28 兵庫県』 昭和57年
 - 兵庫県教育委員会 『近畿自動車道岡保埋蔵文化財調査概報 山垣遺跡』 昭和59年
 - 兵庫県教育委員会 『兵庫県埋蔵文化財調査事務所開所記念 展示の解説』 昭和59年
 - 芦田隆次・村上完二外 『丹波戦国史』 歴史図書社 昭和48年
 - 丹波史談会 『氷上郡志(上巻)』 昭和47年(復刻)
 - 種定淳介 「丹波・野々間遺跡の銅鐸」『兵庫教育』34-7 兵庫県教育委員会 昭和58年
- ※ 野々間遺跡から出土した2口の銅鐸は、1号銅鐸が外縁付鈕2式4区製装褷文銅鐸、2号銅鐸が扁平鈕式4区製装褷文銅鐸に分類される。うち2号銅鐸は埋納竈に埋置された状態で検出されている。

第3章 松ノ本古墳群の調査結果

第1節 古墳群の立地と分布

すでに、第2章でもふれたように、松ノ本古墳群は、由良川の支流、竹田川中流域の左岸、山麓部傾斜面地に築造されている。

古墳群は、9基の楕円形を呈する墳丘上に、1基の木棺を直葬している古墳から構成される。そのうち、今回8基の古墳の調査を実施した。また、調査中に無墳丘の箱式石棺も検出されたので、併せて調査を行った。

古墳は、傾斜度 $20\sim 25^\circ$ 前度の西向き傾斜面に築造され、下方は現在、水田面となっている。傾斜変換点までの比高差は約 $10\sim 15m$ である。

古墳群の分布する地形を詳細に観察すると、西向する傾斜面のうち、小さな尾根稜線上から、南東方向に等高線が緩やかに湾曲する部分に近接して築造されていることが判かる。古墳群の南側は、小さな谷状の地形になっていて、古墳は存在しないようである。

また、尾根稜線より北側にも小さな谷が開析されているが、稜線より北側には古墳は築造されていない。古墳群が北西を向く傾斜面にあり、古墳群築造の母体となったであろうと推測される中位段丘（現在の多利集落付近）を見通すことのできる地点を選地していることに起因するであろう。さらに北側には、北西に延びる尾根があるが、踏査の結果では古墳は分布しないようである。

以上のように、松ノ本古墳群は付近に同様の地形が存在するにもかかわらず、近接して築造されていることが特徴で、南北方向約 $50m$ 弱、東西方向 $60m$ の狭い空間に分布する。

古墳は、標高約 $130m$ （墳頂部平坦面）にある1号墳が最も高い位置にあり、標高 $112m$ の9号墳が最も低い。したがって、おおよそ比高差 $20m$ の間に築造されていることになる。

古墳の配置は、「コ」字形を呈し、標高 $125m$ 前後に2基（2、3号墳）、 $119m$ に1基（4号墳）、 $115\sim 117m$ 付近に4基（5、6、7、8号墳）があり、 $112m$ の最下位に9号墳が位置する。斜面上方の2基と、下方の4基との間の標高 $118\sim 123m$ までは、4号墳以外の古墳はなく、空白地帯となっている。特に斜面上方の北側にある3号墳は、同標高にある2号墳とも約 $14m$ 離れていて、やや独立した位置にある。



第7図 古墳群の位置

斜面下方にある6基の古墳は、4、5、6号墳と7、8、9号墳で、それぞれ墳丘裾を接して築造されているが、6号墳と7号墳の墳丘裾部間の距離は約5mで、やや離れている。

3号墳の上方には、墳丘をもたない小型の箱式石棺が1基単独で検出された。後述するように、付近で容易に採集することができる石材を用いて、石棺を構築しているが、他に同種の石棺は検出することができず、本古墳群中では、唯一の箱式石棺をもつ埋葬施設となった。

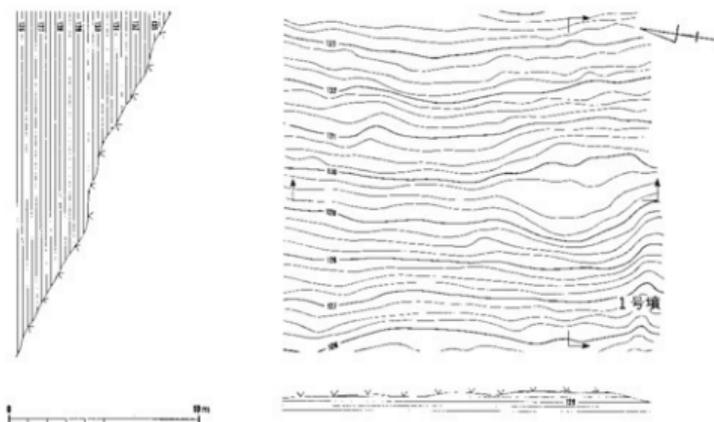
第2節 1号墳の概要

本墳は、松ノ本古墳群の調査に伴う伐採作業中に確認された。本墳の北東側の一部が、路線内にかかっていたが、日本道路公団との協議の結果、工事範囲より除外し現状保存することになった。しかし、すでに伐採を終了していたこともあって、測量調査を行い、現況記録を残すこととした。

本墳は、古墳群の南東隅、標高129～131mの間にあり、群中では、最高位に立地している。斜面下方約10mの位置には2号墳がある。

測量図による検討では、標高130～131.3m付近で、等高線が緩やかに舌状に張り出し、8×6mの範囲で墳頂部と思われる平坦面がある。平坦面から西側は緩やかに傾斜し、標高129m付近で傾斜が急になり、斜面に続いている。平坦面の南側は、本墳下方の4号墳の墳丘南側より続く小径によって破壊されて、墳裾は判別できない。北側より概観すると、1.3m程度の高まりが明瞭に認められ、古墳として比較的容易に識別される。以上のような、測量図および表面観察により、南北方向8m前後、東西方向7m前後の、群中では比較的小規模の円墳であると思われる。

遺物は検出されなかったが、2号墳調査の際、墳丘を斜面と囲する弧状の溝内埋土中より出土した須恵器埴・蓋・短頸壺は、1号墳に伴う可能性がある。



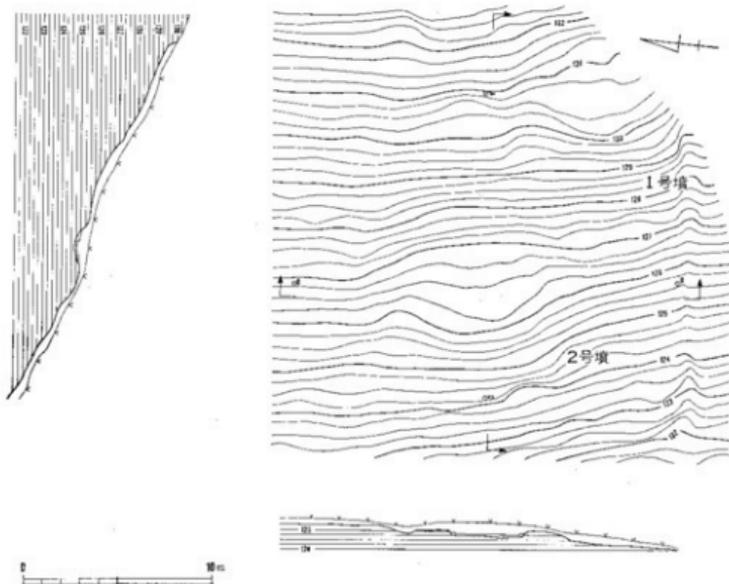
第8図 1号墳墳丘測量図（調査前）

第3節 2号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、調査区の南東隅に位置し、標高124~127m、傾斜角約22°の斜面に立地する。本墳の東側上方、約10mのところには、現状保存することになった1号墳が近接している。西側は、約5m下方に4号墳が位置する。また、北側約14mの地点には、本墳とほぼ同一標高で3号墳が並列している。

調査前の観察では、標高126~128mにかけて等高線が舌状に張り出し、約8×5mの範囲で平坦面を作っている。平坦部から西側は緩やかに傾斜しそのまま斜面に続き、墳丘裾部は明瞭ではなかった。平坦面の北側、および南側では、若干の高まりが認められた。西側の墳丘裾部線は不明瞭であったが、墳頂部と思われる平坦面および若干の高まりが認め



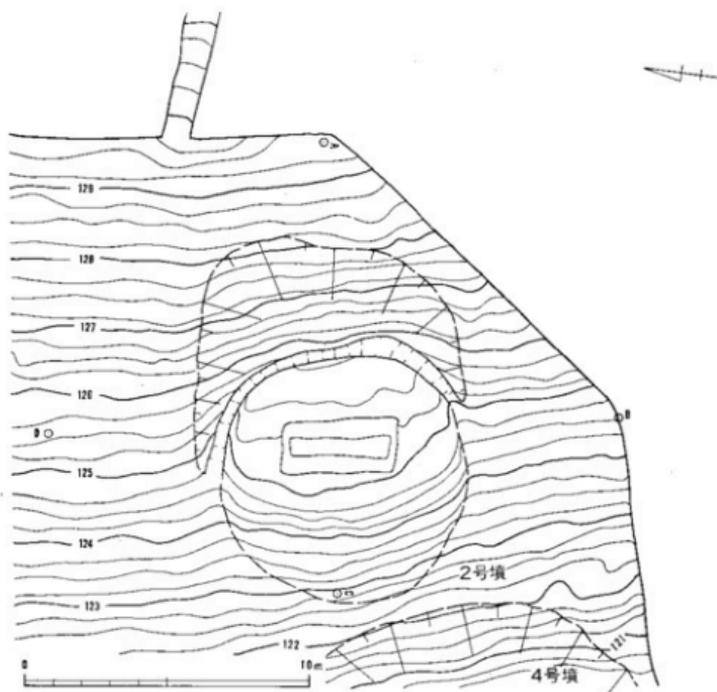
第9図 2号墳墳丘測量図(調査前)

られたため調査を開始した。

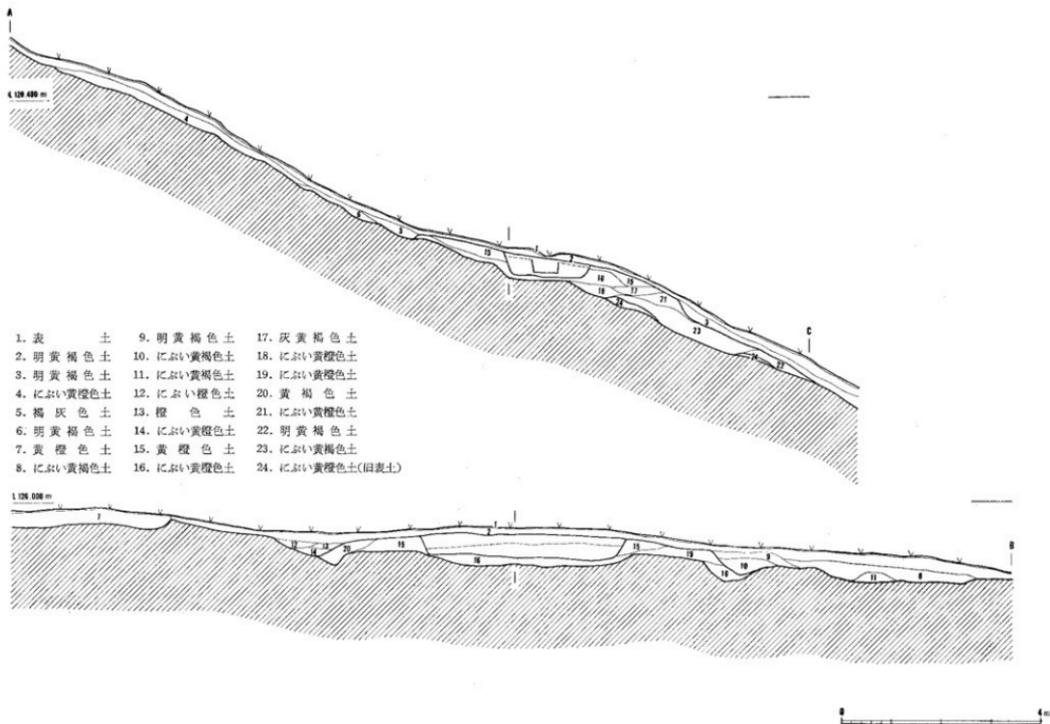
2. 墳 丘

墳丘は、東側Ⅰ・Ⅳ区を弧状の溝で囲し、墳丘西側のⅢ区についても墳丘裾部は明確に判別される。ただし、Ⅱ区については、二次的な土石流のため墳丘が一部破壊されている。墳丘の平面形は南北方向8.6m、東西方向8.6mを測りほぼ円形を呈する。墳丘の高さは東側は溝底より16cm、西側で2.6mを測る。

古墳構築時の斜面傾斜は約 20° と推定され、他の古墳に比べて比較的緩傾斜地に築造されている。しかし、本古墳群全般に見られるような急斜面に立地していることには変わり



第10図 2号墳墳丘測量図(調査後)



第11図 2号墳土層断面図

なく、古墳の築造条件としては、良好とは言えない。本墳は、傾斜地に築造されているため、旧地形の整形は複雑である。

旧地形の整形は、墳丘の東側斜面上方の削り出し、墳丘東側と斜面とを両する弧状の溝の掘削、墳丘基底面の掘削という3つの作業工程からなる。

斜面上方の削り出しは、標高約128.2mを上限として、幅10m、高さ1.76mの規模で楕円形に近い不整の半円形状に掘削している。

墳丘の東側墳丘裾部線に沿って弧状に掘削された溝は、I・IV区を中心に墳丘を3周する形で検出された。しかし、断ち割り調査による土層観察の結果、旧地形の整形段階では、I区部分の溝がさらに西側に続いていることが判明した。溝の深さは、I・IV区境界付近で約16cm、墳丘北側IV区で約32cmを測り、断面形は、「U」字状を呈する。墳丘盛土の際1部溝内にも、盛土され、溝の一方の立ち上りとしている。I区の西側寄りの溝部は、盛土によって完全に埋められている。墳丘検出時の溝幅は、40~80cmを測り一定ではない。

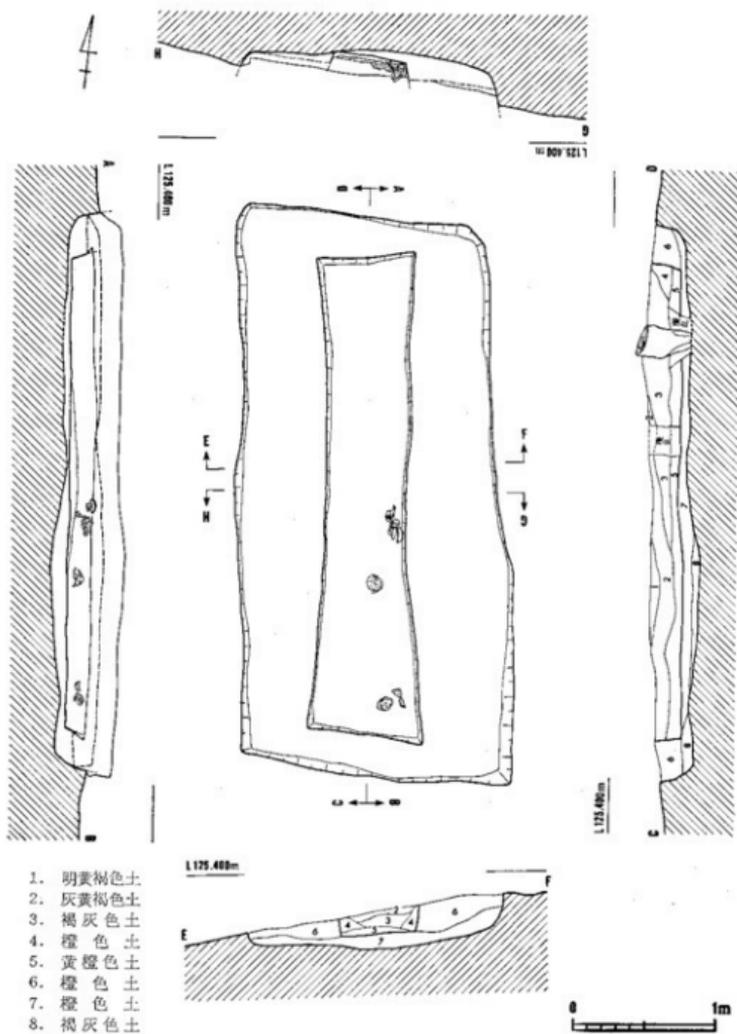
墳丘基底面の旧地形は、2段に掘り込まれている。まず旧地形面を深さ20cm程度掘り込み削平し、さらにちょうど墓壇の位置にあたる旧地形面部分を4.2×2m、深さ32cmの規模で掘り込んでいる。墳丘西側下方の基底面の整形は、旧表土（第24層）を削って墳丘裾部を整形している。

墳丘の盛土の作業工程は、2段階に大別されると考えられる。第1段階は、墳丘西側II・III区にかけて、第16・17・21・23層の4層の土を盛り、いったん平坦面を作っている。平坦面の規模は、2段目の旧地形掘削部分から東西方向約3m、南北方向は推定で約8.5mを測る。続いて第2段階で、さらに盛土を行い墳丘を完成させている。

本墳は、上記したとおり、墳丘断ち割り調査の結果、旧地形整形段階の弧状の溝が検出されたことは、弧状の溝の性格が、斜面と墳丘を両する機能と、もうひとつ墳形および規模を、旧地形段階で想定していたとも考えられる。おそらく、群中の他の古墳についても同様の機能をもっていたと考えられる。ただ本墳については墳丘盛土の際、III区部分については、墳形・規模の修正がなされたと思われる。盛土は、先に記したように2段階の工程を踏んでいる。第1段階の盛土が古墳基底面の2段目の掘削部分と高さを同一にしている例は、群中では4・5・9号墳に類例がある。

3. 埋葬施設

本墳の埋葬施設は他の古墳と同様、木棺直葬墓である。墓壇は、墳頂部平坦面のほぼ中



第12圖 2号墳埋葬施設

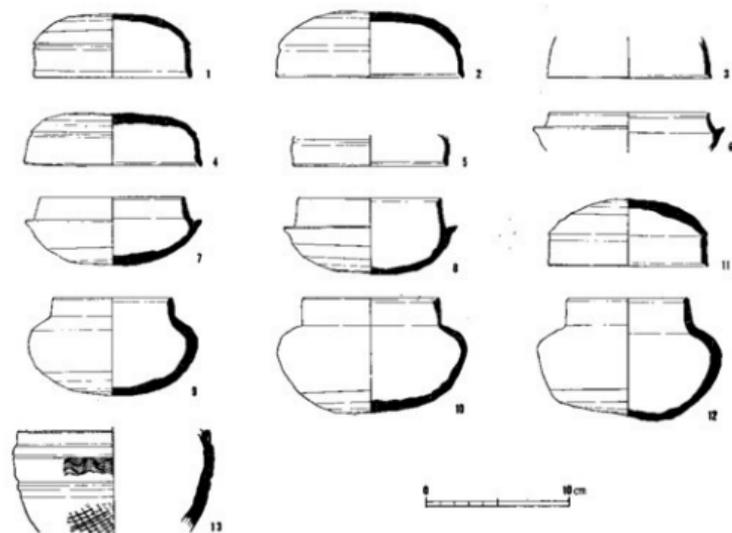
央に位置している。

墓広の規模は、南北主軸方向で長さ3.95m、中央部幅1.19m、確認面からの深さ18cmを測り、平面形は多少ゆがんだ長方形を呈する。

木棺は墓広のほぼ中央に埋置され、主軸をN3°30'Wに向けている。木棺の規模は、全長3.37m、北木口幅68cm、南木口幅80cm、棺中央部幅56cmを測り、中央部が狭くなっている。墓広内確認面からの深さは5~11cmで、木棺底面の北側と南側では比高差が3cmで、北側が僅かに高い。また木棺の両木口幅で、南木口が大きいのは、松ノ木古墳群の中では本墳のみである。

4. 遺物出土状況

遺物は、棺内および弧状の溝内より出土した。棺内では、棺中央部東側板付近より須恵器短頸壺1点、坏2点、蓋4点が上方から流れ込んだ状態で出土している。また棺中央部より南側で須恵器短頸壺1点、坏1点、蓋1点がそれぞれ出土している。棺内より出土したこれらの遺物は、すべて埋土中より出土している。棺内の北側は木根による攪乱を受け



第13図 2号墳出土土器

層序が不安定なのに対し、南側は層序が安定している。棺内の南側、および中央部付近出土の遺物は、木根による攪乱を受けていないところから、棺内出土のこれらの土器は棺上ないしは墓坑上に埋置されていたと思われる。

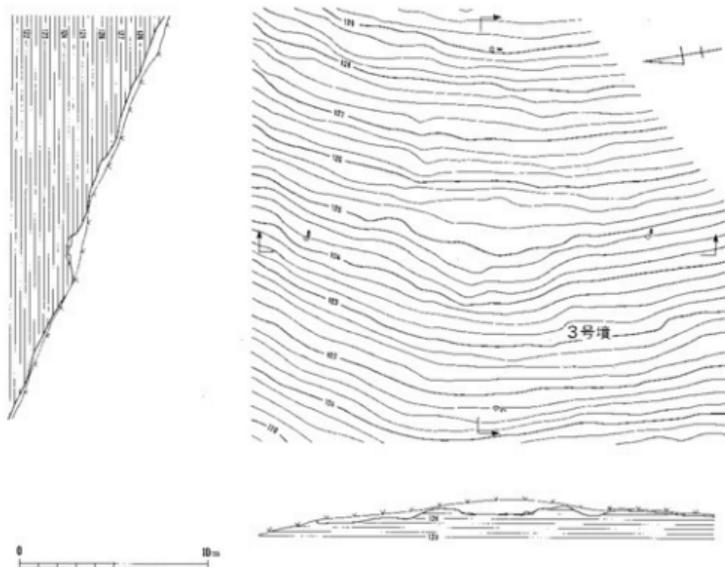
弧状の溝内埋土中より須恵器短頸壺1点、蓋1点、埴1点が出土した。これらの遺物は、出土状況から判断して、本墳の上方に位置する1号墳に関連する遺物と考えられる。

第4節 3号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、調査区の北東隅、標高123~126mを測る地点に位置し、調査区の北側を東から西方向へ延びる小尾根稜線上に立地する。この小尾根上には8・9号墳がある。本墳が立地する小尾根の傾斜角は、約20°を測る。本墳の東側上方約8mのところは、箱式石棺が近接し、また南側約14mの地点には、本墳とはほぼ同一標高で2号墳が並列して位置する。他の古墳と異なり、近接する古墳はない。

本墳は調査前の観察で、標高124.8~125.8mにかけて等高線が舌状に張り出し、10×4.7mの範囲で平坦面が認められる。平坦面から西側下方は、急傾斜になり、123m付近で傾斜は緩やかになる。墳丘西側の裾部線は、ある程度確認された。斜面下方の西側より、概観して約2m、北側から概観して高さ30cm程度の高まりが顕著に見られ、古墳として識別



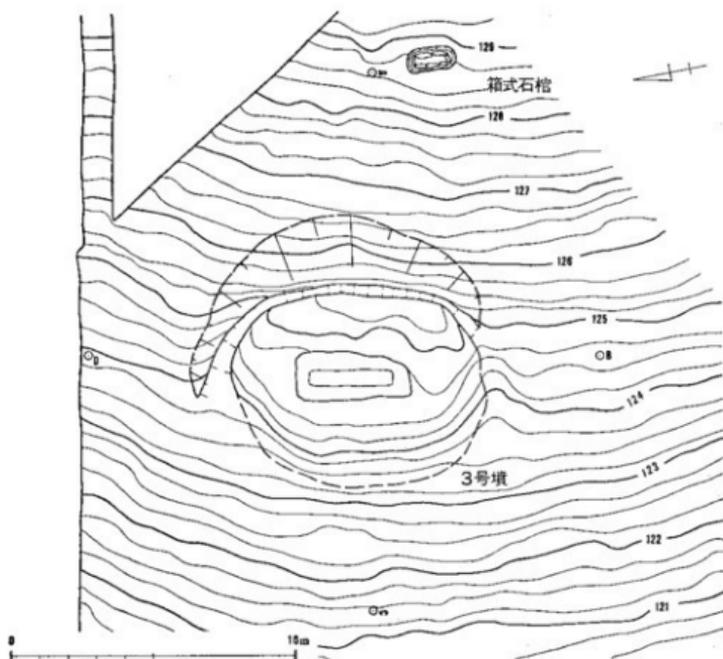
第14図 3号墳墳丘測圖(調査前)

された。

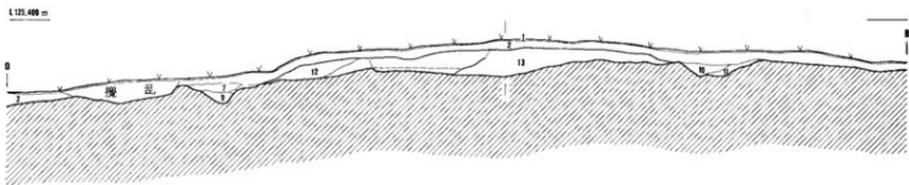
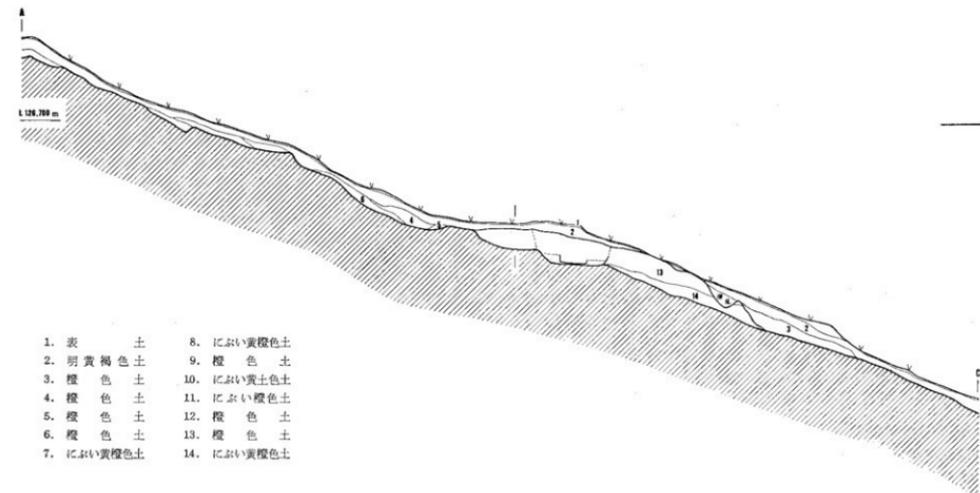
2. 墳 丘

墳丘は、東側を弧状の溝で囲し、北側墳丘裾部から西側墳丘裾部にかけて木根による二次的な攪乱や、盛土の流出などの破壊を受けており、墳丘の遺存状況は悪い。残存する墳丘からその規模を推定すると、南北方向 8.8 m、東西方向は 7 m 前後で、平面形は、他の古墳と同様南北に長い楕円形を呈すると思われる。高さは東側弧状の溝底より 10 cm、西側墳丘裾部より 2.1 m を測る。

古墳構築時の斜面傾斜は約 20° と推定され、他の古墳と比べ比較的緩傾斜地に築造されて



第15図 3号墳墳丘測量図(調査後)



第16図 3号填土层断面図

いる。しかし斜面に築造されていることには変わりなく、他の古墳と同様旧地形の整形は複雑である。

旧地形の整形は、大別して墳丘東側の斜面上方の削り出し、墳丘を囲する弧状の溝の掘削、墳丘基底面の掘削という3つの作業が行われている。

墳丘東側、斜面上方の削り出しは、標高126.7m付近を上限として幅10.5m、高さ1.3mの規模で半円形に掘削されている。この削り出しは、2回に分けて行われている。旧地形面を約30cm程度浅く削り出した後、標高126m付近でさらに旧地形面を深く掘り下げている。

墳丘の東側墳丘裾部に沿って弧状に掘削された溝は、I・IV区にかけて墳丘を約8周する形で検出された。溝はI・IV区境界付近で旧地形面を約15cm、I区南側で約30cm、IV区北側で約40cm程度掘り下げ、I・IV区側に進むに従って深くなっている。断面形は浅皿状、「V」字状と一定していない。2次の攪乱を受けているIV区北側の溝を除いた溝幅は30～50cmを測る。

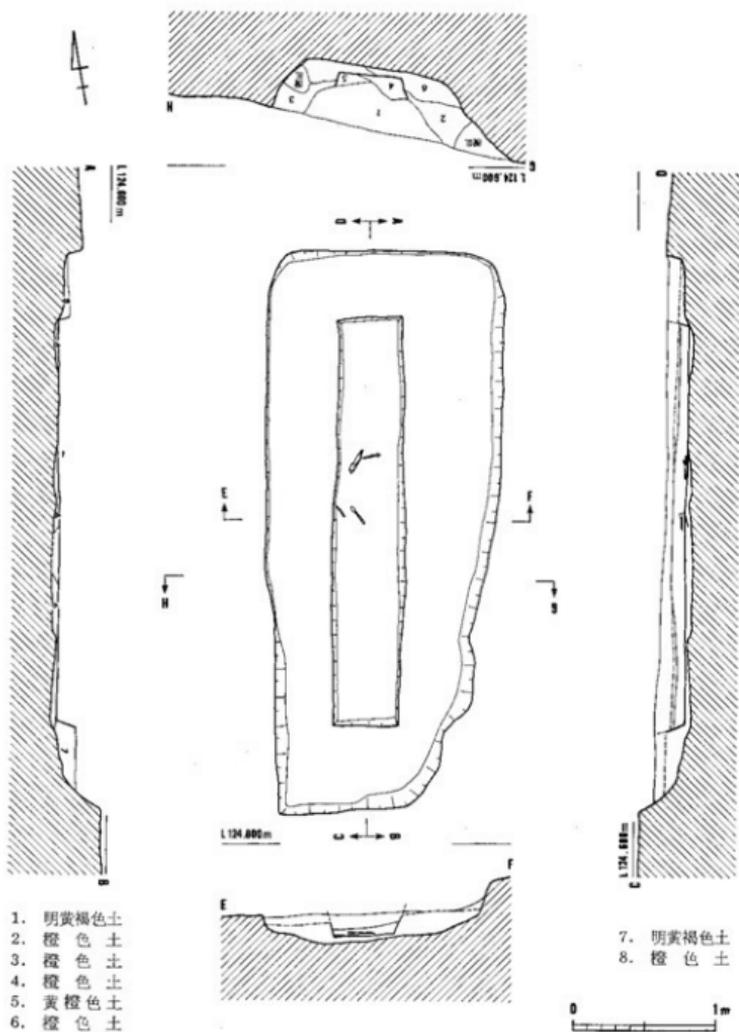
墳丘基底面の旧地形は、2段に掘り込まれている。まず、旧地形面を18cm程度掘り込み、平坦面を作っている。この平坦面の削平は、I区北側～IV区に亘って施され、I区南側は旧地形が岩盤層であるためか、I区南側には及んでいない。2段目の掘り込みについては、墳丘盛土後の墓壇掘削が旧地形面まで及んでいるため、旧地形整形の段階で形成されたかは不明である。

墳丘は、まず墳丘西側の基底面に第14層、13層の順で盛土を行い、さらに墳丘北側の裾部付近には第12層が貼られ、墳丘裾部を補強している。

本墳は、5号墳と同様、墳丘の遺存状況は悪く、墳丘の規模、旧地形整形などの点で、不明瞭な部分が多かった。墳丘の盛土については、今回調査した古墳のなかでは極めて粗雑な作りであったことが指摘できる。

3. 埋葬施設

本墳は、他の古墳と同様、木棺直葬墓である。墓壇は、墳頂部平坦面の西寄りに位置している。墓壇の規模は、南北主軸で長さ3.95m、中央部幅1.60m、確認面からの深さは42cmを測る。墓壇の南東隅は、旧地形が岩盤であるため掘りきれなかったのか変形している。



第17图 3号填埋葬施設

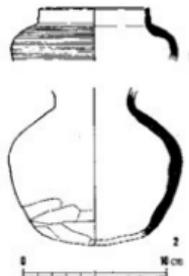
平面形は、南東隅が変形した不整の長方形を呈している。

木棺は、墓底のほぼ中央に埋置され、主軸を $N10^{\circ}E$ に向けている。木棺の規模は、全長 $2.89m$ 、北木口幅 $46cm$ 、南木口幅 $45cm$ を測る。墓底内確認面からの深さは、 $7\sim 14cm$ で木棺底面はほぼ水平である。

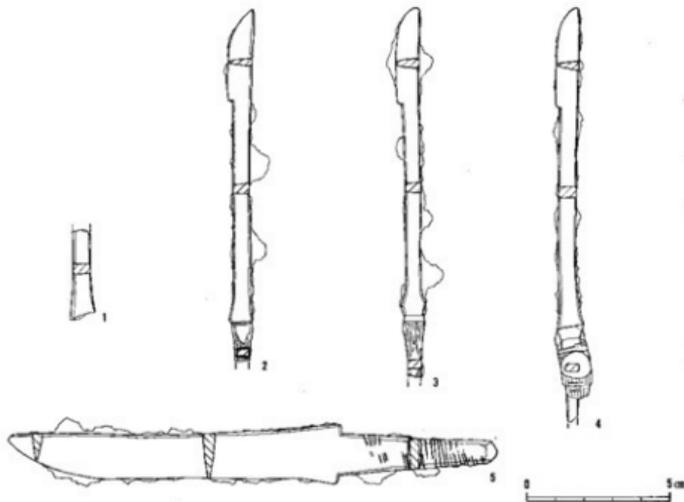
4. 遺物出土状況

遺物は、棺内および流土中より出土した。棺内遺物はすべて鉄製品で、棺内中央部の西側板付近より鉄鏃が2点、いずれも先端を南東方向に向け出土した。また棺内北側では、切先を東に向けた鉄鏃が1点、切先を南東に向けた刀子が1点出土している。これらの遺物は、いずれも棺底より検出されたが、原位置は動いていると思われる。

他にⅡ区流土中より須恵器短頸壺1点、Ⅲ区墳頂部流土中より壺が検出されたが本墳に伴うかは不明である。



第18図 3号墳出土土器



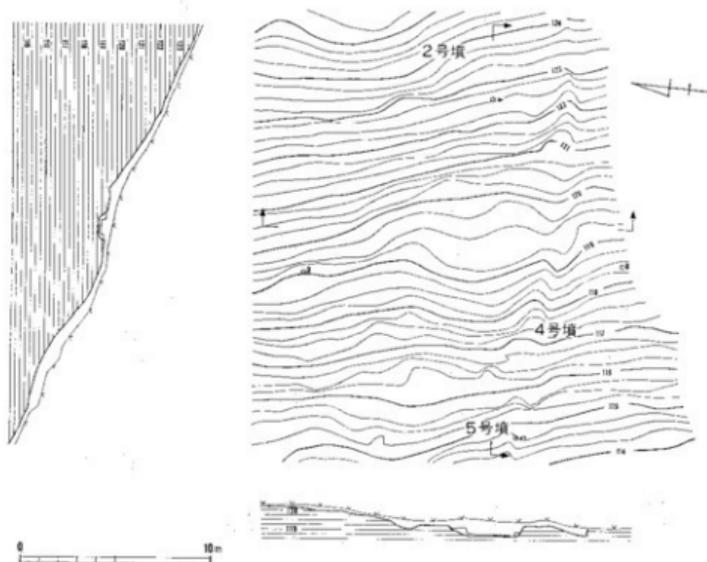
第19図 3号墳出土鉄器

第5節 4号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、調査区の南側に位置し、標高117~120.55m、傾斜角23°の斜面に立地する。今回調査した古墳のなかでは、南端に位置する。本墳の西側には5号墳が隣接し、東側は、斜面上方約5mのところには2号墳が位置する。

調査前の観察では、標高120.3~119.4m付近で等高線が舌状に張り出し、約7.5×3.5mの範囲で平坦面を作っている。この平坦部から西側は、急傾斜になり標高117m付近で傾斜は緩やかになり、西側の裾部についてはある程度推測することができた。しかし南側は、斜面上方に向かう小径により裾部は明確に判別できなかった。北側から模擬して2m

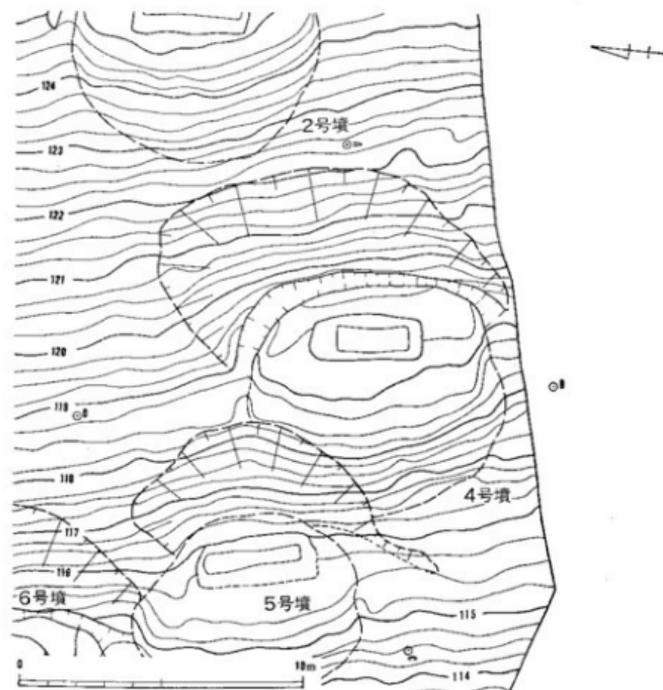


第20図 4号墳墳丘測量図（調査前）

程度の高まりと、墳頂部と思われた平坦面によって古墳として識別できた。

2. 墳 丘

本墳は、墳丘東側を弧状の溝で囲し、墳丘裾部を明確にしているが、西側Ⅱ・Ⅳ区の墳丘裾部線は、斜面上方に向かう小径や5号墳の削り出し部分によって破壊され不明瞭である。現存する状況から本墳の規模を推定すると、南北方向9.0m、東側溝底よりの東西方向は、8.4mを測ると思われる。平面形は不整の円形を呈する。墳丘の高さは、西側墳丘裾部より2.16mを測る。



第21図 4号墳墳丘測量図(調査後)

古墳構築時の斜面傾斜は約24°と推定され、立地条件としては急斜面である。

旧地形の整形は、大別して、墳丘の東側、斜面上方の削り出し、墳丘を画する弧状の溝の掘削、墳丘基底面の掘削という3つの作業工程からなる。

斜面上方の削り出しは、墳丘東側の斜面上方、標高122mを上限として、北東方向に傾いた半円形状に削り込まれ、削り出しの規模は、幅9.3m、高さ2.5mである。

墳丘の東側、墳丘基底面に沿って掘削された溝は、I区・IV区にかけて墳丘を約1/4周する形で検出された。溝は、I・IV区境界付近では旧地形面を18cm、南側I区で20cm、北側IV区で18cm程度掘り下げ、I・IV区側に進むに従い深くなっている。断面形は、浅い鍋底状を呈している。I・IV区境界付近は旧地形面の掘削は浅く、墳丘盛土が溝内におよび溝の一方の立ち上りとなっている。溝幅は、0.4~1mと一定していない。

墳丘基底面の整形は、深さ90cm程度旧地形を掘り込み、削平して8.2×6mの範囲で1段の平坦面を作っている。この平坦面の西側は、旧表土(第23層)が残っている。

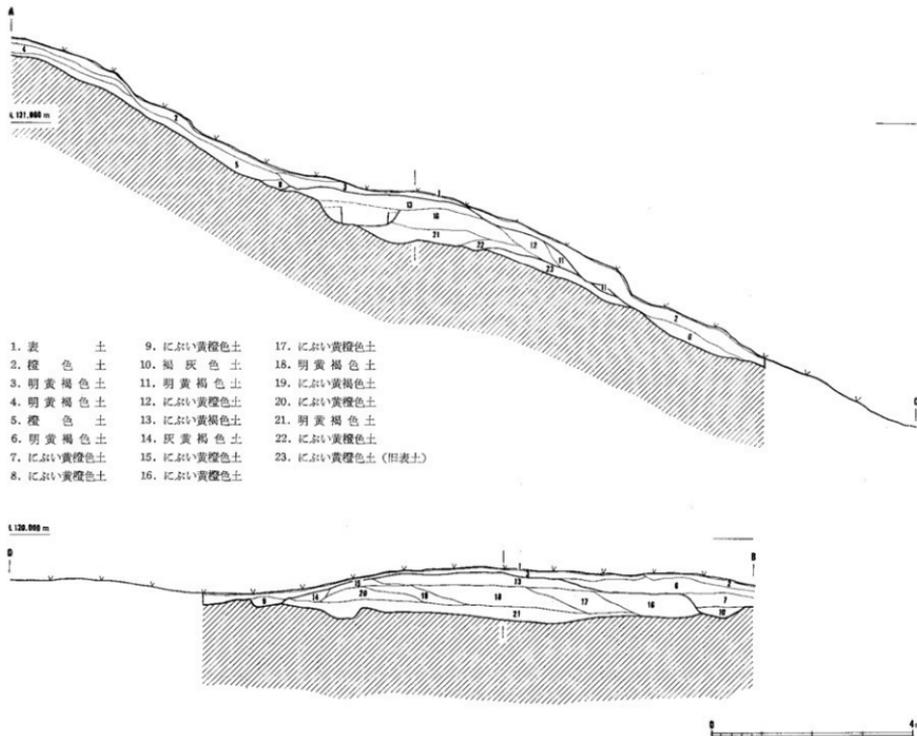
墳丘の盛土工程は、3段階に分けて行われている。第1段階は、墳丘基底面の平坦部分に2層(第21・22層)の盛土を行い整地している。第2段階では、墳丘北側より南に向かって順次5層(第16~20層)の土で盛土を行い、さらに墳丘斜面に盛土し、墳丘裾部を整えている。埋葬施設である墓壇は、この平坦面まで下げた段階で検出されており、第2段階の盛土が終了した段階で埋葬されたと思われる。第3段階では、第13層を盛土し、墳丘を完成させている。

本墳は、墳丘の西北部分を5号墳の削り出しによって切られており、5号墳より古い段階に築造されている。また、墳丘の遺存状態も良好で、旧地形整形から墳丘盛土、さらに埋葬および墳頂部の盛土といった古墳の構築方法を明確にできた古墳である。

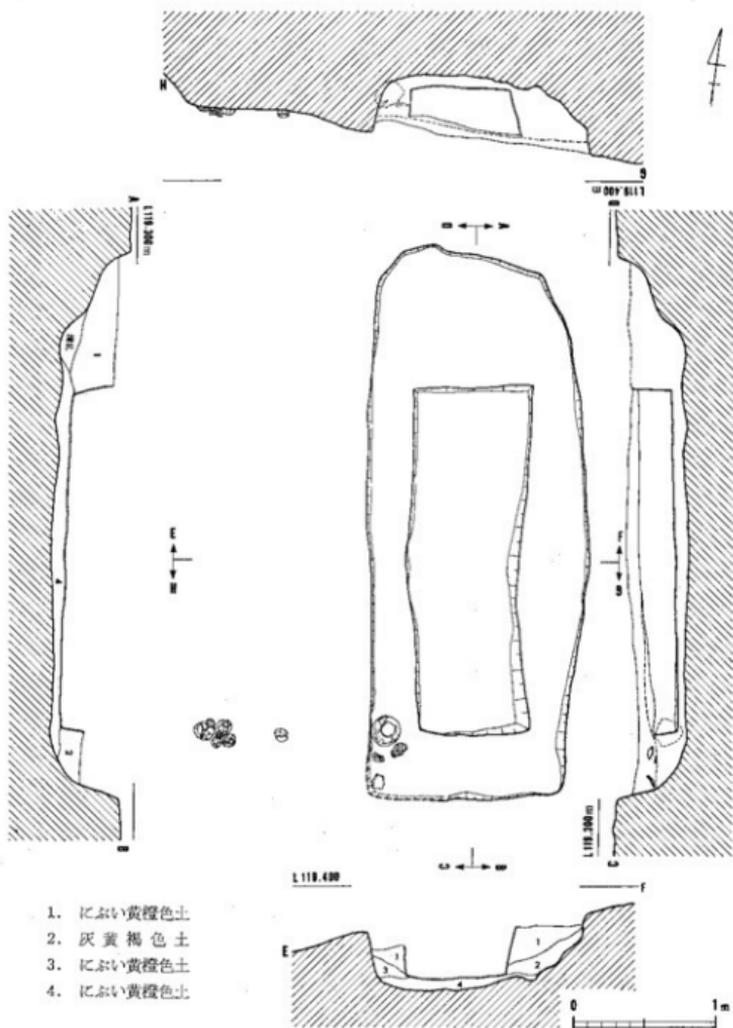
3. 埋葬施設

本墳は他の古墳と同様、木棺直葬墓である。墓壇は墳頂部平坦面の東寄りに位置し、墓壇の東側部分は、旧地形面を掘り込んでいる。墓壇の南西隅は、木根の攪乱によって破壊を受けている。墓壇の規模・形態は、長さが南北主軸方向で3.87m、中央部幅1.54m、墓壇確認面上端からの深さは55cmを測り、北側が多少不整の長方形を呈すると思われる。

木棺は、墓壇のほぼ中央に埋置され、主軸N6°Wに向けている。木棺の規模は、全長



第22回 4号填土層断面図

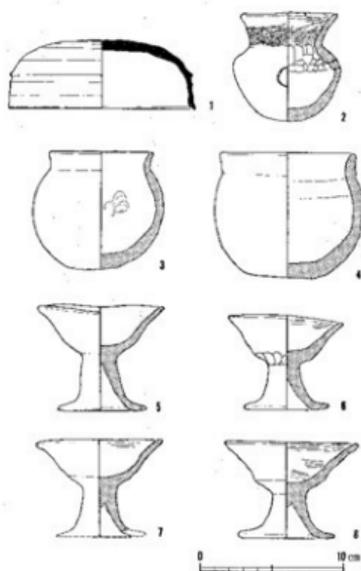


第23図 4号墳埋葬施設

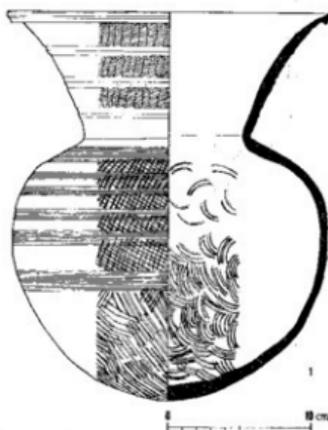
2.47m、北木口幅83cm、南木口幅76cm、木棺検出面からの深さ37cmを測り、中央で折れ曲った状況を呈している。木棺の北側と南側では比高差が8cmあり、北側へ進むに従い高くなっている。

4. 遺物出土状況

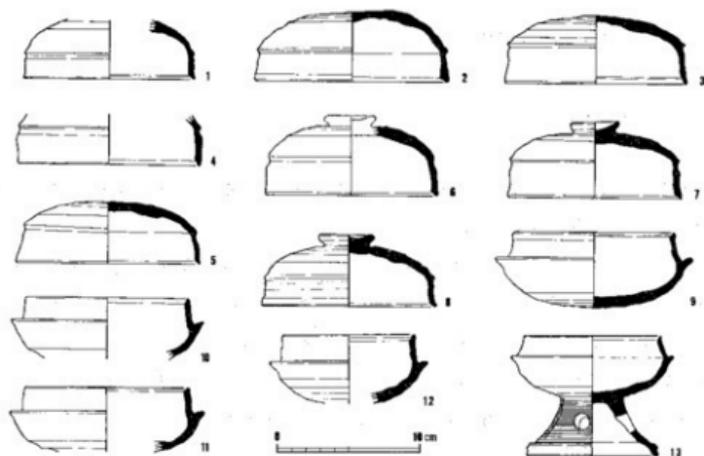
遺物は、棺外および墓坑上（Ⅱ区墳頂部）より出土し、棺内からは検出されなかった。棺外遺物は墓坑内南西隅より須恵器有蓋高坏1点、蓋7点、坏3点、広口壺1点がそれぞれ検出された。また、墓坑内埋土上層中より須恵器有蓋高坏1点、蓋1点が出土している。墓坑内南西隅より出土した遺物は、木根の擾乱を受け原位置は保たれていない。墓坑上より出土した遺物は、Ⅱ区墳頂部平坦面の南西隅より一括で出土した。遺物は、須恵器蓋1点、土師器小型高坏4点、小型壺2点、釥1点である。土師器高坏の出土例は、群中では6号墳の墓坑上の南側から、4点が1セットとして出土している。



第24図 4号墳墓坑上出土土器



第25図 4号墳棺外出土土器(1)



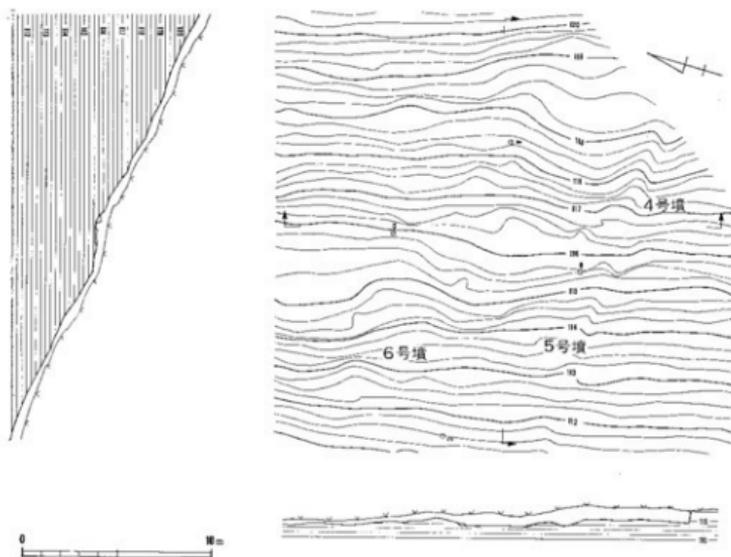
第26图 4号填棺外出土器(2)

第6節 5号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、調査区の南西隅に位置し、標高117~114mを測る斜面に立地する。本墳北側には6号墳が、東側には4号墳が隣接する。

墳丘は、標高115.8~116.5mにかけて等高線が西側に舌状に張り出し、約9×2.8mの範囲でいったん平坦面を作っている。平坦面から西側下方には、北側から観察して80cm程度の高まりが認められた。調査前の測量図による検討では、西側へ延びる緩やかな傾斜部の等高線から判断して、上方からの土石流が溜っていると考えていた。しかし、他の古墳に通常に見られるように、墳頂部と考えられる平坦部を有するところから、調査の対象とした。



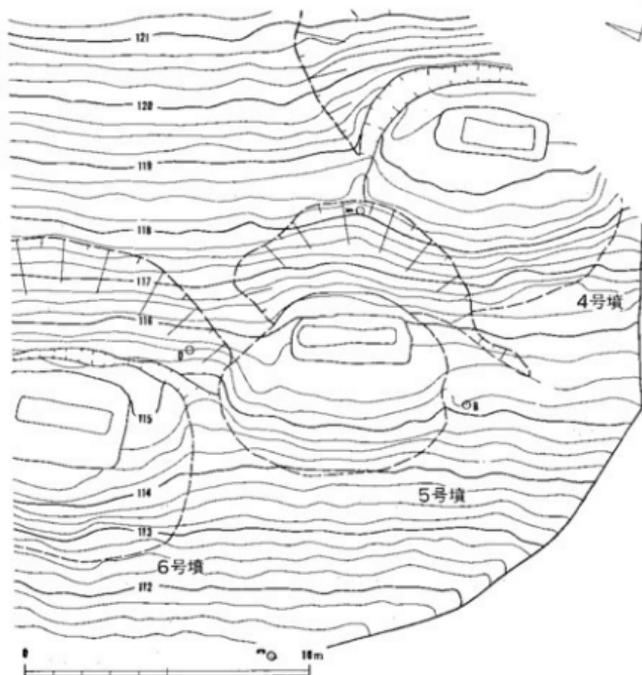
第27図 5号墳墳丘測量図(調査前)

2. 墳 丘

本墳は二次的な土石流のため墳丘の盛土が流失している。したがって本墳の正確な規模は不明瞭である。残存する墳丘の規模は南北方向8.1m、東西方向6.5mを測る。墳丘の平面形は、南北に長い不整の楕円形を呈する。残存する墳丘の高さは、西側墳丘裾部より1.6mを測る。

墳丘構築時の斜面の傾斜は約25°と推定され、かなりの急斜面に立地している。

古墳構築時の旧地形盤形は二次的な土石流の浸蝕によって詳細は不明瞭である。しかし大別して、墳丘の東側上方の削り出しと、墳丘基底面の掘削という2段階の作業工程が推察できる。



第28図 5号墳墳丘測量図(調査後)

斜面上方の削り出しは、墳丘東側の斜面上方、標高118.3m付近を上限として、幅8m、高さ2mの規模で、不整な半円形状に掘削されている。南側部分の削り出しは、4号墳Ⅲ区の墳丘を削り取っており、本墳が4号墳よりも新しいことが判明した。

墳丘基底面の整形は、旧地形面を深さ50cm程度掘り下げ、多少南側に下がる傾斜をもつ平坦面を作っている。この平坦面の規模は、南北方向約8m、東西方向約2.4mを測る。さらに、この平坦面の西側縁辺部の旧地形・旧表土（第23層）を削平し、墳丘基底面の整形を終了している。

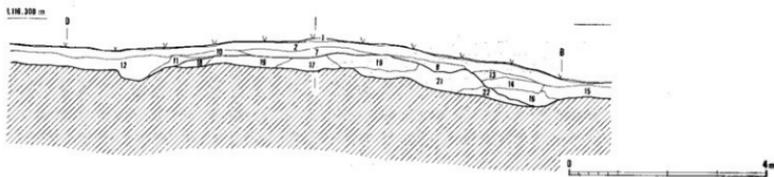
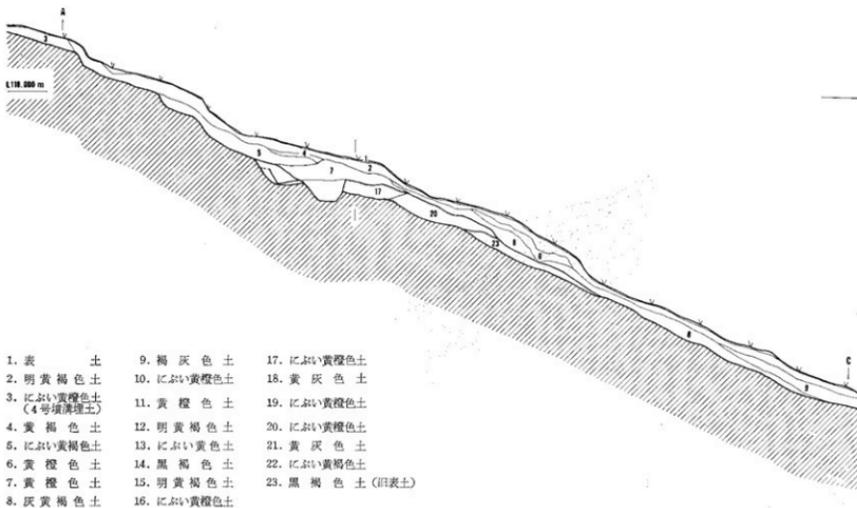
本墳は、他の古墳に見られるような弧状の溝は検出できなかった。しかし、二次的な斜面上方からの土石流によって墳丘盛土および旧地形面の流失が激しいため、消失した可能性も考えられる。今回の調査では、この点については解明できなかった。

墳丘の盛土についても上記したとおり、墳丘の遺存状況が不良のため、詳細は不明瞭である。しかし、おおよその盛土状況は推察できる。第1段階は、墳丘基底面に作られた平坦部西側、および傾斜して下がる平坦部分に第20～22層を盛土し、いったん整地している。第2段階では、整地された面の中央に第17層を盛土し、北および南側に向かって第18・19層で盛土している。

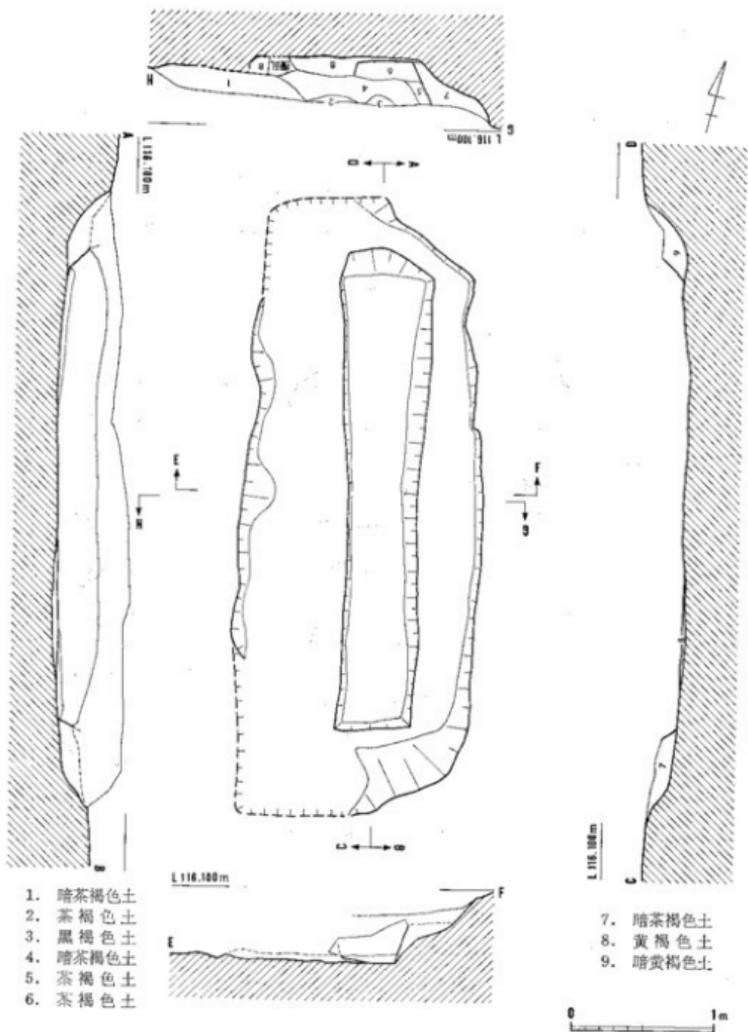
本墳は、群中の古墳のなかでも、遺存状態が悪く、詳細な調査の成果を得られなかった。しかし、盛土方法については他の古墳と異なっており、整地された墳丘基底面の中央より、北ないし南側に向けて規則性をもって盛土されている。このような一定の規則をもった盛土方法は、古墳群中では隣接する4号墳にも認められる。また、本墳は調査によって南側に隣接する4号墳より新しいことが判明した。

3. 埋葬施設

本墳の埋葬施設は、他の古墳と同様、木棺直葬墓である。墓壇は墳頂部平坦面の東寄りに位置する。墓壇および木棺は、斜面上方からの土石流および木根等の攪乱を受け、遺存状況は悪く、とくに西側部分については、流失している。残存する墓壇の規模は、南北主軸方向で長さ4.34m、中央部幅1.68m、確認面上端からの深さは52cmを測る。平面形は不整の長方形を呈していたと推察される。木棺は墓壇の中央よりやや東寄りに埋置され、主軸N13°30'Wに向けている。木棺の規模は全長3.40mを測る。北木口幅は65cm、南木口幅は52cmで北木口が長い。確認面からの深さは8～29cmを測り、木棺底面はほぼ水平であ



第29回 5号填土層断面図

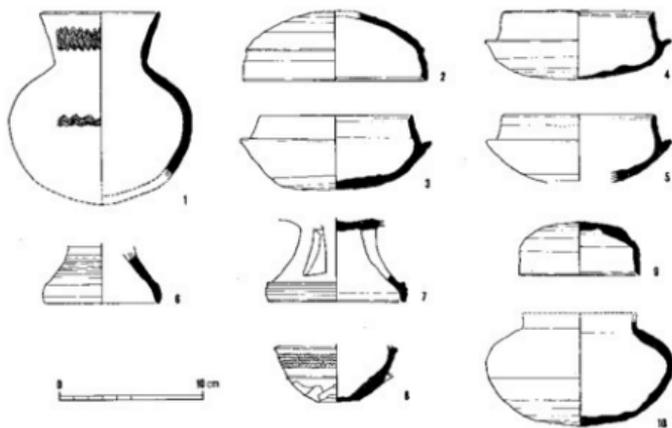


第30图 5号填埋葬施設

る。

4. 遺物出土状況

遺物は、すべて流土中（第2・4～15層）より出土した。出土した遺物は、須恵器直口壺1点、蓋2点、坏3点、高坏2点、把手付埴1点、短頸壺1点を数える。本墳より出土した遺物は、すべて流土中であり、本墳の墳丘、および埋葬施設が斜面上方からの土石流によって激しく破壊されていることを考え合わせると、本墳に伴うと判断できる遺物は皆無である。



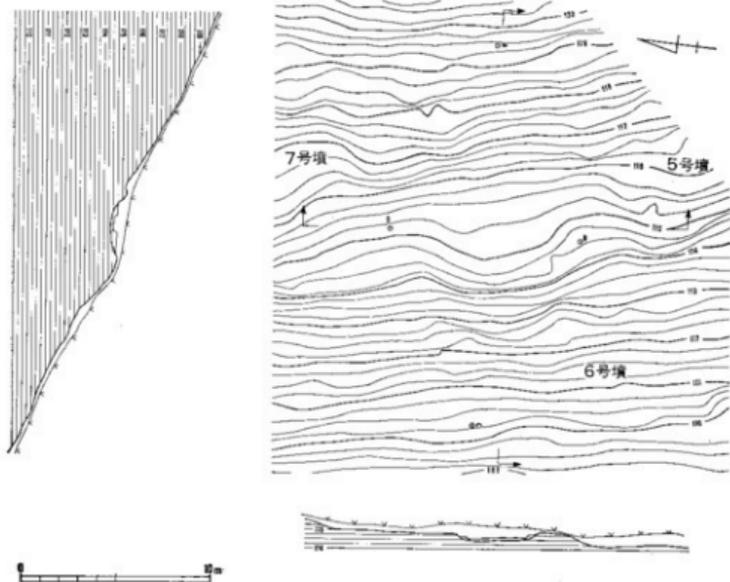
第31図 5号墳出土土器

第7節 6号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、調査区の南西隅に位置し、標高約114~116mを測る斜面に立地する。南側には、5号墳が隣接し、北側約5mのところ7号墳がある。

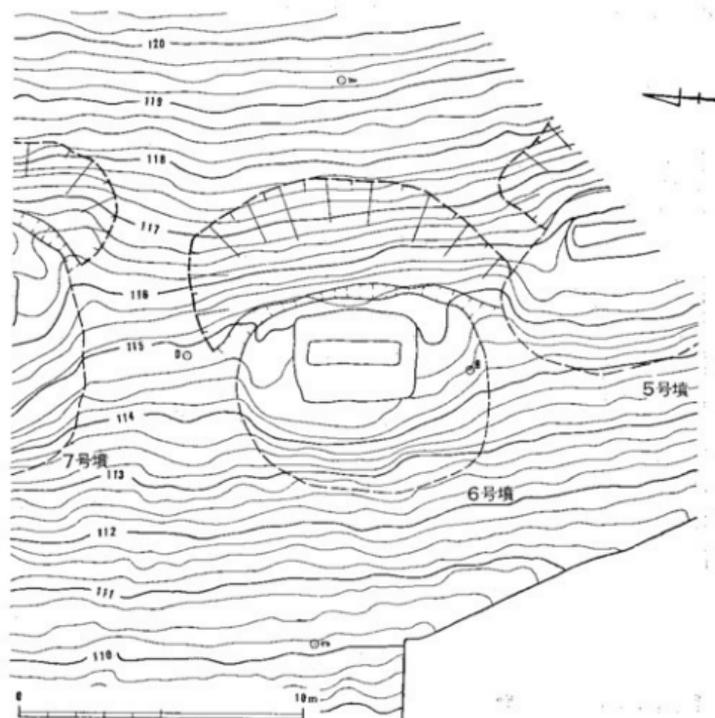
調査前の観察では、標高115~116mのあたりで等高線が南西方向に舌状に張り出し、約9×5mの範囲で平坦面を作っている。平坦面から西側は急に傾斜して、標高約114m付近で傾斜が緩やかになる。比較的墳丘裾部は明瞭であった。また、北側から概観して1m程度の高まりが認められ、占墳として容易に識別できた。



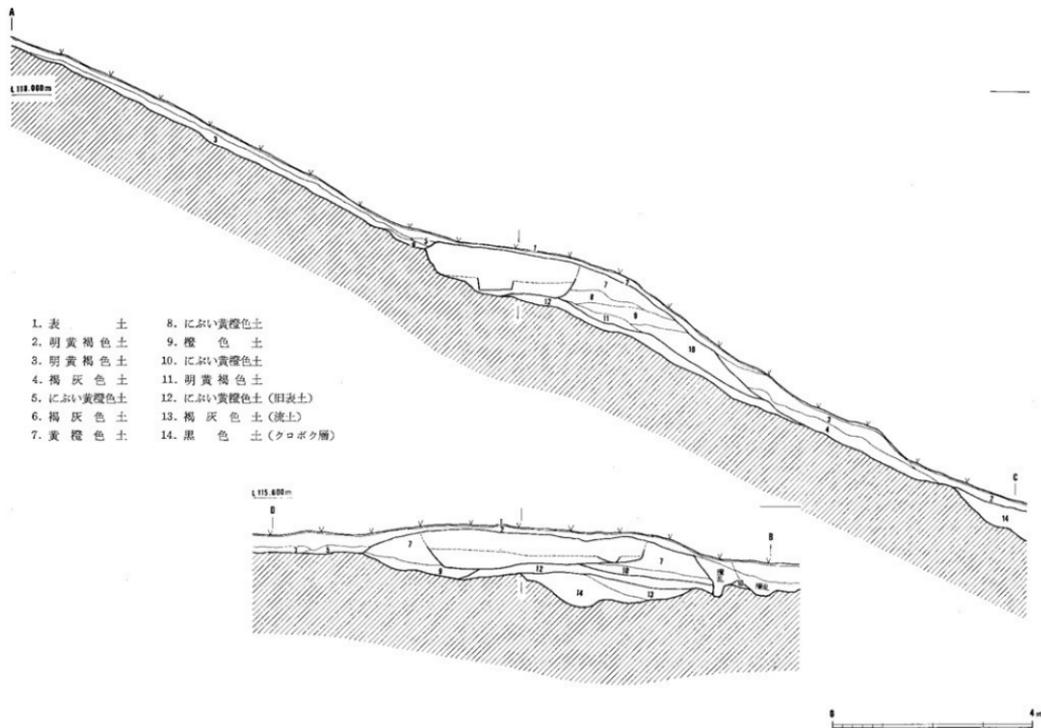
第32図 6号墳墳丘測量図(調査前)

2. 墳 丘

墳丘は、西側から概観して、中央より南側の墳丘斜面が、斜面上方より流れた土石流のため一部破壊されているものの、比較的良く遺存していた。本墳は、墳丘の東側が弧状の溝で画され、北側直区についても墳丘裾部は比較的明瞭である。しかし墳丘の南西側、Ⅱ区部分については、木根による擾乱を受け、墳丘の規模について、多少正確さを欠く。東西方向については、溝底中心から墳丘規模を測ると7.1m、南北方向は8.8mを測る。墳丘の平面形は、南北に多少長い楕円形を呈する。残存する墳丘の高さは、東側で溝底面から



第33図 6号墳墳丘測量図(調査後)



第34図 6号墳土層断面図

16cm、西側で3.4mを測る。

古墳構築時の斜面傾斜角度は約24°と推定され、他の古墳と同様、立地条件としては急斜面である。したがって古墳構築のための旧地形整形は、墳丘の東側、斜面上方部分の削り出し、墳丘を囲する溝の掘削、墳丘基底面の掘削という3つの作業工程からなる。

斜面上方の削り出しは、墳丘の東側標高118.8m付近を上限として、幅11.4m、高さ1.84mの規模で半円形に削り出されている。削り出し部分の南端は、5号墳北側の墳丘を切っており、5号墳より新しいことが判明した。

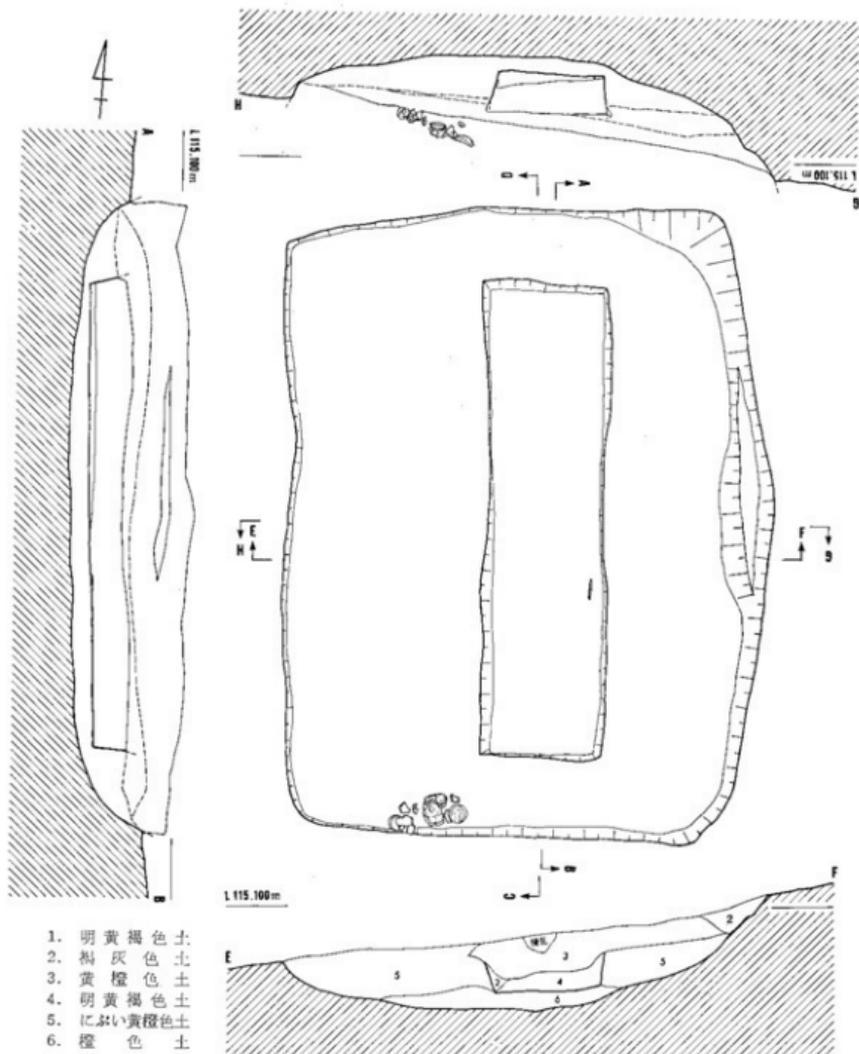
墳丘東側部分に沿って弧状に掘削された溝は、I・IV区にかけて検出され、墳丘をほぼ1/4周する。墳丘の西側、II・III区では確認されなかった。溝は、I・IV区の境界付近では、旧地形面を約20cm程度削平し、溝の西側に盛土することによって、溝の一方の立上りとしている。溝はそれぞれ北と、南側に進むに従い、旧地形面を直線5cm程度、断面鍋底状に浅く掘り込んでいる。溝の幅は0.3cm~1mを測り一定ではない。墳丘基底面の整形は、墓壇の掘削が旧地形面まで達しているため詳細は不明瞭である。しかし、第9・10層の盛土のあり方や、他の古墳の基底面整形状況から考えると、旧地形整形の段階で段状に掘り込まれている可能性は考えられる。

墳丘の盛土作業は、2段階の作業工程に大別される。第1段階は、本墳西側のII・III区にかけて第9~11層の4層で盛土を行い、いったん平坦面を作っている。平坦面の規模は、墓壇の掘削によって不明であるが、南北方向は約7.8mを測る。その後第2段階で、さらに盛土を行い墳丘を完成させている。また、墳丘西側部分は墳丘および旧地形を削り、墳形を整えている。

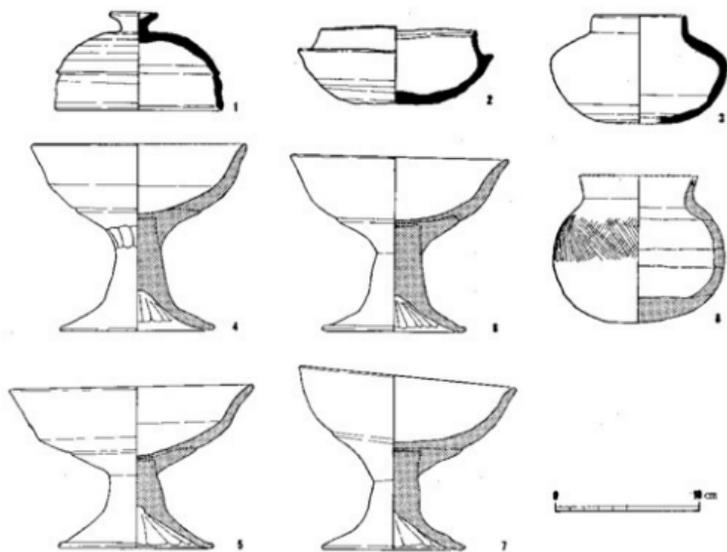
本古墳は調査の結果、隣接する5号墳の斜面上方の削り出しが、墳丘の北側を切って構築され、5号墳より新しく築造されている。この事実から、調査区の南東隅に立地する古墳は、4・5・6号墳の順で構築されていることが判明した。また、墳丘南側の旧地形面は、凹地が形成されており、比較的締ったクロボク層の堆積があり、古墳はクロボク層の上層に、時間をおいて構築されている。

3. 埋葬施設

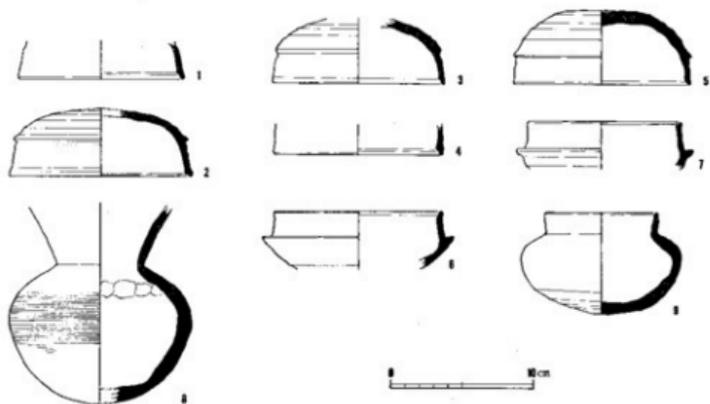
本墳の埋葬施設は他の古墳と同様、木棺直葬墓である。墓壇は、墳頂部平坦面のやや東寄りに位置し、今回調査した古墳のなかでは、規模の点で最大のものである。墓壇の東側



第35图 6号墳埋葬施設



第36图 6号墳墓出土土器



第37图 6号墳出土土器

部分は、旧地表面を2段に削り込み、長さ1.5m、最大幅12cmの狭い平坦部を築いている。墓塚は、長さ4.19m、中央部幅3.19m、確



第38図 6号墳出土鉄器

認面上端からの深さ82cmを測り、東側が多少誤らんだ剛丸長方形を呈する。

木棺は、墓塚の中央よりやや東側に埋置され、主軸N3°Wに向けている。木棺の規模は、全長3.17m、南木口幅79cm、北側木口幅81cm、墓塚内確認面からの深さ21cmを測る。木棺底面の北側と南側では、比高差が7.5cmあり、北側に進むにしたがって高くなっている。

4. 遺物出土状況

棺内遺物は、木棺中央よりやや南側の東側板に沿って切先を北側に向け、刀子が1本置かれていた。

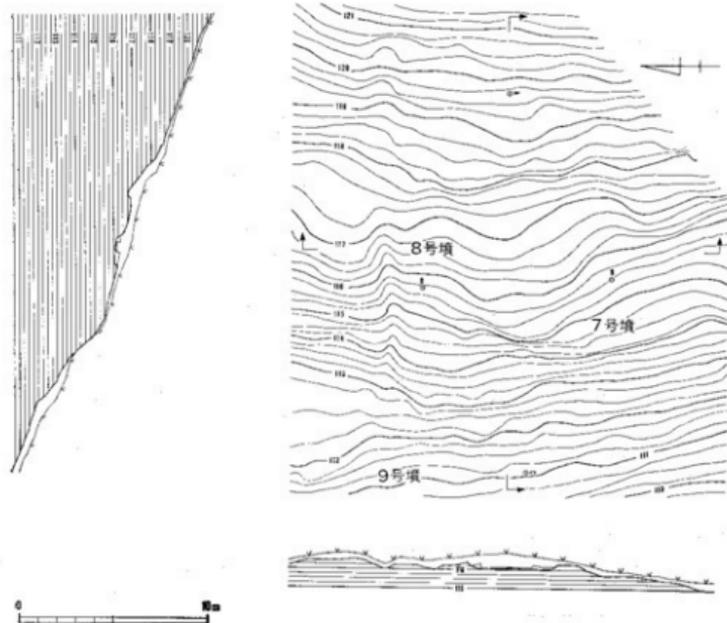
墓塚上遺物は墓塚内南側より、須恵器坏1点、蓋1点、短頸壺1点、土師器高坏4点、小型壺1点が出土している。また、墓塚内埋土中より、須恵器蓋2点が検出されている。また、弧状溝埋土中より須恵器坏1点、蓋2点、短頸壺1点が出土している。

第8節 7号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、調査区の北側を、東側斜面上方より、西側へ延びる小尾根の南側斜面に位置する。標高115~118mを測り、古墳群中では5・6・8号墳とほぼ同一標高にある。木墳の北側の小尾根稜線上には、8・9号墳が近接している。また、東側の斜面上方の約14.5mの位置には3号墳がある。

調査前の観察では、標高115~117.6mにかけて等高線が大きく西側に張り出し、約9×10mの範囲で墳頂部と思われる平坦面が認められた。平坦面より西側には、墳丘の盛土が

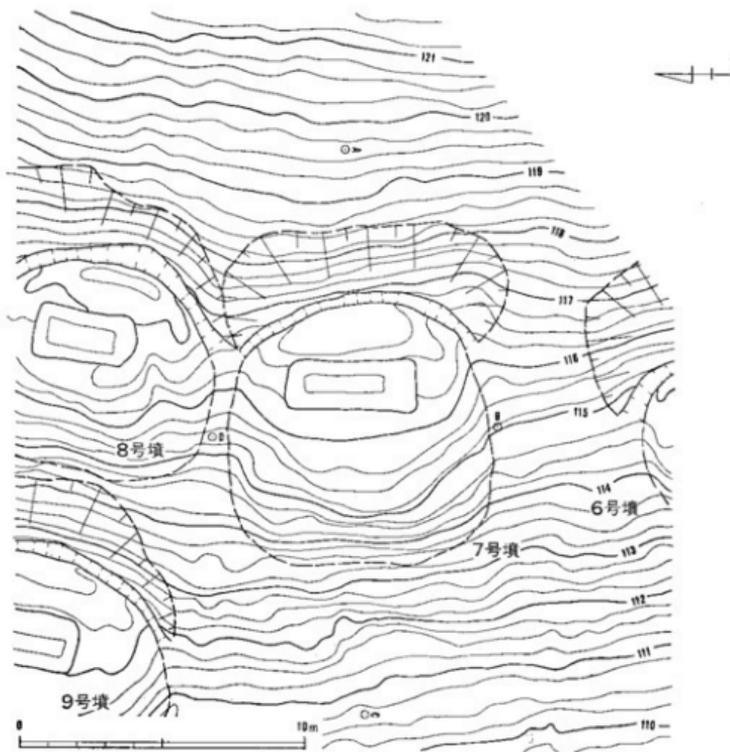


第39図 7号墳墳丘測量図(調査前)

露呈している。南側から見ると3m程度の高まりが見られ、古墳として識別された。

2. 墳丘

墳丘は、東西9.2m、南北9.2m、高さ3.0mの規模で、平面形は多少東西に長い不整の円形を呈し、視覚的にも優位な立地も手伝っているためか、群中では比較的目的立った存在である。



第40図 7号墳丘測量図(調査後)

断面観察から、墳丘は基本的に3段階に構築されていることがわかる。まず墳丘はほぼ中央部より斜面下方にかけて旧地形を平坦に掘削し、その崩土を下方に盛って墳丘基底部をほぼ決める第1段階。さらに上方の斜面を大きく削り出し、墳丘上部を盛る第2段階。最後に第2段階で削り出した旧地形と墳丘部を明確に区画する弧状の溝を掘削し、墳形を整える第3段階である。

見かけの上では、旧地形はあらかじめ2段に掘削されたように見えるが、これもこのような墳丘構築法の結果であると言えよう。また、第1段階で削り出された平坦面は、墳丘の位置をほぼ規定するものであるため、他の7基の古墳例では、墳頂部平坦面のほぼ中央に位置する埋葬施設と重なっているのだが、後述するように、7号墳では、埋葬施設がかなり奥まった位置にあり、異なった様相を呈する。

墳丘と削り出し部を区画する弧状の溝は、北端部で8号墳の南端と重なって終結するが、この部分からは7号墳と8号墳の構築の前後関係は明らかにできなかった。この弧状溝は、墳丘を約4周する形で検出され、検出面からの深さは20~24cm、幅は30~60cmと一定ではない。

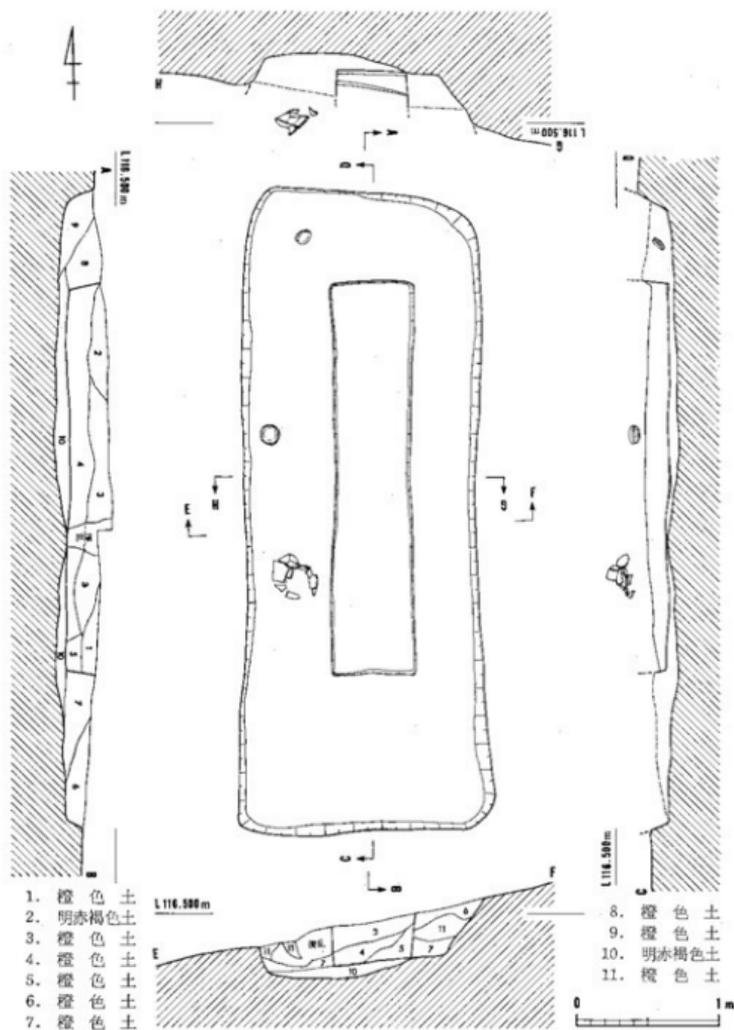
3. 埋葬施設

木棺を墓竈内に直葬している。墓竈は、墳頂部やや奥の斜面上方より掘削されており、規模は南北主軸方向で4.50m、中央部幅1.61m、深さは最深部で57cmである。墓竈は、南北方向には、ほぼ水平に掘削されているが、東西方向は、かなりの傾斜をもっている。このため棺を置く際にかんがりの土を置き、竈底をそろえている。また、7号墳の墓竈は、旧地形をかなり掘削しており、ほとんどが盛土部分で掘削をおさめる他の古墳との相違が特徴的である。これは、墳丘や埋葬施設の構築法の違いによるものではなく、埋葬施設が少し奥まった位置にあるためであろう。

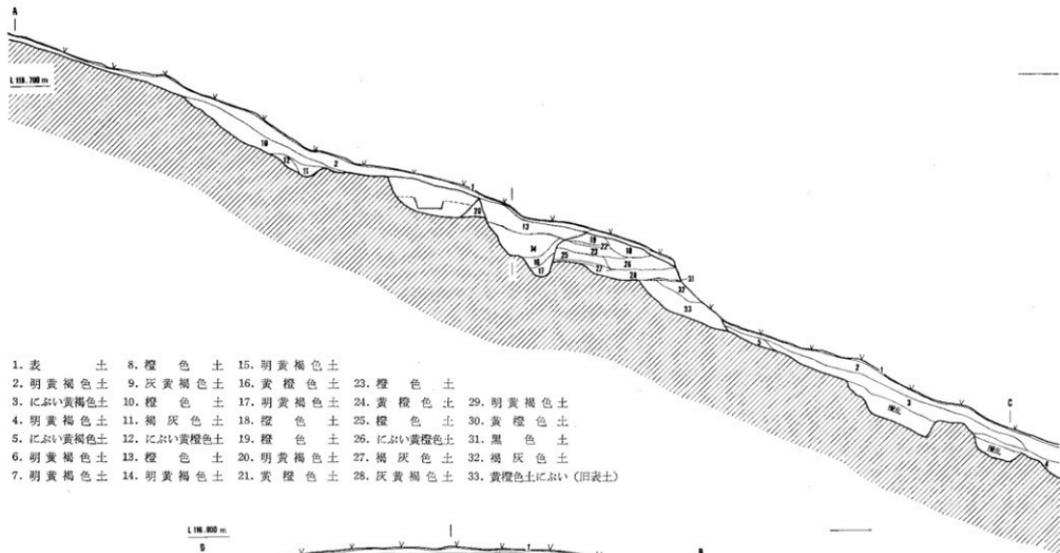
木棺は、この墓竈内中央のやや北よりに置かれる。主軸N1°Eとほぼ北に向けており、その全長は、2.77m、幅は北木口で56cm、南木口でも56cmである。棺からは、頭位方向を知ることはできなかった。

4. 遺物出土状況

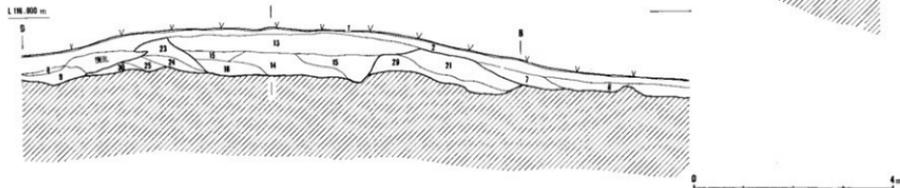
棺外からは、墓竈内西側、南寄りに須恵器広口壺1点が検出されたのをはじめ、墓竈内



第41图 7号墳埋葬施設

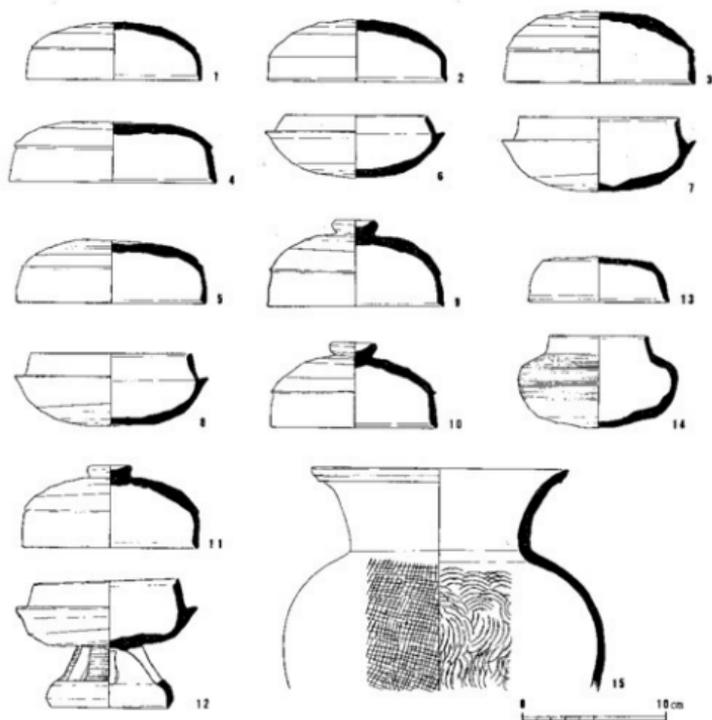


- | | | |
|------------|-------------|-------------------|
| 1. 表 土 | 8. 橙 色 土 | 15. 明黄褐色土 |
| 2. 明黄褐色土 | 9. 灰黄褐色土 | 16. 黄 橙 色 土 |
| 3. におい黄褐色土 | 10. 橙 色 土 | 17. 明黄褐色土 |
| 4. 明黄褐色土 | 11. 褐 灰 色 土 | 18. 橙 色 土 |
| 5. におい黄褐色土 | 12. におい黄橙色土 | 19. 橙 色 土 |
| 6. 明黄褐色土 | 13. 橙 色 土 | 20. 明黄褐色土 |
| 7. 明黄褐色土 | 14. 明黄褐色土 | 21. 黄 橙 色 土 |
| | | 22. 灰黄褐色土 |
| | | 23. 橙 色 土 |
| | | 24. 黄 橙 色 土 |
| | | 25. 橙 色 土 |
| | | 26. におい黄橙色土 |
| | | 27. 褐 灰 色 土 |
| | | 28. 灰黄褐色土 |
| | | 29. 明黄褐色土 |
| | | 30. 黄 橙 色 土 |
| | | 31. 黑 色 土 |
| | | 32. 褐 灰 色 土 |
| | | 33. 黄橙色土におい (田表土) |

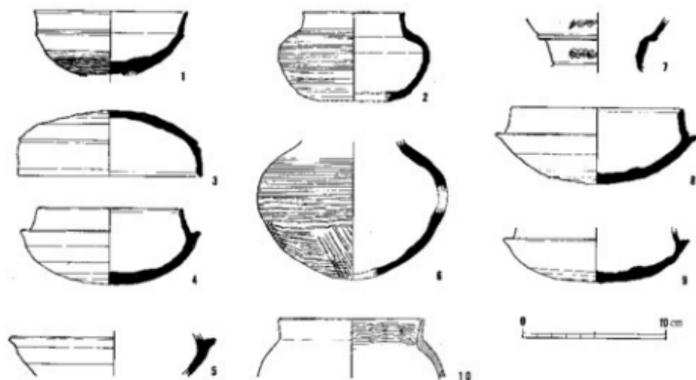


第42図 7号墳土層断面図

埋土中より須恵器蓋9点、坏3点、有蓋高坏1点、短頸壺1点が出土している。他には、弧状溝内より、須恵器坏2点、壺1点、土師器壺1点が、それぞれ上方より流れ込んだ状態で検出された。



第43図 7号墳外出土土器



第44图 7号填出土器

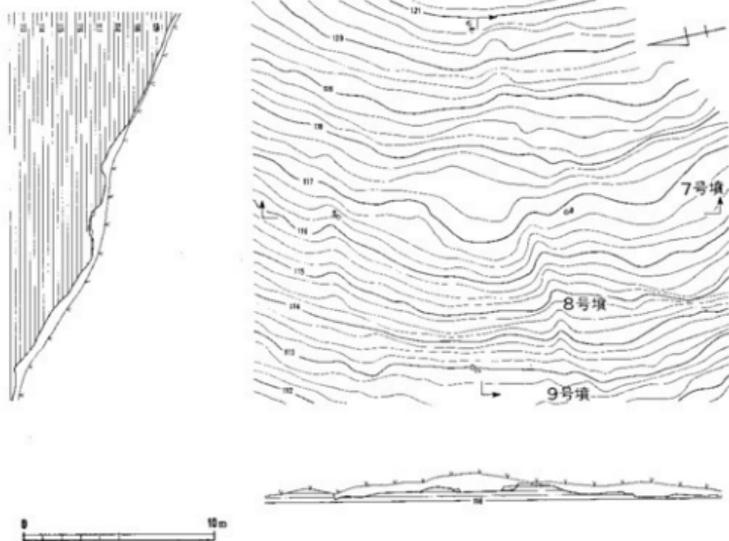
第9節 8号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は調査区の北側、東側斜面上方より西側下方へ向かって延びる小尾根稜線上に立地する。標高は、114~118 mを測り、古墳群中では、5・6号墳と同一標高に立地している。西側は、7・9号墳と近接し、東側斜面上方約16mの位置には3号墳がある。

調査前の観察では、約7×8 mの範囲で墳頂部と思われる平坦面と、北側から見て約2 mの高まりが識別できた。平坦面の南側には斜面上方に向かう小径が走っており、墳丘の一部が破壊されている。

2. 墳丘

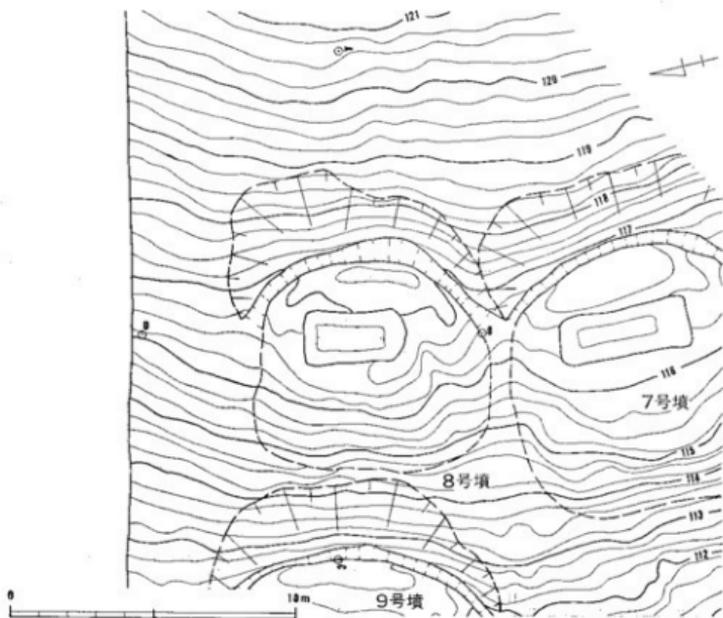


第45図 8号墳墳丘測量図(調査前)

墳丘規模は、東西7.5m、南北8.3mで、基底部から現存墳頂部までの高さ1.8mを測り、平面形はほぼ正円形を呈する。隣接する7・9号墳に比べると、やや小規模である。

第1段階の旧地形整形では、傾斜方向で幅2.4mの平坦面が削り出されている。第2段階の斜面上方の旧地形の削り出しは、幅9.4mにわたっており、高さ2.6mにまで達している。墳丘部を画する弧状の溝は、幅40cmから90cmと一定しておらず、深さは16cmを測る。南側で7号墳と接するために溝端部を共用しているが、前後関係は明らかではない。

墳丘の盛土は、まず2層（第12・13層）の土で第1段階の旧地形整形で掘削された平坦面上に盛土し、さらに10・11層の2層で墳頂部から墳丘裾部にかけて盛上している。この土より上層は斜面上方よりの流土によって押し流されており詳細は不明である。



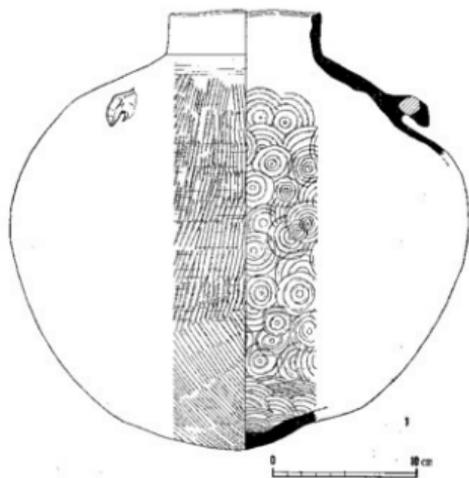
第46図 8号墳墳丘測量図（調査後）

3. 埋葬施設

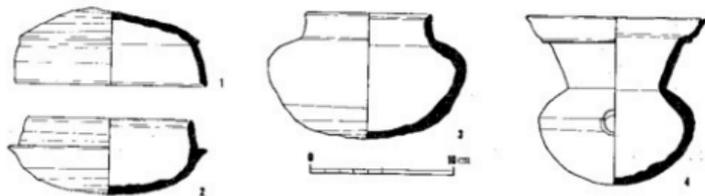
墳頂部の平坦面はほぼ中央に木棺を直葬する。墓域は、他の古墳と同様に等高線と平行する南北方向に主軸を置き、長さ3.62m、幅は中央部で1.73mを測り、平面形は、やや不整形な長方形に掘削されている。墳丘自体の自然流出や木根等による擾乱のため、深さは明らかでないが、現存する最深部では40cmである。

木棺は、この墓域内のやや北寄りに主軸をN 11° 30' Eに置かれ、その大きさは、長さ2.36m、北木口幅89cm、南木口幅73cmである。木棺の木口幅の広い方を頭位とする考え方を認めれば、北側に頭位を置いたものと考えられよう。また、木棺は墓底との間に土を1層挟んで置かれているが、これは墓底底の不均等な掘削による凹凸を平均化し、棺を水平に埋置するための作業によるものと思われる。

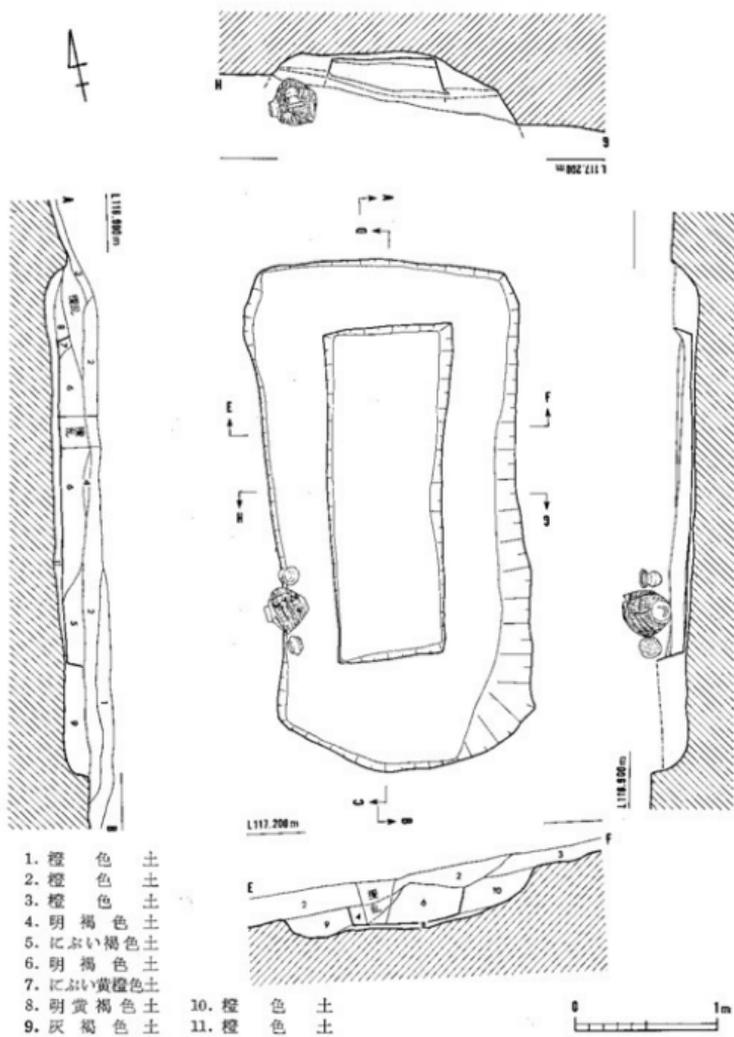
8号墳の墓域および木棺痕は、その幅ではほぼ平均的な数値を示すが、長さはいずれも群中では最短で特徴的である。



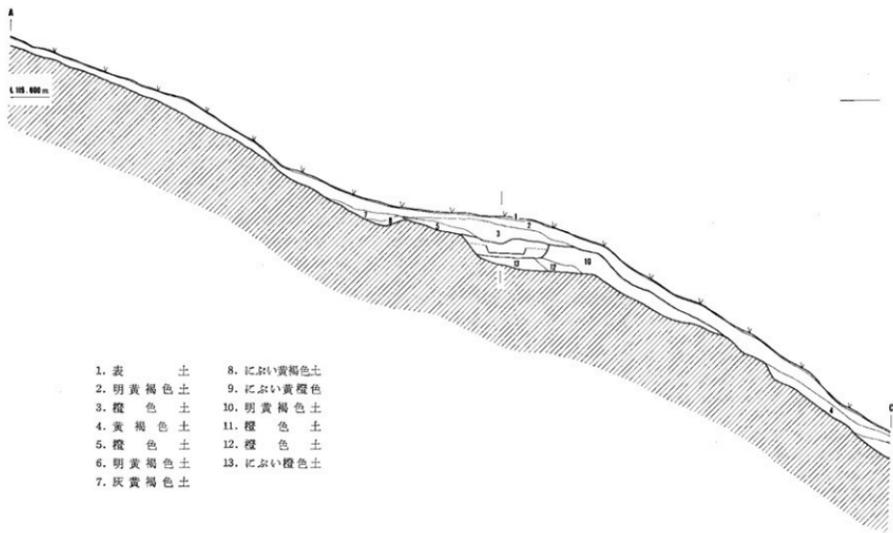
第47図 8号墳墓域上出土土器(1)



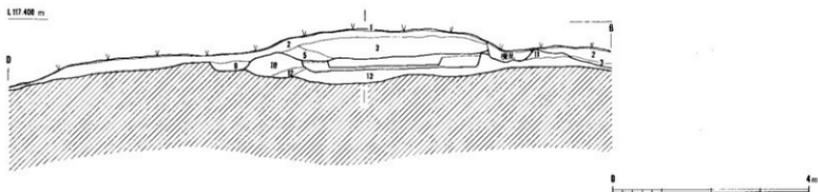
第48図 8号墳墓域上出土土器(2)



第49图 8号墳埋葬施設



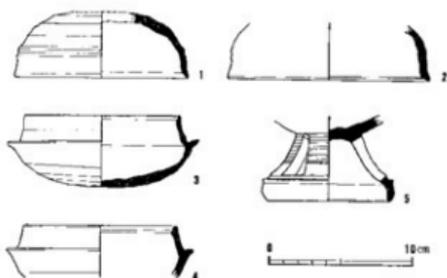
- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 表 土 | 8. 比較的黃褐色土 |
| 2. 明黃褐色土 | 9. 比較的黃褐色土 |
| 3. 橙 色 土 | 10. 明黃褐色土 |
| 4. 黃 褐色 土 | 11. 橙 色 土 |
| 5. 橙 色 土 | 12. 橙 色 土 |
| 6. 明黃褐色土 | 13. 比較的橙 色 土 |
| 7. 灰黃褐色土 | |



第508圖 8号墳土層断面図

4. 遺物出土状況

墓底南西側より、須恵器短頭壺1点、埴輪1点、大型三耳短頭壺1点、埴輪1点がそれぞれ出土した。また墳頂部南西隅より埴輪が身と蓋がセットで検出された。墓底上より出土した土器は、墓底の西壁側に並んで検出されたことから、本墳に属する遺物と考えられ



第51図 8号墳出土土器

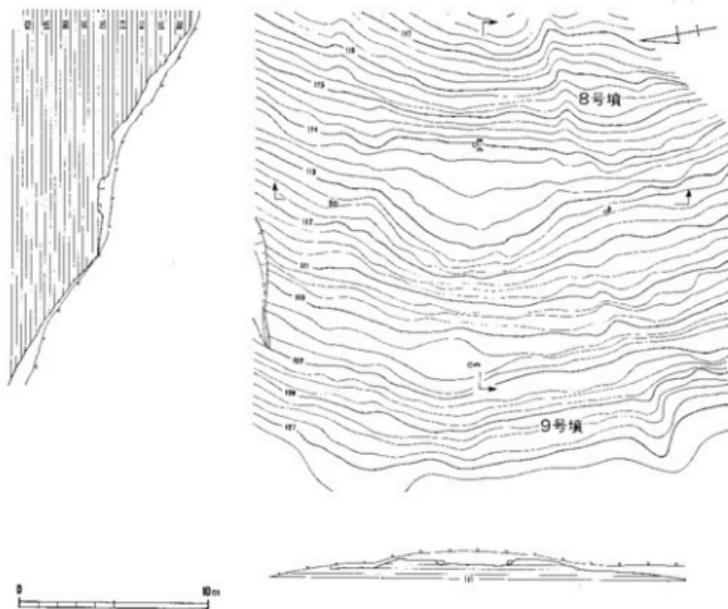
るが、墳頂部で検出された土器については、本墳に伴うものかどうかは不明瞭であった。他には、本墳と斜面を隔する弧状の溝内埋土中より須恵器埴輪・高埴片が検出された。

第10節 9号墳の調査

1. 位置と現状

本墳は、3号墳と同様、調査区の北側を西へ延びる小尾根稜線上に立地する。標高は、110～114mを測り、古墳群中ではいちばん低位に位置している。斜面上方の東側および南側には、8・7号墳が近接する。

調査前の観察では、本古墳群に通常に認められる9×7mの範囲で平坦面があり、また北側から見て4m程度の高まりが見られ、容易に古墳として識別された。

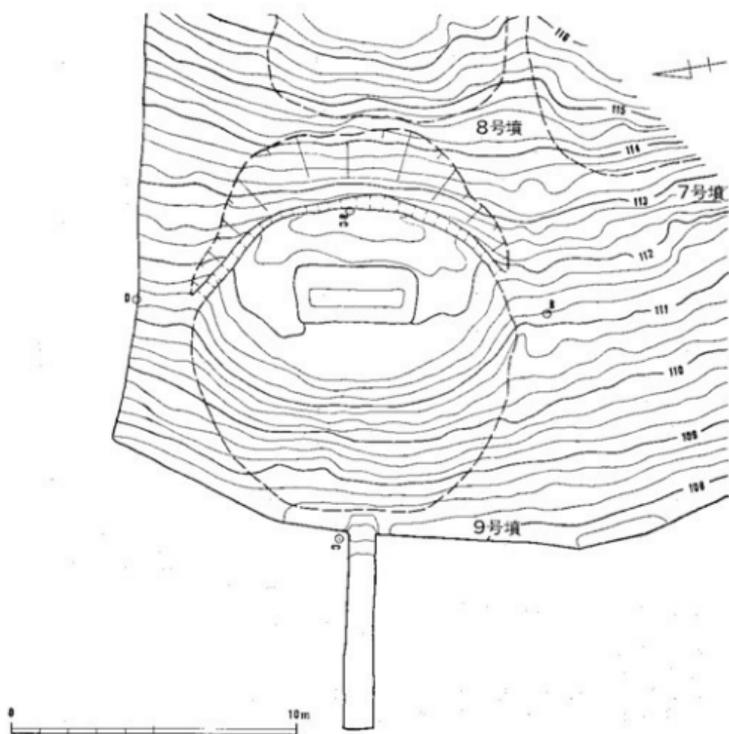


第52図 9号墳墳丘測量図（調査前）

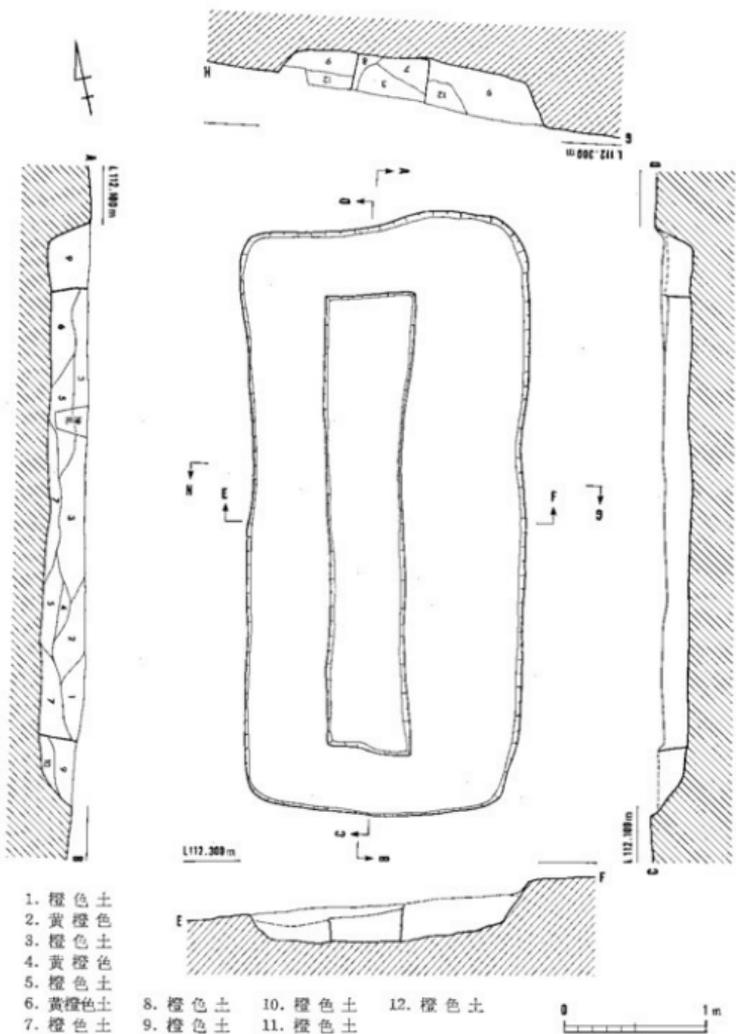
2. 墳 丘

墳丘は、東西10.8m、南北11.5m、高さ3.5mと群中内では最大規模である。平面形は南北方向が多少長い楕円形である。第1段階の旧地形の削り出し平坦面は、幅2.2mで、下方に盛った盛土部平坦面と合わせると幅3.6mである。第2段階の上方部旧地形削り出しは幅15m、深さ約1.8mで、斜面上へは8号墳基部付近にまで達するが、墳丘の規模からすると、削り出し量はそれほど大きなものではない。

墳丘部を画する弧状の溝は幅20~55cm、深さ15cmの整った形を見せている。



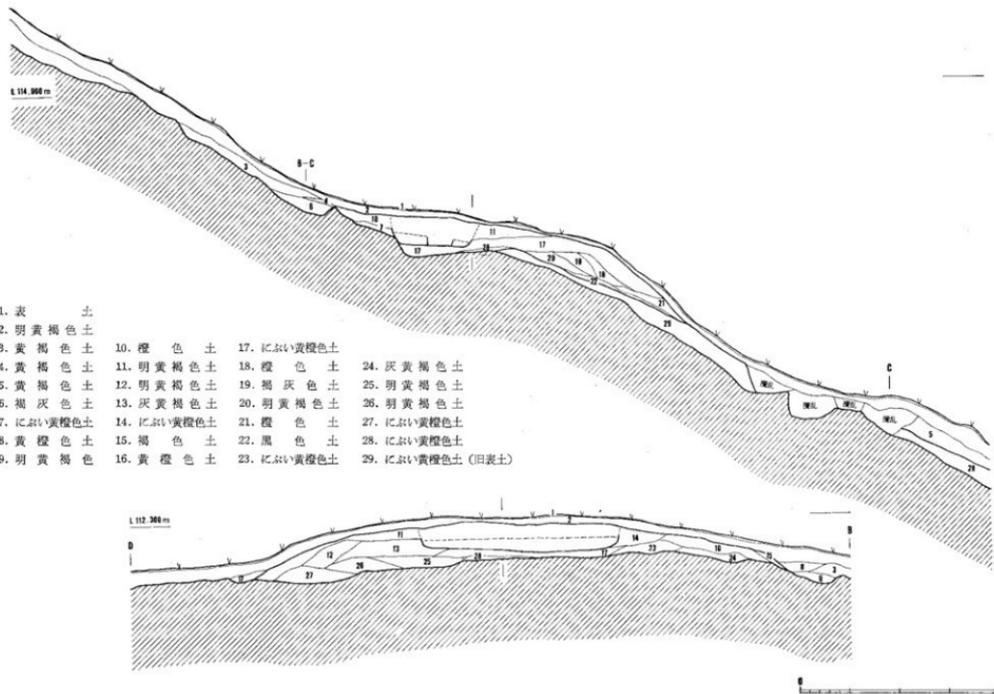
第53図 9号墳墳丘測量図(調査後)



- 1. 橙 色 土
- 2. 黄 橙 色 土
- 3. 橙 色 土
- 4. 黄 橙 色 土
- 5. 橙 色 土
- 6. 黄 橙 色 土
- 7. 橙 色 土

- 8. 橙 色 土
- 9. 橙 色 土
- 10. 橙 色 土
- 11. 橙 色 土
- 12. 橙 色 土

第54图 9号墳埋葬施設



第5560 9号墳土層断面図

墳丘の盛土は、墳丘西側の基底面に削り残された旧表土面、および基底面に9層（第18～22・25～27層）で盛土・整地をして平坦にしている。その後、5層（第12・13・17・23・24層）で南側より順次盛土して、再び平坦に仕上げている。さらに5層以上の土で墳丘を完成させていると考えられる。

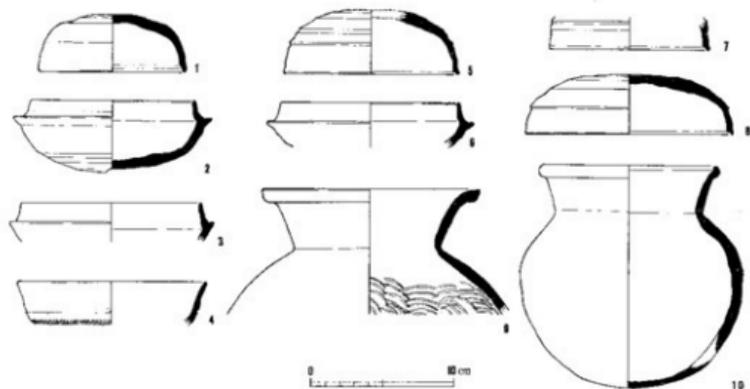
3. 埋葬施設

墳頂部平坦面のほぼ中央に掘削された墓坑内に木棺を直葬する。

墓坑は、南北方向で全長4.16m、中央部幅1.94m、現存墳頂部からの深さ47cmを測り、平面形隅円長方形に掘削されている。墓坑の掘削は盛土部のみで完了し、坑底は、旧地形部分まで達していない。

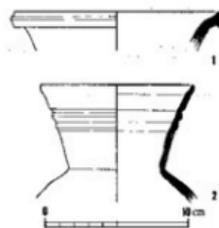
木棺は、主軸方向で長さ3.22m、北木口幅62cm、南木口幅58cmを測り、主軸N12°Eに向いている。木棺は、坑底に直接埋置されていたようである。木棺の痕跡は中央部でその幅を減じているが、これは棺が腐朽した際の土の流れ込みや、側方からの土圧のためであろうか。

4. 遺物出土状況



第56図 9号墳出土土器

本墳から出土した遺物は、すべて弧状の溝内埋土と流土中より出土しており、本墳に伴うと思われる遺物は無い。弧状の溝内からは、須恵器坏1点、蓋2点が出土しているが、いずれも流れ込んだ状態で検出されている。他には、墳頂部流土中より須恵器蓋・坏各1点が、墳丘裾部付近より須恵器無蓋高坏・蓋・坏・直口壺・甗などが検出されている。



第57図 その他の土器

第11節 箱式石棺の調査

1. 位置と立地

箱式石棺は、調査区の東端に位置し、標高は128.5~129mを測る。箱式石棺の西側下方約8mのところには、3号墳が位置する。木遺構の立地する斜面の傾斜角は、約21°を測る。

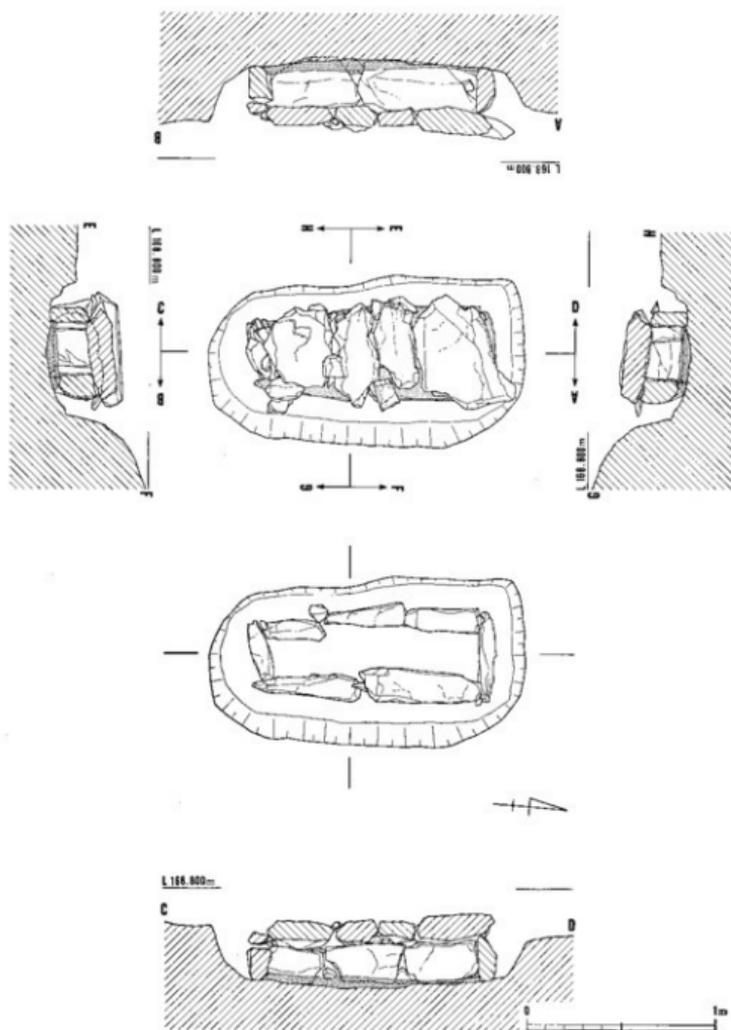
2. 埋葬施設

箱式石棺は、斜面を削平した平坦地に墓域を掘り込んでいる。墳丘や周溝・外表施設などは認められない。墓域の規模は、長さ1.66m、中央部幅84cm、確認面からの深さは14~32cmを測る。平面形は、北東隅が角ばった不整の楕円形を呈する。

蓋石は、4枚の巨晶花崗岩 (Pegmatite) の板石をもちい、蓋石と側石との隙間には、小礫を詰め込み蓋石を固定させている。東側石は、長さ50~60cm、幅25cm、厚さ7~16cm程度の石を2枚もちいている。また西側石は、長さ30~40cm、幅20~25cm、厚さ6~15cm程度の石を3枚もちいている。北木口石は長さ47cm、幅25cm、厚さ8cm程度の板石を、側石の先端に組み合せている。南木口石は、長さ30cm、幅27cm、厚さ10cm程度の板石を、東側を側板の内側に、西側を側板の先端に組み合せている。棺材の接合部および基底部分には、小礫を隙間に埋め込み、棺材を固定させている。これらの石材は、蓋石と同様、巨晶花崗岩を使用している。

棺床は、明黄褐色土を貼り、棺床の北木口と南木口側では、4cmほど南木口付近が高くになっている。石棺の内法は、上端で長さ1.29m、北木口幅22cm、南木口幅27cm、棺床では、長さ1.1m、北木口幅26cm、南木口幅23cm、上端から棺床までの深さは18~20cmを測る。南北主軸方位はN5°Eである。

石棺は、規模的には小型で、おそらくは小児を埋葬したと考えられる。頭位は、木口の内法から考えて北向きであったと思われる。副葬品は出土しなかった。



第58圖 箱式石棺

第4章 出土遺物

第1節 土器

1. 概観

松ノ本古墳群の出土土器は、古墳出土という性格上、比較的完形品（接合完形合）が多く見られた。ただ、小片もあったが実測については、器種が判明し計測可能な土器 118 点はすべて行った。

これらの土器の個々の説明は、後述の観察表に譲り、ここでは總括的に述べることにしたい。

松ノ本古墳群における出土遺物は、須恵器・土師器・鉄器がある。そのうち主体となるのは土器で、中でも須恵器が圧倒的に多く、土師器との個体数比は 9 : 1 である。須恵器・土師器の器種構成は、⁽¹⁾ 坏・蓋・高坏・短頸壺が中心で、ほかに罍・埴・壺がある。

各々の古墳別出土個体数は、第 1 表に示したとおりである。ただ、後述のように各古墳の出土数量については、それぞれの古墳に伴うものとは必ずしも断定できない資料を含んでいる。

	坏	蓋	罍 (高坏)	壺 (短頸壺)	高坏	高坏 (土師)	短頸壺	罍	罍 (土師)	壺	壺 (土師)	埴	計
2号墳	3	6					3					1	13
3 "							1			1			2
4 "	4	6	3		5	4			1	1	2		26
5 "	3	1		1	2		1			1		1	10
6 "	3	5	1			4	2			1	1		17
7 "	7	6	3	1	2		2	1		2	1		25
8 "	3	3			1		1	1		1			10
9 "	3	3		1	1					2			10
表探										2			2
計	26	30	7	3	11	8	10	2	1	11	4	2	115

第1表 出土別個体数

器種分類については、各器種ごとに行っているが、壺では短頸壺以外のものにおいては細分を行っていない。また坏と高坏、蓋各種に関しては破片で判別が難しいものもあり、多少の数値の変動が考えられ、資料的には不備な点も多い。

土器の出土状況は、おおそ棺内、棺外、墓域上の土器群と墳頂部、墳丘裾部および弧状溝とに分けることができる。前者は各古墳の副葬ないし供献品として特定できるが、後者については、出土古墳は必ずしも明らかでない。したがって向者を含めた資料の分析は、客観性を欠くものである。以上のことを前提とし、土器の出土状況についてふれてみたい。

まず第1表のように、斜面上方の2・3号墳の出土土器数が、斜面下方の4・6・7号墳に比べると少ない。このことは各古墳間の副葬、供献数であるのか、流出によるものなのか明確ではないが、3号墳は古墳群の中で6号墳（刀子1本）とともに鉄器（鉄鏃4本、刀子1本）を副葬し、古墳群中でも最も多く鉄器を保有していることから考えあわせれば、墓域上にあった土器群が流出した可能性が高いと言えよう。一方、墳丘裾部を近接させ、あるいは墳丘間に切り合い関係があるので、弧状溝の遺物についても移動は確実であろう。

例えば2号墳の第13図13の接合破片の出土位置は、5号墳のⅡ区流土中と2号墳のⅡ区弧状溝埋土の2ヶ所からで、2号墳から5号墳へ流出したものであろう。

4・6号墳については土師器の高坏が通常の大きさのものと小型の相違は見られるものの、4個休ずつセットであり、また同様に土師器の壺も見られ共通性が認められる。また第44図10の土師器の壺は、7号墳のⅡ区弧状溝内の出土であるが、本来隣接する6号墳の可能性もあると思われる。もしそうであるならば、壺についても2個休ずつあったことになり、両古墳がきわめて類縁性の強い関係にあったと思われる。

また5号墳の第31図9の蓋（短頸壺）と、6号墳の第36図3の短頸壺は、重ね焼きの痕跡から、セットであった蓋然性が高い。

以上のような土器の流出による移動を考慮しつつ、単純に出土別個体数を平均すると、約12.8個が一古墳の平均埋納数となる。3号墳のほかに、5・8・9号墳も若干少なく、4・7号墳は20個体を超え多いことがわかる。

2. 器種構成

器種構成では、坏・蓋がほかの器種の個体数を凌駕していて、この2つを合わせると約

50%を占める。(第2表)

次いで高環(9.6%)、短頸壺(8.8%)と続き、土師器の高環なども加えると壺・蓋とともに、この古墳群の器種構成の中心的な位置を占めている。特に松ノ木古墳群では、短頸壺が10個体あり、極立って目立つのであるが、それに比べると埴の少ないことも特徴の1つであろう。

先に述べてはいるが、このほか壺・埴があり、埴は2個体だけである。壺は短頸壺以外のものとしては、直

口壺・広口壺・三耳壺が見られ、これらのなかでは直口壺が5個体ある。

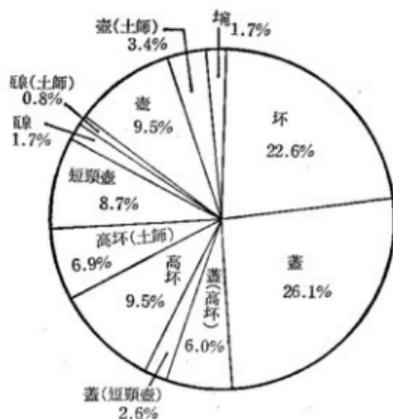
次に棺外、墓塚上などの一括土器群について述べるならば、これらの土器群が検出された古墳は、4・6・7・8号墳に限られている。だが、これらの一括土器群は各々の古墳に伴うものと、明確に考えることができるのである。棺外、墓塚上出土の土器は、全体の約半数を占めるが、各々の埋納位置における詳細な検討はできなかった。

なお、2号墳から数点の土器が棺内から出土しているが、棺底面がなく、遊離した状態であったこと、また出土破片の中には接合完形になる土器もあり、これらのものについては、棺上に置かれたものが落ち込んだ可能性がある。このようにこの古墳群での土器の埋納位置は、棺外と墓塚上に大別できるであろう。

土師器は12個体出土のうち、破片の1個体を除くとすべて墓塚上の出土である。須恵器においては、出土別では器種構成で著しい特徴は見い出せない。

3. 須恵器の年代

松ノ木古墳群の築造時期を考える場合、出土量の多い須恵器を基準に考えるのが妥当であろう。須恵器は田辺昭三氏の編年によれば、TK47~TK10型式の3型式間にはほぼ納まると考えられる。ただ各古墳の築造年代については先に述べたように、古墳に確実に伴うとみられる土器群をもつ古墳数が限られていて、すべての古墳の築造年代を明らかにする



第2表 器種別による分布比

ことはできない。従って棺外一括や墓域上から出土した4・6・7・8号墳について検討することにしたい。

4・6号墳の須恵器は、坏ではたちあがりの内傾度がそれほど著しくなく、受部端部に稜をもつものが見られる。蓋は天井部と口縁部とをわける稜に鋭さを残すものや、やや天井部に丸味をもつものもあり、比較的古い要素を含むものが見られ、TK47～MT15型式間に並行する時期と考える。

次に7・8号墳を概観しても、時期差を指摘することは困難である。7号墳の坏のなかには、底部が丸味をもち、口縁部端面の内傾度も著しくTK47型式の要素をもつものから、蓋では天井部が扁平となり、また天井部と口縁部を画する稜の突出もにぶくなり、新しい要素のものがある。総体的にはTK47～MT15型式の間に、あてはまるものと考えられる。8号墳についても、ほぼ同様の年代として捉えられるのみである。

2号墳の棺内出土の須恵器についても、先述してきているような年代とは大差はない。また近接する1号墳は、保存のため発掘調査を行っておらず、先後関係を述べる資料は見い出せなかった。

このほか築造年代を決める確実な資料として扱いにくい、3・5・9号墳の須恵器についても少し述べておきたい。3号墳は出土土器が少なく、また1基離れて造られているため、明確な時期を推えることはできなかった。5号墳に関しても型式差はなく、ほかの古墳と同様の年代を示すものであるが、9号墳については、坏の口縁端部が面を有するものがなくなり丸く納めただけのものであり、TK10型式の古い段階に近いものと考えられる。

以上のことから考えると、松ノ本古墳群は各古墳の位置的な関係をも踏まえて、4・6号墳から5号墳へのグループと、8あるいは7号墳から9号墳へのグループという、2グループに分けることが可能と思われる。2・3号墳については、明瞭な関係を論じることが難しいが、位置的には2号墳は前者に、3号墳は後者に属するとも言えるかも知れない。

4. 土師器・高坏の接合と脚部接合方法について

松ノ本古墳群では、土師器の高坏が4号墳と6号墳から各4個体ずつ出土した。そのうち通常の口径・器高の高坏については、坏部と脚部の接合付近で剥離して出土したこと、また丁寧な調整を行っておらず、坏部の接合部に明瞭な段が残っていたことなどから、坏部と脚部の接合方法を観察するには、良好な資料であった。

高環の坏部と脚部の接合には、大きく分けると2つの段階がある。

まず最初に中実の脚柱部の上端に、粘土紐を貼り付け、断面三角形になるように成形して、坏底部を作り出している。さらに脚柱部上面にも粘土を引き延ばし、接着を確実なものとする。次は先に成形した底部に重なるように、断面三角形の坏底部の端に粘土紐を離がたし口縁部を作り出す。この口縁部成形の段階においても、坏底部方向に粘土を引き延ばし、密着をはかるとともに坏底部内面を作り出している。一方接合部の外面は、坏部上半に引き延ばして整形することは行われず、そのまま段を有した状態が残されている。

このように高環の製作技法としては、坏部と脚部の接合方法に嵌入式を取らず、「補強⁽⁵⁾帯」としての断面三角形の粘土帯を貼り付け、その上方に口縁部をつくる粘土帯を、直接積み上げる手法を採用している。

小型の高環も同様の工程で作られたものと考えられるが、それが確認できるような明瞭な痕跡は残されていないので、詳細は不明である。

第2節 鉄器

土器以外の出土遺物は、鉄器が6点のみである。その過少さは松ノ本古墳群の特徴の一つで、被葬者の性格を示している。

6点の鉄器のうち、5点(第18型)は3号墳の埋葬施設からの出土で、刀子1、鉄4からなる。残る1点は、6号墳の埋葬施設に伴うもので、刀子である。

3号墳の埋葬施設のもの、棺内中央部からやや北側に寄って、棺底から少し浮いた状態で出土した。出土状況はやや散乱していて、まとまりがなく、原位置からの移動があったと思われる。

6号墳の埋葬施設から出土した刀子は、棺内の中央部からやや南側に寄った東側板付近にあり、鋒先を北に向け、側板と平行に置かれていた。

刀子

3号墳出土の刀子(第18型5)は、全長17.1cmのやや大型に属する完形品である。刃長は11.6cmで、幅1.6cm、背の厚さ4.5cm程度である。刃部は基部で外反し、両側をつくる。刃関、背関とも3mm程度の段をもち、芽につづく。茎には緊縛した痕を残すが、木質は残存していなかった。

6号墳出土の刀子は、鋒端と刃部の一部を欠損しているが、全長13.1cm程度の中型品である。刃部長9.3cm、幅1.4cm、背幅3.5mmを測る。また、刃部側にのみ2mm程度の段をもつ関があり、茎につづく。茎には木質を残す。

鉄鏃

4点とも3号墳の出土で、うち1点は小破片で、旧状は不明である。形状の判明する3点は、篋被片刃箭式に属する。いずれも茎の一部を欠損していて、全長は不明である。2は現存長12.4cm、刃長3.2cm、篋被長7.8cmを測る。茎には矢柄を装着したと思われる木質を残す。3は現存長13.0cm、刃長3.5cm、篋被長7.4cmを測る。茎には木質を残す。4は篋被が最も長いもので、現存長14.6cm、刃長3.5cm、篋被長8.1cmである。茎には矢柄の痕を残し、根皮の緊縛痕がある。

注

- (1) 個体総数は実測総数と同じである。
- (2) 地区分けは、墳丘を十字に区切り、右上から時計まわりに、I～IV区としている。
- (3) 田辺昭三『陶器古窯址群I』平安学園考古学クラブ 昭和41年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 昭和56年
- (4) 松ノ本古墳群では、TK47型式でも新しい要素をもつものが多い。またTK10型式においても古い段階のものである。
- (5) 坂本和子「栃木日産遺跡における高杯形土師器の製作技法」『栃木日産遺跡』駒沢大学考古学研究会 昭和46年
上記文献において、高杯の様相は若干異なるが、坏部と脚部の接合部に補強としての粘土ひもを巻きつける例などをあげられておられる。ここでも補強という面では、大差はないと思われるので「補強帯」という名称を踏襲した。
- (6) 後藤守一「上古代鐵鏃の年代研究」『日本古代文化研究』河出書房 昭和17年

第3表 出土土器観察表

2号墳

器種	図版本	出土地区	法 疑 (cm)	形 態	技 法	備 考
蓋	13-1	2号墳 棺埋 内土	10.8 4.5 —	天井部と口縁部をわける 稜の突出は鋭い。端面 内傾度は著しく、平坦で ある。 口縁部にひずみあり。	ヘラ削りは天井部のほぼ 全体にわたり、方向は逆 時計まわり。	青灰色
蓋	13-2	2号墳 棺埋 土上面	13.0 4.6 —	天井部は扁平で大形であ る。 天井部と口縁部を囲する 稜はにぶい。	ヘラ削りの方向は時計ま わり。 天井部に不調整部見られ る。 天井部にヘラ記号あり。	緑灰～青灰色
蓋	13-3	2号墳 棺埋 内土	(11.3) — —	口縁部の一部が残存す るのみである。 端面は段を有する。	内外面とも回転ナゲ調整。	明青灰～灰色 灰かぶり
蓋	13-4	2号墳 棺埋 内土	12.4 3.65 —	天井部は扁平で、口縁部 を囲する稜の突出は短く にぶい。 口縁部にひずみあり。	天井部のほぼ全体にヘラ 削りを施すが、中央に不 調整部がみられる。 全体的に調整は粗雑であ る。	青灰色
蓋	13-5	2号墳 棺埋 土上面	(10.6) — —	口縁部の一部が残存す るのみである。 天井部と口縁部をわける 稜はにぶく凹線に近い。	内外面とも回転ナゲ調整。	暗青灰色
坏	13-6	2号墳 棺埋 内土	(11.0) — —	全体的に器壁がうすい。 たちあがりは内傾し、端 面はほとんど段をもたな い。	内外面とも回転ナゲ調整。	暗青灰色
坏	13-7	2号墳 棺埋 内土	9.9 4.8 —	たちあがりは内傾し、端 部を丸くおさめる。	ヘラ削りの範囲は約 $\frac{1}{2}$ ほ どで、方向は時計まわり。	青灰色 底部外面に灰 かぶり
坏	13-8	2号墳 棺埋 内土	9.8 5.4 —	小型である。 たちあがりは長く、直立 する。 端面は明瞭な段を有する。	ヘラ削りの範囲は約 $\frac{1}{2}$ ほ どで、方向は逆時計まわ り。	青灰色 底部表面にヘ ラ削り痕あり TK47
短頸壺	13-9	2号墳 棺埋 内土	8.2 6.95 11.8 —	直立する短い口頸部で、 肩部は丸い。 体部はナゲ肩状で扁平球 を呈する。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	青灰色 煮ね焼き痕 一部灰かぶり 土器片付着
短頸壺	13-10	2号墳 棺埋 内土	(9.3) 8.1 13.3 —	短く立つ口縁部で、端面 は内傾し、ほとんど段を もたない。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。 底部外面にヘラ状工具に よる直線の陰刻がある。	灰白～灰色 煮ね焼き痕 灰かぶり MT15
蓋	13-11	2号墳 I区弧状 溝埋 土	11.0 4.75 —	天井部と口縁部を囲する 稜の突出は短く小さい。	ヘラ削りの範囲は約 $\frac{1}{2}$ ほ どで、方向は逆時計まわ り。	明青灰色 TK47

器種	図版	出土地区	法量 (cm)	形態	技法	備考
短頸壺	13-12	2号墳 I区弧状溝	8.2 8.7 12.8 —	短くたつ口頸部で、端部は丸くおさめらる。底部に燒きひずみが見られる。	へら削りの方向は逆時計まわり。	明青灰色、他の土器片付着自然釉付着重ね焼き痕
瓶	13-13	2号墳 II区	— — —	口頸部が欠損しているので明瞭な形態不明。器壁が厚い。	体部中に節撞波状文、下半に格子状印きが施される。	青灰色

3号墳

短頸壺	18-1	3号墳 II区	(7.4) — (11.6) —	直立する短い口頸部をもつ。口縁部はわずかに段をもつ。	体部外面はカキ目調整される。	暗青灰色
壺	18-2	3号墳 Ⅲ区墳頂部	— — (12.0)	口縁部と底部が欠損。ややナデ肩の球状に近い体部である。	体部下半は不定方向のへら削りを行う。	明青灰～青灰色 体部外面に自然釉付着

4号墳

蓋	24-1	4号墳 墓地上	12.9 4.8 — —	大型化が著しい。天井部と口縁部をわける稜は比較的鋭さを残す。	へら削りは簡略化され、天井部の約半ほどで、方向は逆時計まわり。	青灰色
線	24-2	4号墳 墓地上	6.8 7.6 7.6 —	土師器の類である。小型壺の胴部に内孔をあける。	口縁部内外面は丁寧なへら磨きによる調整。胴部内面には指ナデ、指オサエ痕を明瞭に残す。	黒褐色
壺	24-3	4号墳 墓地上	(7.0) 8.4 — —	土師器の壺である。ほぼ直立する短い口頸部をもつ。体部は球形である。	体部内面に指頭任痕が残る。外面は草灰により不明。	橙色
壺	24-4	4号墳 墓地上	9.2 8.9 10.3 —	直立する短い口縁部をもつ土師器壺である。	厚手で調整はほとんど行わない。内面には粘土紙痕を残す。	にぶい橙～橙褐色
高環	24-5	4号墳 墓地上	8.8 7.5 — 6.2	土師器の小型品。外反して伸びる口縁部。脚部より急屈して短く広がる胴部で、端部は丸い。	全面的にナデ調整か。脚部内面はケズリによりかきとっている。	にぶい橙～淡赤褐色
高環	24-6	4号墳 墓地上	7.9 6.7 — 5.9	土師器の小型品。大きく外反する環部で、脚部の屈曲度も強い。口縁部にひずみが見られる。	環部と脚部の接合付近では、指オサエ痕が残る。脚部内面はへら削り。	橙～にぶい橙褐色
高環	24-7	4号墳 墓地上	8.9 — — —	土師器の小型品。口縁部と体部をわける明瞭な稜はなく、大きく外反する。	内外面とも器表摩擦のため観察不可能。	にぶい黄橙～淡黄褐色

器種	図版	出土地区	法量 (cm)	形 態	技 法	備 考
高 坏	24-8	4号墳 墓坑上	9.1 6.8 — 6.7	土師器の小型品。 口縁高が体高を凌駕し、 外反度がきわめて強い。 脚部の屈曲度もきつい。	坏部内面に刷毛目状の粗 いナデが残る。 脚柱部内面はヘラ削り を行う。	橙～明褐色 脚部黒斑
広口壺	25-1	4号墳 棺 外	22.6 27.8 22.3 —	口頸部は上方方に伸び、 口縁部は上下方に肥厚 する。 外側面は凹部状を呈する。 体部は球形に近い。	口頸部を3段の凸帯で区 切り、その間に細かい溝 を描状文を施す。 体部外面上端は格子文印 き後方キ目調整、下半 は平行印きを行う。内面 は同心円印き後、上半 の方は回転ナデを行い消 している。	青灰～暗青灰 色 自然釉付着 底部に焼合に 転用したと思 われる土器片 付着
蓋	26-1	4号墳 棺 外	(11.8) — — —	天井部と口縁部をわける 稜の突出はにぶい。 端面はほぼ平直である。	ヘラ削りの方向は時計ま わり。	灰色 一部に灰かぶり
蓋	26-2	4号墳 棺 外	(13.3) 5.0 — —	天井部と口縁部とは鋭い 稜線で画されている。	ヘラ削りの範囲は約45程 度で、方向は時計まわり。	青灰～暗灰色 口縁の一部に 灰かぶり MT15
蓋	26-3	4号墳 棺 外	(12.6) 4.9 — —	やや大型品で、天井部は 丸味をもつ。 天井部と口縁部をわける 稜は比較的鋭さを残す。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	青灰色
蓋	26-4	4号墳 棺 外	(12.6) — — —	口縁部は垂直に下がり、 端面はくぼみを有する。 稜はにぶい。	内外面とも回転ナデ調整。	暗青灰色
蓋	26-5	4号墳 棺 外	(12.7) 4.35 — —	天井部は扁平となり、口 縁部とをわける稜の突出 はにぶいが明確である。 端面はわずかに段が残る。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	灰白色 全面に灰かぶり
蓋	26-6	4号墳 棺 外	(11.8) — — —	つまみ部が欠損。 天井部と口縁部を画する 稜をほとんどとない。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	高坏蓋 灰白～青灰色
蓋	26-7	4号墳 棺 外	(12.0) 5.4 — —	天井部は比較的平らで、 口縁部とを画する稜がわ ずかに残る。端面に浅い くぼみを有する。	ヘラ削りの範囲は狭く、 方向は逆時計まわり。	高坏蓋 灰白～灰色 灰かぶり
蓋	26-8	4号墳 棺 外	12.0 5.1 — —	天井部と口縁部をわける 稜の突出はにぶく、鋭さ に欠ける。	ヘラ削りの方向は時計ま わり。	高坏蓋 明褐色 高坏脚部の重 ね焼き痕残
坏	26-9	4号墳 棺 外	(11.1) (5.3) — —	たちあがりは内傾して伸 び端面はにぶい段をもつ。 口縁部にひずみあり。	ヘラ削りの範囲は約45程 度で、方向は時計まわり。	青灰～明オ リ 一 灰 色

器種	図版名	出土地区	法 量 (cm)	形 態	技 法	備 考
坏	26-10	4号墳 棺外	(11.2) — —	口縁端部は低い段を残す。 受部は外上方に伸びる。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	明青灰色 自然釉付着
坏	26-11	4号墳 棺外	(11.4) — —	口縁端部は深い凹面をも ち、受部は水平に伸びる。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	明青灰～灰白 色 高環の可能性 あり
有蓋高坏	26-12	4号墳 棺外	(9.0) — —	坏部のみ残る。 たちあがりはほぼ直立し、 端面は段をもつ。	ヘラ削りの方向は時計ま わり。 通し孔の切り取り痕が残 る。	灰白～灰色
有蓋高坏	26-13	4号墳 棺外	9.5 8.5 — 8.9	たちあがり端面の内傾度 は著しい。小型の坏部に 短脚をつける。 円孔の3方通しを穿つ。	脚部はカキ目調整される。 坏部内面と脚部外側にヘ ラ状工具による直線の陰 刻がある。	明青灰～青灰 色 TK47

5号墳

直口壺	31-1	5号墳 Ⅰ区墳頂 部	(8.0) — 12.7 —	底部が欠損。 ほぼ直立する口頸部で、 球状の体部へと続く。	内外面とも回転ナデ調整。 頸部と体部中位付近に櫛 波状文を施す。	青灰色
蓋	31-2	5号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	(12.7) — — —	丸味をもつ天井部で、口 径がやや大型化する。 — 天井部と口縁部をわけ — 後にはおく外方に突出し ない。	ヘラ削りは天井部の約4 程度で、方向は逆時計ま わり。	青灰色 TK47
坏	31-3	5号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	10.6 5.2 — —	たちあがり端面の内傾度 が著しい。 — 器底は厚手である。	ヘラ削りは底部の約4程 度で、方向は逆時計まわ り。	明緑灰色 TK47
坏	31-4	5号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	(10.5) (4.8) — —	たちあがりは内傾し、端 面に段をもつ。 — 器底は全体的にうすい。 — 口縁部にひずみが見られ る。	ヘラ削りの範囲は約4程 度で、方向は逆時計まわ り。 — 底部外面に「+」のヘラ 記号がある。	青灰色 受部に重ね焼 き痕あり
坏	31-5	5号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	(10.5) — — —	たちあがりはやや内傾し、 端面は段をもつ。	ヘラ削りの範囲は4割で、 方向は逆時計まわり。 — 内面中央に同心円叩き痕 が残る。	青灰色 MT15
高坏	31-6	5号墳 Ⅲ区墳状 埋土	— (7.8) —	脚部は下外方へ下がり、 脚端部はほとんど段をも たず下方に伸びる。 — 透しは不明。	外面はカキ目調整。	高環脚部 明青灰色 外面に自然釉 付着
高坏	31-7	5号墳 Ⅱ区	— — 9.4	下外方に広がったのち、 裾部で下方に伸びる。	内外面とも回転ナデ調整。	高環脚部 明青灰色

器種	図版No	出土地区	法量 (cm)	形 態	技 法	備 考
把手付 壺	31-8	5号墳 Ⅱ・Ⅲ区 墳丘裾部	— (8.5) —	口縁部と把手は欠損。 体部の上下に凸帯を1段 ずつめぐらし、その間に 5条の細かい波状文を施 す。	底部外面は不定方向のケ ズリ。	灰色 内面灰かぶり TK47
蓋	31-9	5号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	8.3 3.7 — —	天井部と口縁部をわける 稜はないが、両者の屈曲 は明瞭である。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	短頸赤蓋 明青灰色 (36-3)とセ ット MT15
短頸壺	31-10	5号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	— (8.0) 13.0 —	口縁端部は欠損のため不 明。 胴部のところで最大径を もつ。	体部の約 $\frac{1}{2}$ ほどの範囲に ヘラ削りを行う。方向は 逆時計まわり。	青灰〜暗青灰 色

6号墳

蓋	36-1	6号墳 墓板上	11.4 6.9 — —	天井部と口縁部を面する 稜は短く短さに欠く。 背の高いなかくほみのつ まみがつく。	天井部のはほぼ全面にヘラ 削り、方向は時計まわり。	高環蓋 明青灰〜青灰 色かぶり
環	36-2	6号墳 墓板上	10.6 5.2 — —	たちあがり端面の内傾度 は著しい。 全体に焼きひずみがある。	ヘラ削りは底部の約 $\frac{1}{4}$ 部 で、方向は逆時計まわり。	青灰色 TK47
短頸壺	36-3	6号墳 墓板上	6.3 (7.6) 12.3 —	短く立つ口頸部で、端部 は丸くおさめる。 体部は背がやや張り、扁 平な感をもつ。	底部内面に指ナゲの凹凸 が明瞭に残る。外面はヘラ 削り、方向は時計ま わり。	灰白〜暗灰色 重む焼き斑残 外面頸部付近 まで灰かぶり
高環	36-4	6号墳 墓板上	15.0 13.3 — 10.8	土師器の高環。 比較的深い環部で、内唇 気味に伸びる。裾広がりの 短脚をもつ。	口縁部はヨコナゲ調整。 脚部内面はヘラ削り(右 →左)。	赤橙〜橙色 環部に黒斑あり 赤色顔料付着
高環	36-5	6号墳 墓板上	17.0 11.6 — 10.8	土師器の高環。 環部は一度屈曲し大きく 外反する。端部は丸くお さめる。裾広がりになる 短脚をもつ。	全面的にナゲ調整。脚部 内面はヘラ削り(右→左)。 粘土接合痕を比較的明瞭 に残す。	橙〜にぶい橙 色 赤色顔料付着
高環	36-6	6号墳 墓板上	(15.1) 12.4 — (10.0)	土師器の高環。 ゆるく外反して伸びる環 部。 短い脚柱部から屈曲し裾 部へと続く。	ナゲ調整。脚部内面はヘ ラ削り(右→左)。 粘土接合痕を比較的明瞭 に残す。	赤橙〜橙色 環部のはほど に黒斑あり 赤色顔料付着
高環	36-7	6号墳 墓板上	15.2 12.95 — 10.0	土師器の高環。 比較的深い環部で、裾広 がりの短脚部をもつ。 環部が若干ひずむ。	ナゲ調整。脚部内面はヘ ラ削り(右→左)。 粘土接合痕を比較的明瞭 に残す。	赤橙〜橙色 赤色顔料付着
壺	36-8	6号墳 墓板上	— 12.0 —	土師器の壺であるが、口 縁部が欠損している。 比較的平らな底部をもち、 体部は扁平球を呈する。	内面に粘土紐痕を明瞭に 残す。 外面は刷毛調整後、ヨコ ナゲを行う。	橙色 口縁部から底 部にかけて亀 裂あり

器種	図版	出土地区	法量 (cm)	形態	技法	備考
蓋	37-1	6号墳 墓 拡 埋土上面	(11.4) — —	口縁部のごく一部が残存するのみである。 口縁端部は明瞭な段を有する。	内外面とも回転ナデ調整。	明青灰色 灰かぶり
蓋	37-2	6号墳 墓 拡 埋土上面	(12.6) — —	天井部と口縁部をわける稜ははたぶく外方へ突出する。 端面は浅い段を有する。	天井部はほぼ全面をへら削り、方向は時計まわり。	青灰色
蓋	37-3	6号墳 Ⅲ区墳頂部	(11.8) — —	天井部と口縁部を面する稜ははたぶく。	へら削りの範囲は約1/4ほどで、方向は時計まわり。	青灰色
蓋	37-4	6号墳 Ⅳ区弧状溝	(11.6) — —	口縁部の一部が残存するのみである。 端面は内傾する。	内外面とも回転ナデ調整。	灰白～灰色 灰かぶり
蓋	37-5	6号墳 Ⅳ区弧状溝	(12.1) 5.2 —	天井部と口縁部をわける稜の突出は明瞭で、端面は浅いくぼみをもつ。	天井部はほぼ全面をへら削り、方向は時計まわり。	青灰色 外面灰かぶり
坏	37-6	6号墳 Ⅱ区墳丘裾部	(11.6) — —	口縁端部は浅いくぼみをもつ。	へら削りの方向は時計まわり。	明青灰色
坏	37-7	6号墳 Ⅳ区弧状溝	(10.5) — —	たちあがりはやや内傾し、端面は低い段をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	青灰色
壺	37-8	6号墳 Ⅲ区墳丘裾部	(12.7) — —	頸部は上外方に伸びるが、口縁部は欠損し不明である。 体部はやや扁球形をなす。	体部外面はカキ目調整し、底部はナデている。内面は阿部付近に指頭痕が残る。	青灰色 肩部外面に自然釉、頸部内面に灰かぶり
短頸壺	37-9	6号墳 Ⅰ区弧状溝 底面	7.7 7.2 11.1 —	わずかに外傾する短い口縁部で、端部は丸い。 底部は丸味をもつ。	底部はへら削り、方向は時計まわり。	灰～灰白色 重ね焼き痕 灰かぶり（一部自然釉）有

7号墳

蓋	43-1	7号墳 棺 外	12.0 4.1 — —	天井部のふくらみが失われ、口縁部とをわける稜の突出も不備。端部の段はやや不明瞭となる。	へら削りはやや粗く、範囲は約1/4ほどである。 方向は逆時計まわり。	明青灰色
蓋	43-2	7号墳 棺 外	(12.4) 4.4 — —	天井部と口縁部を面する稜はほとんど失われている。 端部は明瞭な段を有する。	へら削りの範囲は約1/4程度で、方向は時計まわり。	暗青灰～青灰色 灰かぶり

器種	図版	出土地区	法量 (cm)	形 態	技 法	備 考
蓋	43-3	7号墳 棺外	13.2 5.05 — —	天井部と口縁部をわける稜線はよく突出しない。端面は段を有する。	へら削りは天井部のほぼ全面に行い、方向は逆時計まわり。内面に明瞭な凹凸を残す。	青灰色(43-7)とセット MT15
蓋	43-4	7号墳 棺外	14.2 4.25 — —	大型化が著しく、天井部と口縁部とはにおい稜線で覆われている。端面は明瞭な段をもつ。	へら削りの範囲は約4/5程度で、方向は逆時計まわり。	明青灰色 MT15
蓋	43-5	7号墳 棺外	13.1 4.4 — —	天井部と口縁部をわける稜の突出はよく明瞭でない。端面はほとんど段をもたない。	天井部のほぼ全面にわたってへら削りを行う。方向は時計まわり。	灰色
坏	43-6	7号墳 棺外	9.95 4.5 — —	やや小型品で、たちあがりは低く内傾度が強い。端面は丸くおさめる。	へら削りの範囲はやや狭く約4/5ほどで、方向は時計まわり。	暗青灰色
坏	43-7	7号墳 棺外	11.1 5.2 — —	たちあがりはわずかに内傾し、端面は段をもつ。口縁部が若干ひずむ。	底部は扁平に近く、へら削りの範囲は約4/5ほどで、方向は逆時計まわり。	青灰色 MT15
坏	43-8	7号墳 棺外	11.1 5.1 — —	たちあがりは内傾し、端面は丸く内傾する面をもつ。	へら削りの範囲は約4/5ほどで、方向は逆時計まわり。	灰色
蓋	43-9	7号墳 棺外	(12.3) 6.1 — —	天井部と口縁部を測する稜の突出はにおい。端面は段を有する。	へら削りの範囲は約4/5ほどで、方向は逆時計まわり。	高环蓋 暗青灰～青灰色 灰かぶり
蓋	43-10	7号墳 棺外	(11.5) 6.0 — —	天井部と口縁部をわける稜の突出は、比較的鋭さを残す。	へら削りの方向は逆時計まわり。	高环蓋 青灰色
蓋	43-11	7号墳 棺外	12.1 5.8 — —	天井部と口縁部をわける稜の突出はよく、鋭さに欠ける。口縁端部に明瞭な段は見られない。	へら削りの範囲は約4/5程度で、方向は逆時計まわり。	高环蓋 暗青灰～青灰色
有蓋高坏	43-12	7号墳 棺外	10.0 9.1 — 8.1	たちあがりは内傾して伸び、端面は明瞭な段を有す。短脚で、長方形1段の透しを3方に穿つ。	脚部はカキ目調整。坏部のへら削りは4/5程度におよぶ。	灰色
蓋	43-13	7号墳 棺外	9.6 3.2 — —	平らな天井部から、鋭く屈曲し口縁部へと続く。口縁端部は低い段を有す。	へら削りの方向は時計まわり。	短頸蓋 暗青灰色

器 種	図版 No	出土地区	法 量 (g)	形 態	技 法	備 考
短頸壺	43-14	7号墳 棺 外	6.65 — 6.5 11.05 —	口頸部は内轍し、端部は 浅いくぼみをもつ。 肩の張った扁半球の体部。	体部上半はカキ目調整。 底部はヘラ削りを行い、 方向は時計まわり。	青灰色 底部付近に自然 釉付着
広口壺	43-15	7号墳 棺 外	17.8 — (22.5) —	口頸部は直立気味に外反 して伸びる。口縁端部は 下方に小さく突出し、外 端部に浅いくぼみをもつ。 体部は球形状に近い。	体部外面は格子文叩き (ヨコ方向→タテ方向) を施し、内面は同心円叩 き痕上を軽くヨコナデを 行う。	青灰色
無蓋高坏	44-1	7号墳 I区墳頂 部	(10.5) — — —	高坏の坏部のみ残存。 口縁部と体部を覆するに ふい塵が見られる。 3方透しの痕跡が見られ る。	体部外面はカキ目調整。	灰白～暗灰色 自然釉付着
短頸壺	44-2	7号墳 I区墳頂 部	(7.0) — (10.5) —	短く直立する口頸部。 端部はやや内傾する平坦 面をもつ。	体部はカキ目調整。 ヘラ削りの範囲は狭く、 方向は時計まわり。	暗青灰色
蓋	44-3	7号墳 II区	12.6 4.6 — —	やや大皿形で天井部は丸 味をもつ。 天井部と口縁部をわけ る。 後にはふい塵が残る。	ヘラ削りの範囲は天井部 の約3/4で、方向は時計ま わり。 調整は粗雑。	緑灰～暗緑灰 色 口縁部外面に 灰かぶり
坏	44-4	7号墳 II区弧状 溝 埋 土	9.9 5.35 — —	たちあがりの内傾度は著 しく、端面は股をもつ。 全体的にひずみを生じる。	ヘラ削りの範囲は約3/4程 度で、方向は逆時計まわ り。 削りはやや雑である。	青灰色 TK47
坏	44-5	7号墳 IV区弧状 溝 埋 土	— — — —	口縁端部は欠損。 受部は若干厚手で、端部 は丸味をもつ。	ヘラ削りの方向は時計ま わり。	青灰色
壺	44-6	7号墳 I区弧状 溝 埋 土	— — — —	口縁部は欠損している。 体部はやや楕に張った球 形で、底部は丸味をもつ。	体部外面上半はカキ目調 整、下半は平行叩きを施 す。 内面下半には指痕が明 瞭に残る。	灰～灰白色
罐	44-7	7号墳 II区	— — — —	頸部の一部分が残存する。 1段の凸帯をめぐらし、 頸部を覆する。	内外面とも回転ナデ調整。 凸帯で画した上下に、桃 描散状文を施す。	緑灰色
坏	44-8	7号墳 III区	(11.8) 5.35 — —	たちあがりはやや内傾し、 端部は浅いくぼみをもつ。	ヘラ削りの範囲は約3/4ほ どで、方向は逆時計まわ り。	灰色 底面外面灰か ぶり
坏	44-9	7号墳 II区墳丘 裾部	— — — —	口縁端部は欠損。 受部は水平に伸び、端部 は丸くおさめる。	ヘラ削りの範囲は約3/4で、 方向は逆時計まわり。 内面に同心円痕がわずかに 残っている。	灰白～青灰色

器種	図版	出土地区	法量 (cm)	形態	技法	備考
壺	44-10	7号墳 Ⅱ区弧状 溝埋土	(10.0) — — —	土師器の壺である。 短く直立する口頸部から 肩部にかけて一部分残る。	口頸部の内面はヨコ方向 の刷毛目が残るが、ほか は摩耗のため不明。	褐色

8号墳

大型三耳短頸壺	47-1	8号墳 墓趾上	10.2 31.0 32.0 —	直立する短い口頸部から、 球形に近い体部へと続く。 三方にカギ状の把手がつく。 底部にひずみが見られる。	体部外面は平行叩きの後、 約 $\frac{2}{3}$ にわたりカギ目調整、 内面は同心円痕を残す。	灰～青灰色 口頸部に火だ すき痕を残す。
蓋	48-1	8号墳 墓趾上	13.2 5.4 — —	天井部と口縁部を囲する 稜線ははぶく突出する。 端部はわずかにくぼみか 残る。 若干のひずみをもつ。	ヘラ削りは天井部のはば 全面に行い、方向は逆時 計まわり。	灰白～褐灰色 (48-2)とセ ット MT15
坏	48-2	8号墳 墓趾上	11.4 5.4 — —	全体的に厚手で甘い感をも つ。 口縁部は不明瞭な段と なる。	ヘラ削りの範囲は約 $\frac{1}{2}$ ほ どで、方向は時計まわり。	灰白色 自然剥片着 土器片片着 MT15
短頸壺	48-3	8号墳 墓趾上	8.65 8.8 13.85 —	大型化が著しい。 短くたつ口頸部で、端部 ははぶい段をもつ。肩の やや張る扁平な底体部。	ヘラ削りの方向は時計ま わり。 底部内面はナデ仕上げ。	明青灰色 MT15
瓿	48-4	8号墳 墓趾上	12.4 11.8 10.8 —	頸部は大きく外上方へ伸び、 口縁部との境は凸帯によ り段をなす。	体部外面はヘラ削り後ナ デ調整。 底部内面に押圧痕が残る。	青灰～明青灰 色
蓋	51-1	8号墳 Ⅱ区墳頂 部	(12.0) — — —	天井部と口縁部をわける 稜の突出は失われ、凹線 状になる。端部は内傾す る。 若干ひずみを生じる。	ヘラ削りの範囲は約 $\frac{1}{2}$ 弱 と狭くなる。 方向は時計まわり。	暗青灰～青灰 色
蓋	51-2	8号墳 Ⅱ区墳頂 部	(13.8) — — —	天井部と口縁部をわける 稜は全く失われる。	内外面とも回転ナデ調整。	灰白色 外面に自然剥 片着
坏	51-3	8号墳 Ⅰ区墳頂 部	10.7 5.1 — —	たちあがりは内傾して伸 び、端部は段をもつ。 わずかにひずみを生じる。	ヘラ削りの範囲は約 $\frac{1}{2}$ ほ どで、方向は時計まわり。	青灰色 灰かぶり
坏	51-4	8号墳 Ⅰ区弧状 溝埋土	(10.6) — — —	たちあがり端部の内傾度 は著しく、段を有する。	ヘラ削りの方向は逆時計 まわり。	明青灰～暗青 灰色

器種 図版名	出土地区	法 量 (cm)	形 態	技 法	備 考	
高 杯 51-5	8号墳 Ⅳ区弧状 溝 埋 土	— — (8.4)	短脚で、裾部はゆるやかに屈曲し1条の凸線をめぐる。 長方形透しを3方に穿つ。	脚部上半カキ目調整。	高杯の脚部 明青灰色 自然釉付着	
9 号 墳						
蓋	56-1	9号墳 墳頂部	(10.1) 4.0 — —	天井部と口縁部を測する 様は見られない。 口縁端部はやや内傾し、 平皿に近い。	へう削りの方向は逆時計 まわり。	短頸蓋 明線灰色
杯	56-2	9号墳 Ⅳ区墳頂 部	(11.3) 5.0 — —	たちあがりは短く内傾し、 端部はやや突起気味である。 たちあがりと受部境のく ぼみは見られない。	へう削りの範囲は約4ほ どで、方向は逆時計まわ り。 調整はやや粗雑である。	明青灰色
杯	56-3	9号墳 Ⅱ区弧状 溝 埋 土	(12.4) — — —	たちあがりは内傾し、端 部は丸くおさめる。 受部は短く伸びる。	内外面とも回転ナデ調整。	緑灰色 焼成やや不良 TK10
無蓋高杯	56-4	9号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	(13.1) — — —	口縁部は外上方へひらき、 体部との境に浅い凹線をも つ。 端部は丸くおさめる。	内外面とも回転ナデ調整。 体部上位に細かい櫛形波 状文を施している。	暗青灰色 灰かぶりで一 部自然釉付着
蓋	56-5	9号墳 Ⅱ区 流土中	(12.1) — — —	天井部と口縁部を測する 様の突出はにぶい。	へう削りの範囲は約4程 度で、方向は時計まわり。	緑灰色 焼成やや不良
杯	56-6	9号墳 Ⅳ区	(12.4) — — —	口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも回転ナデ調整。	暗赤灰色 TK10
蓋	56-7	9号墳 Ⅱ区弧状 溝 埋 土	(10.9) — — —	天井部と口縁部を測する 様の突出はにぶい。端部 は低い段を有する。	内外面とも回転ナデ調整。	暗青灰色
蓋	56-8	9号墳 Ⅱ区弧状 溝	(14.4) 4.15 — —	天井部はやや扁平となり、 口縁部を測する様の突 出はにぶい。 端部は低い段を有す。	へう削りの範囲は約4ほ どで、方向は逆時計まわ り。	灰色 天井部に自然 釉付着
蓋	56-9	9号墳 Ⅰ区	15.05 — — —	頸部は外反して伸び、口 縁部は短く屈曲する。端 部の拡張はない。	体部内面は同心円痕を残 す。	暗灰色
直口蓋	56-10	9号墳 Ⅲ区墳丘 裾部	(12.0) 15.7 15.4 —	口頸部はほぼ直立し、端 部は上方に肥厚する。外 端部は丸味をもつ。 体部は球状を呈する。	自然釉が濃く付着してい るため調整は観察不可 能。 底部内面に押付痕が残る。 体部下半に穿孔がある。	青灰色 内外面に濃く 自然釉付着

その他

器種	図版No.	出土地区	法量 (cm)	形態	技法	備考
壺	57-1	Ⅱ区 表採	(14.2) — — —	口縁部は外反し、頸部は上下に肥厚する。外端面は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	青灰色
直口壺	57-2	6号墳 Ⅱ・Ⅲ区 墳丘裾部	(10.6) — — —	やや外傾ぎみに直立する口頸部で、口縁端部は丸い。頸部上端に2条の明瞭な凹線をめぐらす。	内外面とも回転ナデ調整。	灰色 口頸部内外面に自然釉付着

※ 図版No.の数字は左は神田番号を、右のものはそのなかの土器番号を示している。

※ 法量の数字は上段からそれぞれ口径、器高、腹径、底径で、復元値は()で、計測不能は—で示す。

第4表 松ノ本古墳群の概要

古墳名	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳	9号墳	箱式石棺
標高	129.6	125.3	124.8	119.4	116.0	115.1	116.6	117.0	112.3	128.8
	7	8.6	7.0	8.4	6.5	7.1	9.2	7.5	10.8	/
東西長	8	8.6	8.8	9.0	8.1	8.8	9.2	8.3	11.5	/
	/	3.95	3.95	3.87	4.34	4.19	4.50	3.62	4.16	1.66
南北長	/	1.19	1.60	1.54	1.68	3.19	1.60	1.73	1.94	0.84
	/	N3°30'W	N10°E	N6°W	N13°30'W	N3°W	N1°E	N11°30'E	N12°E	N8°E
主軸方位	/	3.37	2.89	2.47	3.40	3.17	2.77	2.36	3.22	1.29
	/	0.80	0.45	0.76	0.52	0.79	0.56	0.73	0.58	0.27
幅	/	0.68	0.46	0.83	0.65	0.81	0.56	0.89	0.60	0.22
	/	須惠器：蓋5、 坏3、埴輪2	刀子 1 敷瓦 4	須惠器：蓋3、 坏3、高坏2、 蓋1	刀子 1	須惠器：蓋1、 坏1、埴輪2、 土師器：高坏4、 蓋1	須惠器：蓋9、 坏3、高坏1、 埴輪蓋1、蓋1	須惠器：蓋1、 坏1、埴輪蓋1、 蓋1、蓋1		
内										
外										
上										

第5章 ま と め

第1節 松ノ本古墳群の調査成果

松ノ本古墳群は、兵庫県水上郡春日町多利字松ノ本に所在する。古墳群は9基の木棺直葬を埋葬施設とする円墳群と、1基の無墳丘の箱式石棺で構成され、比較的短期間のうちに造墓を終了している。

木棺直葬を埋葬施設とする円墳群のうち、8基を調査したが、いずれも規模、墳丘形成方法、埋葬構造、副葬品が類似し、複線性を窺わせる。

古墳群は、由良川の支流の一つである竹田川左岸の山麓部付近に築造されている。山麓下は、傾斜面もしくは中位段丘⁽¹⁾で、現在、水田耕作が行われていて、古墳群のうち最も低位にある9号墳との比高差は、約10～15m程度である。

範囲 斜面に垂直方向では、標高110～130mの比高差約20mの間にあり、水平距離では60mを測る。等高線に平行方向の分布は、西向する斜面の小支脈線線上と、やや南東側に緩やかに湾曲する部分に限定されている。その範囲は約50m弱ほどで、さらに南東側に続く斜面や、小支脈線線の北側には古墳の築造は認められない。このように、松ノ本古墳群は、南北（水平方向）50m、東西（垂直方向）60mの範囲の中に墳丘裾を接するように造墓されている。このことは、古墳群を形成する墓域が、極めて限定されたものであり、墓域の選地を築造の母体となった集落を見下ろすことのできる位置にする意図を窺わせる。

古墳群からの眺望 北、南、東を山地に遮られ、西方の多利集落と竹田川の一部、および、竹田川の対岸にある多田付近を見通せるだけである。松ノ本古墳群を形成した集団は、現在まったく不明であるが、竹田川を挟んで対岸となる多田付近を除外すれば、中位段丘上にある多利集落付近にあると推定される。

築造方法 調査を実施した8基の古墳は、築造方法に若干の相異が認められるものの、極めて類似したを採っている。

古墳群の位置が、20°を超える急斜面に築造されていることから、斜面の上方を弧状に削り出し、斜面下方に盛土して、段状の平坦面を造り出すという基本的な手法が各古墳に共通し、斜面下方に墳丘裾部も一部削り出しを行っている。斜面下方からみれば、一見高

塚古墳のように見えるが、斜面上方側には、ほとんど墳丘としての高まりがなく、僅かに弧状にめぐる浅い溝によって墳丘端を画しているだけである。

墳形 急傾斜面という地形形状の制約もあり、水平方向に長く、弧状の溝もやや直線的に開削されている古墳(3、4、6、7号墳)があり、方墳を意図した可能性も残すが、2、5、8、9号墳のように円弧状に開削された古墳もあり、一概に墳形は決し難い。いずれにしる、地形的な制約のためか、意図した墳形に整形することができず、不整な形状を呈している。

墳丘の規模 9号墳が最も大きく、径は10mを超える。最小の古墳は5号墳で、東西長は約6.5mと極めて小規模である。しかし、多くは約8mを前後する規模で、比較的均一な墳丘規模をもつ。

埋葬施設 すべて組合せ式の箱形木棺を、墳丘中央に一棺のみ直葬している。一基の古墳も例外なく、1墳丘1埋葬施設の原則が守られていて、家族墓とみられる多葬墳はない。

後述するように、古墳の築造年代が、短期間とは言え数世代に亘っている可能性があり、古墳群の造営主体が、「家父長制家族」ではなく、家族内における家父長のみが、継起的に古墳を造営したと考えられる。この点は、群集墳が一般的にもつ属性であるとされる多葬墓とは明らかに相違しており、地域的特性も含めて検討を要する。

木棺は等高線に沿った南北方向に埋置されている。木棺の南北両木口幅をみると、2号墳を除いてすべて北木口幅が広いか、同じである。北木口側の広いものが、箱式石棺を含めると9基中6基あり、頭位は原則的には北を向いていた可能性が大きい。また、唯一の例外である2号墳の木棺幅は、南木口側で急激に膨らんでいて、攪乱を受けている可能性がある。

出土遺物 鉄器と土器のみである。

鉄器 3、6号墳の2基のみで、木棺内の中央部棺側に副葬されていたと推定される。調査を実施した他の6基は、全く鉄器を保有せず、須恵器を中心とした土器を副葬しているだけである。

最も鉄器を多く副葬していた3号墳は、鉄鏃4本と刀子が1本で、6号墳は刀子1本のみが副葬されている。鉄器の副葬のうち、鉄鏃と刀子は、等質的な群小古墳が副葬する鉄器として最も基本的な組合せである。⁽²⁾ 鉄製武器としての鉄鏃と、工具としての刀子以外に鉄器が副葬されていないことは、3号墳の優位性を僅かに窺せるが、松ノ木古墳群が、

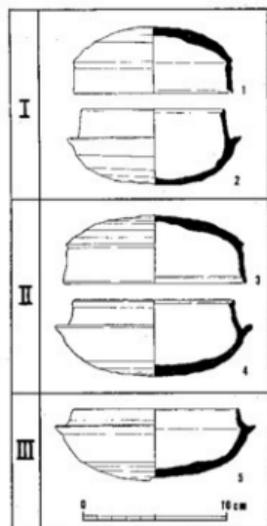
「集団の首長墓と集団を構成する家長墓⁽³⁾」によって形成されるのではなく、著しい階層性の差を認めることのできない家長墓から構成される古墳群として位置付けられる。このことは、先に検討した古墳の築造方法、規模からみても、各々の古墳間に差が認められないことも傍証となろう。

土器 器種が判明した個体数は118個である。小破片で器種の不明なものを加えると、やや118個を上廻ると考えられるが、出土した土器の全てを観察すると、118個体以外の個体とみられる土器片は比較的少なく、大幅な個体数の増加は認め難い。

土器の出土位置からみて、古墳副葬時の位置を保っているものは少なく、全個体数の約半数である。それ以外の土器は、墳丘裾部、墳頂部、弧状溝などの埋土もしくは流土中から出土している。各古墳に伴うとみられる土器が認められない古墳もあり、厳密には古墳築造年代の検討は不可能である。したがって各古墳の埋葬施設に伴うことの確実な土器の他、古墳から流出したと思われる前記の土器を合わせ、松ノ本古墳群の土器の特徴を整理すると、第4章第1節に述べたように、須恵器と土師器の比率は9:1で、須恵器のうち、坏および坏蓋が約50%を占め、松ノ本古墳群の土器の主流を占めている。他に短頸壺の比率が目立ち、8.8%を占めている。須恵器は總体的に坏、高坏、短頸壺、埴、甗などの小型の器種が多く、壺、甗も小型もしくは中型品に限られる傾向が強く、大型品は少ない。

一方、土師器は他の後期古墳と同様、その占める比率は少ないが、4、6号墳で、高坏4個体、壺1~2個体と類似した土器構成を示している。さらに、この2基の古墳に副葬された土師器が、確認できた13個体のうち12個体を占め、両古墳が、極めて親縁的な関係にあったと考えられる。なお、4号墳の小型高坏は実用品ではなく、ミニチュアの儀器であろう。

次に、出土土器の主流である須恵器の坏および坏蓋をみると、第60図のようにおおよそ3期に分けることが可能であろう。出土土器数の総量や、器種の



第60図 須恵器の変化

1. 第13図—11
2. 第13図—8
3. 第26図—3
4. 第26図—9
5. 第56図—2

偏りから必ずしもセット関係が明らかではないが、田辺⁽⁴⁾編年のTK47型式からTK10型式の間に収まるものと考えられる。しかし、松ノ本古墳群で出土した須恵器の生産地が明らかでなく、かつ、この地域における古墳時代須恵器の類例も余り多いとは言えない現在、詳細な検討は今後の課題として残しておきたい。

第2節 多利地域における松ノ本古墳群の位置

松ノ本古墳群の近傍には、いくつかの古墳が存在し、それぞれの古墳群を築造した集団と、松ノ本古墳群の築造した集団が同一集団であったと思われる古墳群も含まれている。

その中で、近畿自動車道建設に伴って調査が行われた多利地区の2か所の古墳群は、比較的その内容が明らかである。ただ2か所とも調査報告書が未公開のため、詳細な検討は、それらの調査報告書に委ね、ここでは若干の予察的検討に留めたい。

現在、多利地区で松ノ本古墳群と同様、木棺直葬をもつ古墳を主流とする古墳群が、2か所存在する。

松ノ本古墳群の立地する西向き斜面が、多利集落をかこむように、ほぼ直角に西側に主尾根が屈曲するあたりの北向斜面に、4基から構成される向山古墳群がある。さらに西に延びる主尾根の2つの小支脈上に、1基と3基から構成される多利古墳群がある。

松ノ本古墳群、向山古墳群、多利古墳群はいずれも、多利集落を望む位置にあり、それぞれの古墳群間の距離は、松ノ本古墳群と向山古墳群が約600m、向山古墳群と多利古墳群が約400mほどである。

向山古墳群は、⁽⁵⁾3基の木棺直葬を埋葬施設とする古墳と、横穴式石室を埋葬施設とする古墳1基から構成されている。

木棺直葬墳は、最高所に位置する1号墳が径約20mで、3古墳群では最大の規模もち、径9~10mの3、4号墳の3基からなる。埋葬施設が流出のため検出できなかった4号墳を除くと、1墳丘1埋葬施設で松ノ本古墳群と共通している。

2号墳は径約15mの円墳で、玄室長2.3m、幅2.2mの方形プランをもつ古式の横穴式石室墳で数次に亘る追葬が認められる。

古墳の築造年代は松ノ本古墳群と同じか、やや後出すると思われるが、横穴式石室をもつ2号墳を含め、松ノ本古墳群と併存関係にあり、2号墳の追葬を除くと、6世紀中葉には追葬を中止しているようである。

(6)
多利古墳群は2つの小支脈稜線上に築造された木棺直葬を埋葬施設とする古墳群である。

多利古墳群は、松ノ本、向山古墳群が斜面に位置するのに対し、尾根稜線上に位置するという立地に相違点がある。

小支脈上に単独で築造された「2号尾根古墳」は、標高約140m付近に位置し、山麓下との比高は約55～60mあり、高所に築造されている。埋葬施設は流出していたらしいが、径11mほどの円墳で、墳頂部の攪乱域から管玉6点、小玉54点が出土し、3つの古墳群では唯一石製装身具をもつ。

「2号尾根古墳」の東側の小支脈上に3基の古墳群があるが、確認調査のみであるため各古墳の内容は明確でない。確認調査のトレンチから出土した土器は、松ノ本、向山古墳群とはほぼ同時期とみられる。

以上のように、3つの古墳群はそれぞれ若干の異なる様相を示すものの、横穴式石室を埋葬施設とする向山2号墳を除くと、①木棺直葬を埋葬施設とし、②1墳丘1埋葬施設をとること、③築造時期は多少の前後関係があるものの、ほぼ同時期と認められること、④いずれも総じて副葬品は少なく、特に少量の鉄鏝、刀子以外の鉄製品の副葬が原則的に認められないこと、⑤造墓が6世紀中葉には終了していることなど共通した内容が多い。また、古墳群の位置なども勘案すれば、3つの古墳群を築造した集団は同一であった可能性が高い。それぞれの古墳が独立した群構成をとるものの、共通した類縁の関係があり、1古墳群と考えることも可能であり、それぞれ集団内の血縁関係によって3～4地点に遷地したと考えられる。こうした推測は、3古墳群（文群）築造の拠点となった集落が同じであったという前提に立つが、もし、古墳が集落に近接した地点に築造されているとすれば、東西南北それぞれ約1km四方の中段段丘上にしか候補地は考えられず、3つの古墳群を築造した集団が、小範囲に別々に併存していたと考えるより、同一であったと考える方がより妥当ではなからうか。

松ノ本、向山、多利の各古墳群が6世紀の中葉には早くも造墓を中止し、僅かに向山2号墳の横穴式石室だけが7世紀初頭まで追葬を行うだけである。6世紀中葉以降の古墳の実態については明らかでないが、多利地区には複数の古墳から構成される群集墳は確認されていない。松ノ本古墳群の南側の小支谷に横穴式石室を埋葬施設とする古墳があると言われていたが、踏査したところでは自然石の露頭と観察された。

多利では、松ノ本古墳群の北方、口ヶ奥溪谷から開析される谷の中段段丘上に、カナツ

キ古墳が単独で存在する。この古墳は径約10mほどの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とすると考えられる。

また、多利古墳群の山裾の段丘上には2基程度の古墳が存在するが、埋葬施設などは不明である。

カナツキ古墳の築造年代は明らかでないが、松ノ本古墳群などの丘陵斜面や、尾根稜線上に位置せず、中位段丘上に築造され、しかも単独に存在する。かってカナツキ古墳付近に古墳が他に存在しなかったとすれば、松ノ本古墳群とは性格を異にする被葬者であるとも考えられる。カナツキ古墳が横穴式石室であることから、松ノ本古墳群に後出する可能性は大きく、松ノ本古墳群の造墓が終る6世紀中葉から後半にかけて、等質的であった集団内に変化が起り、カナツキ古墳に代表される横穴式石室墳の被葬者の抬頭と、木棺直葬をとる古墳を築造した家長層の没落というような集団秩序の再編があったと想定される。

多利古墳群の下方にある古墳もおそらく木棺直葬をとる古墳に後出し、多利古墳群との系譜関係が考えられるが、大規模な古墳群は認められず、カナツキ古墳と同様な性格をもつ古墳であろう。

一方、多利古墳群の山裾に全長34mの二間塚古墳⁽⁷⁾が存在する。二間塚古墳は主軸を北西に向け、単独で築造されている。この古墳は多利地区と野上野地区を限る西に延びる尾根筋の両側に築造されており、位置的には野上野側にある。多利・野上野などは、律令制下の春部郷にあたる。二間塚古墳もまた、築造時期など明らかでないが、黒井盆地内にはかつて王塚と呼ばれる前方後円墳が存在したと言われている。『丹波氷上郡志』⁽⁸⁾によると明治45年に発掘が行われ、杏葉大小6個、響、雲珠・銀形武器・小玉・管玉・上器などが出土したという。王塚古墳のあった稲塚は、春部郷の西に隣接する律令制下の船成郷にあたり、春部郷と共に黒井盆地を東西に2分している。

仮に二間塚古墳が、王塚古墳と同時期あるいは、相前後する時期であれば、黒井盆地内に小型であるが前方後円墳が、律令制下の郷単位に対応する地域に相次いで築造されたこととなる。いずれにしろ、この地域が6世紀中葉を境に大きな変化があったと考えられる。

松ノ本古墳群は、5世紀末から6世紀前半の比較的短期間に築造された、いわゆる「初郡群集墳」の範疇に入る古墳群である。周辺の古墳の実態が明らかでない現在、第5章の記述はあくまで推論にすぎない。今後さらに近畿自動車道建設に伴って調査された古墳群の報告書で、推論の当否を期待したい。

註

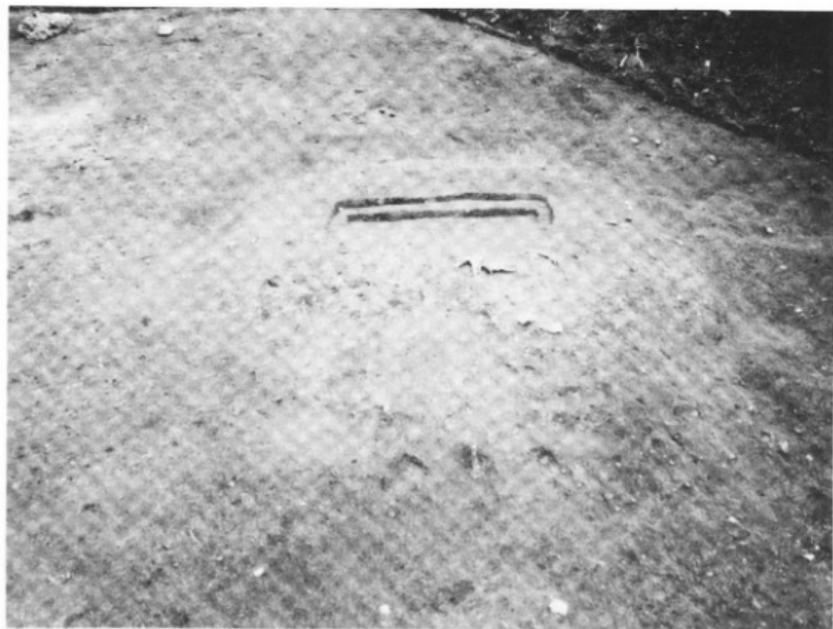
- (1) 青木哲哉氏の御教示による。本報告書7頁参照
- (2) 石野博信「速報講座 古墳時代史 7. 古墳の変質(1)―群集墳の階層性」『季刊考古学』第7号 雄山閣出版 昭和59年
- (3) 白石大一郎「石光山古墳群の提起する問題」『葛城・石光山古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
- (4) 田辺昭三「陶邑古窯址 I」平安学園考古学クラブ 昭和41年 『須惠器大成』角川書店 昭和56年
- (5) 加古千恵子、岸本一宏氏の御教示による。
- (6) 輔老拓治、村上賢治氏の御教示による。
- (7) 兵庫県教育委員会『昭和57年度指定 兵庫県文化財調査報告書』昭和58年
- (8) 丹波史談会『水上郡志(上巻)』昭和47年(復刻)



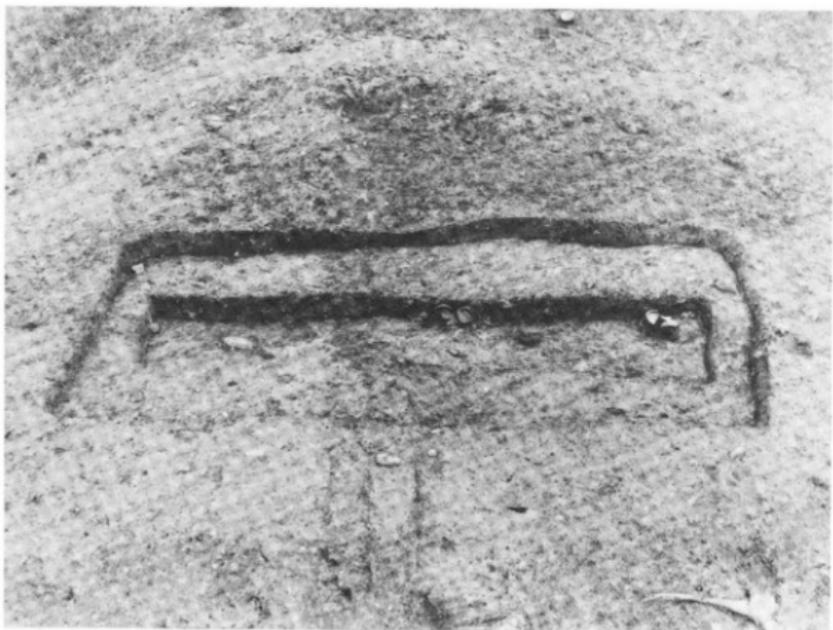
1号墳全景（北から）



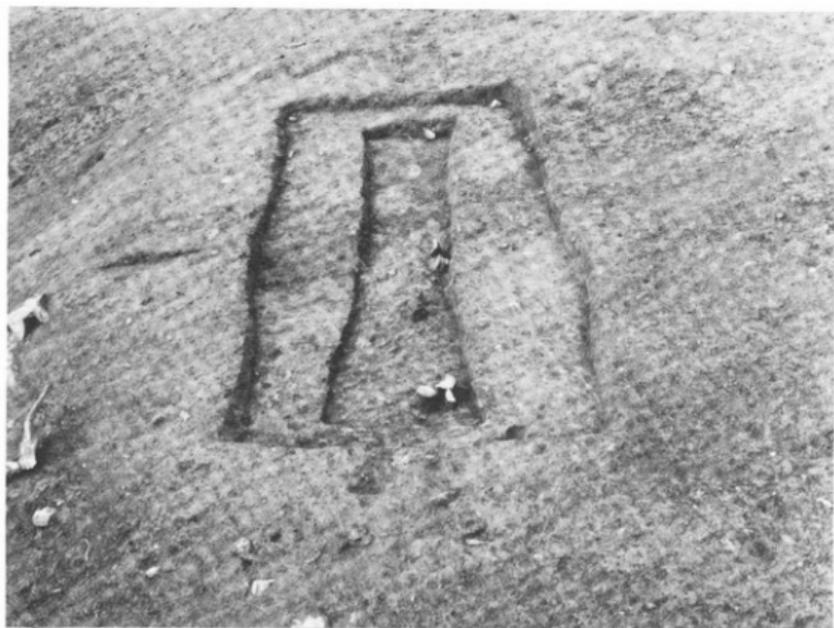
2号墳調査前（北から）



全 景 (西から)



埋葬施設 (西から)



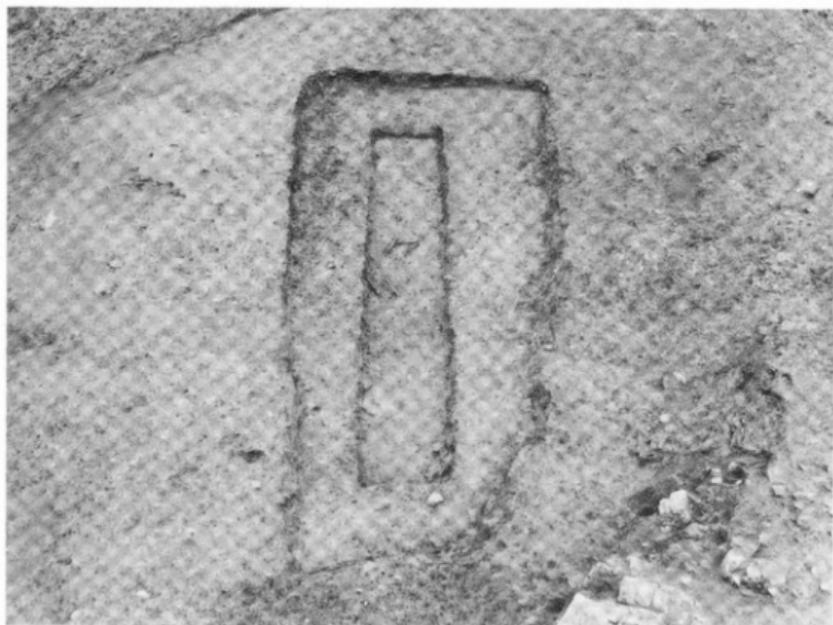
埋葬施設（南から）



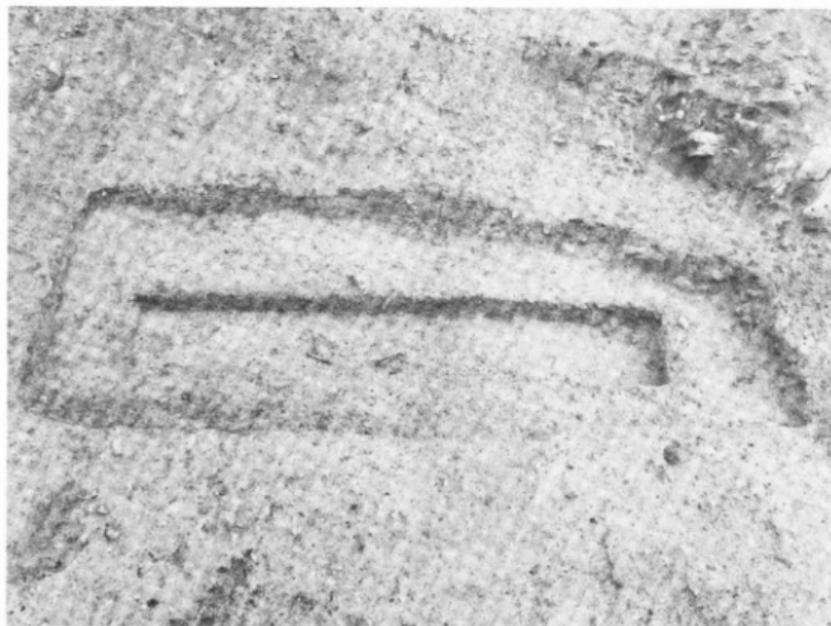
弧状溝内須恵器出土状況（南から）



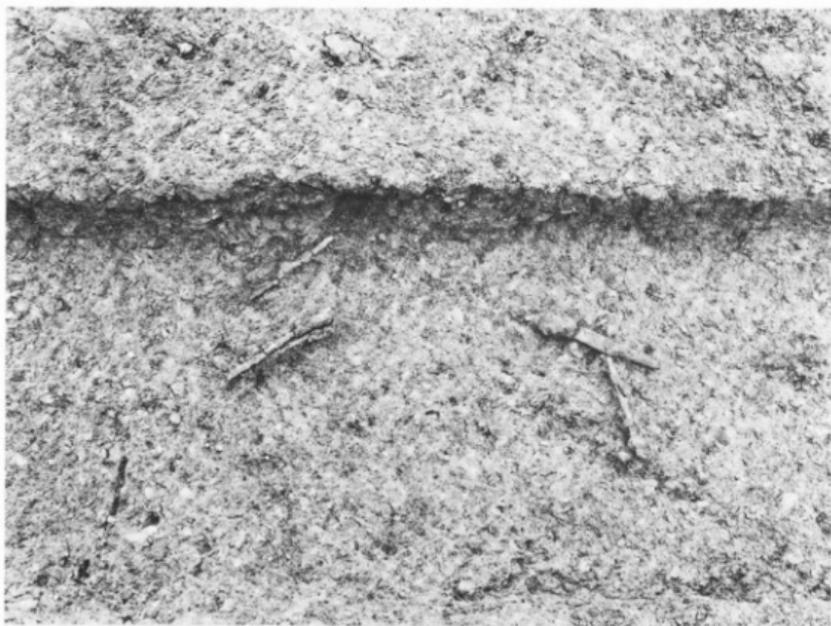
全 景 (西から)



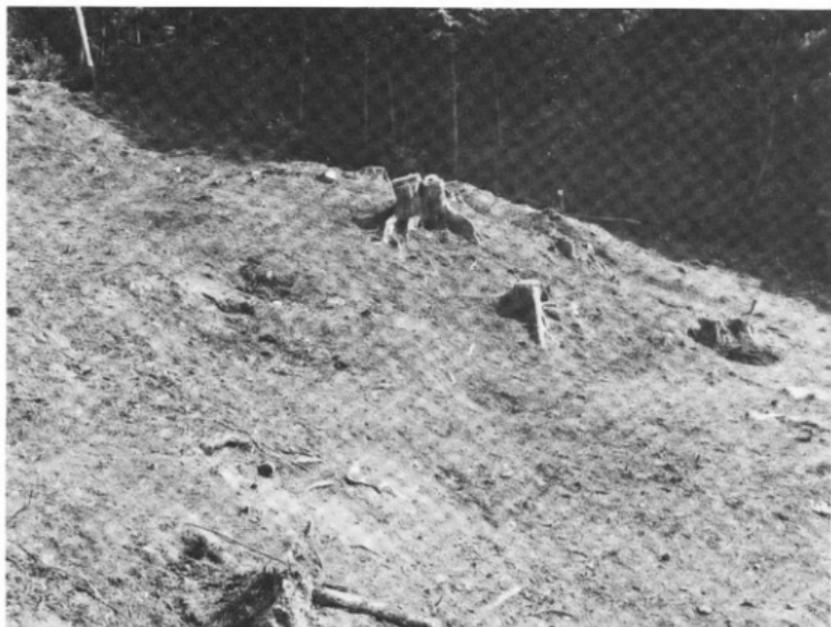
埋葬施設 (南から)



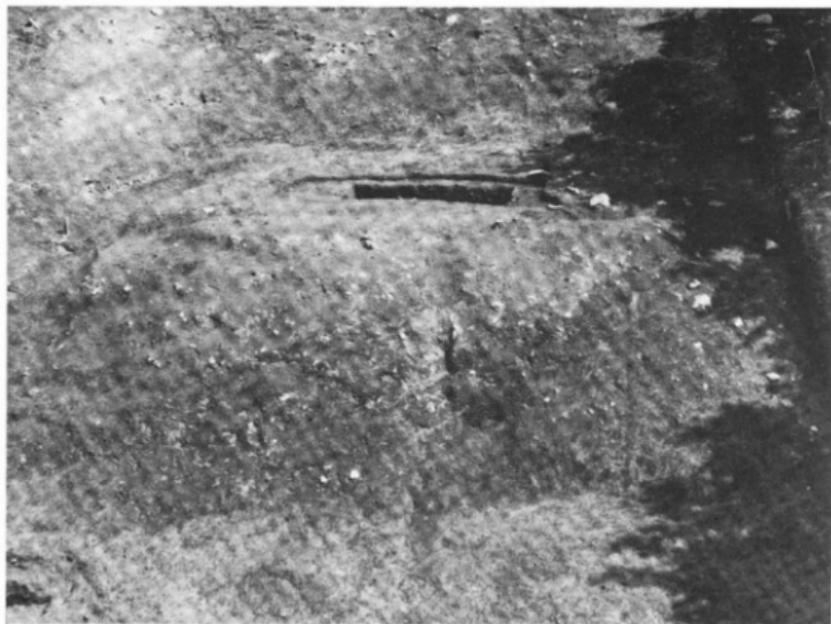
埋葬施設（西から）



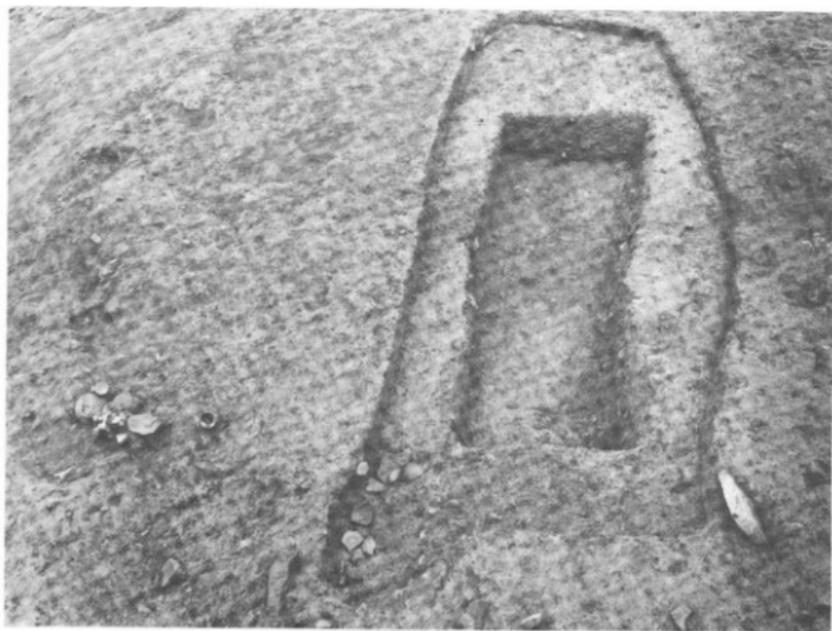
棺内鉄鏃・刀子出土状況（西から）



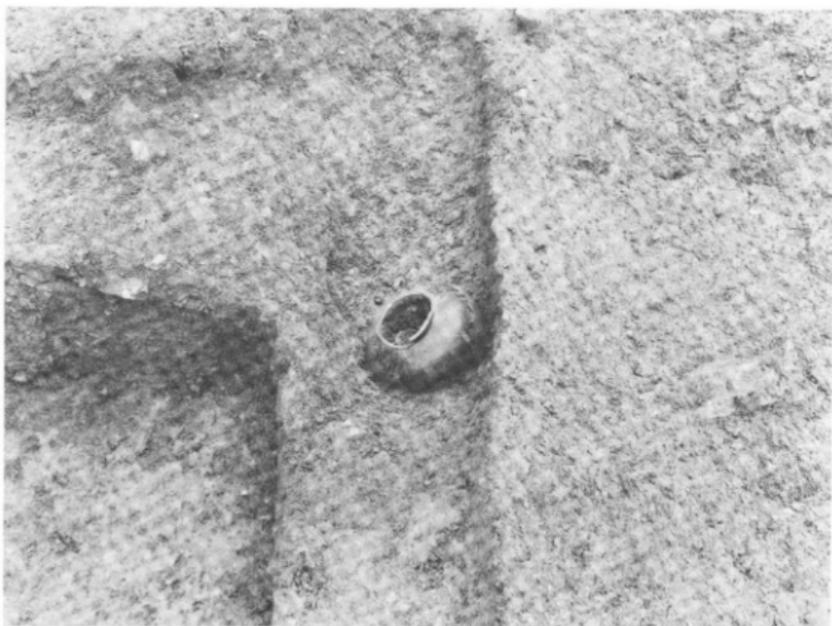
調査前（北から）



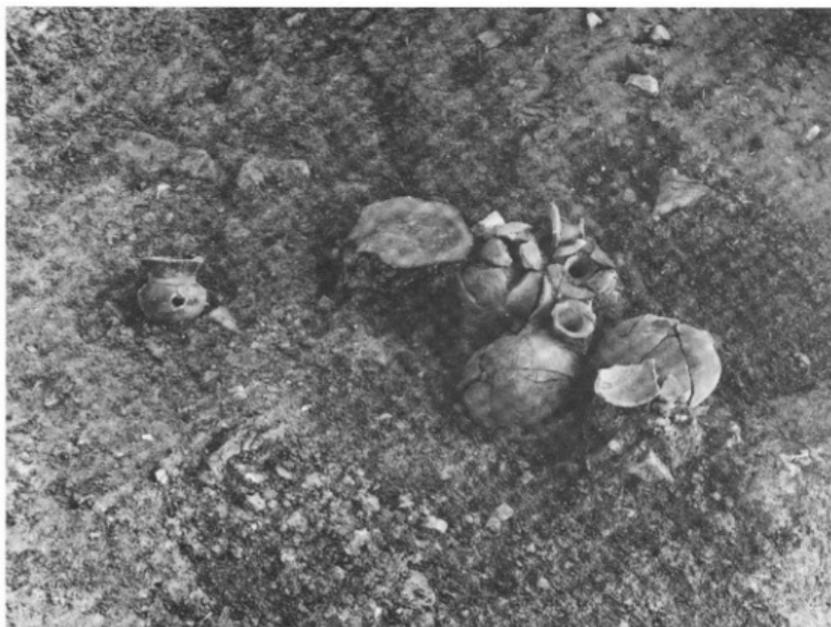
全景（西から）



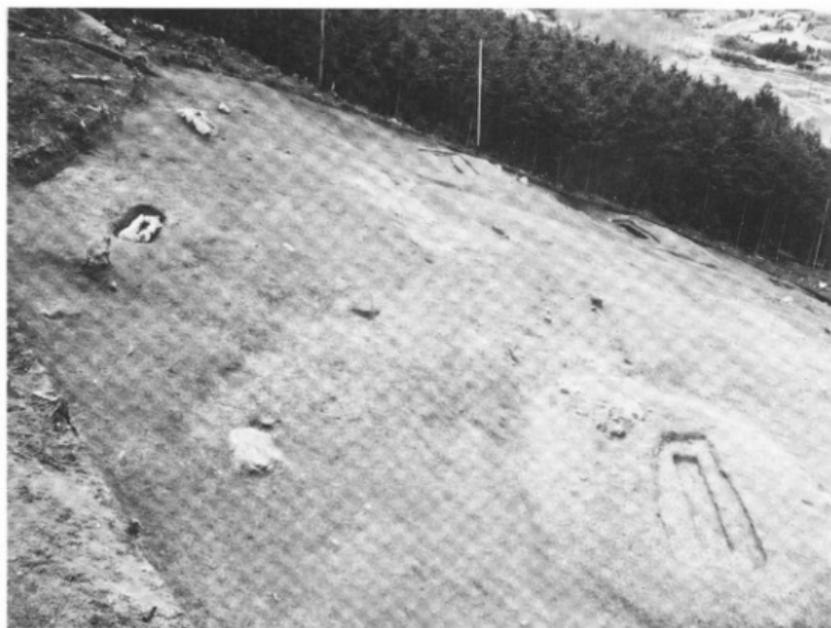
埋葬施設および土器出土状況（南から）



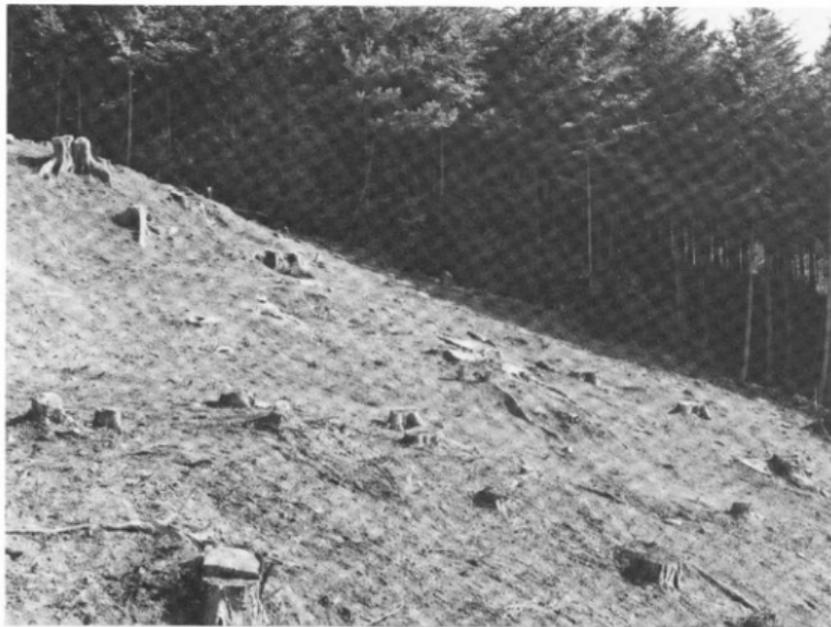
棺外須恵器出土状況（北から）



墓塚上土器出土状況（北から）



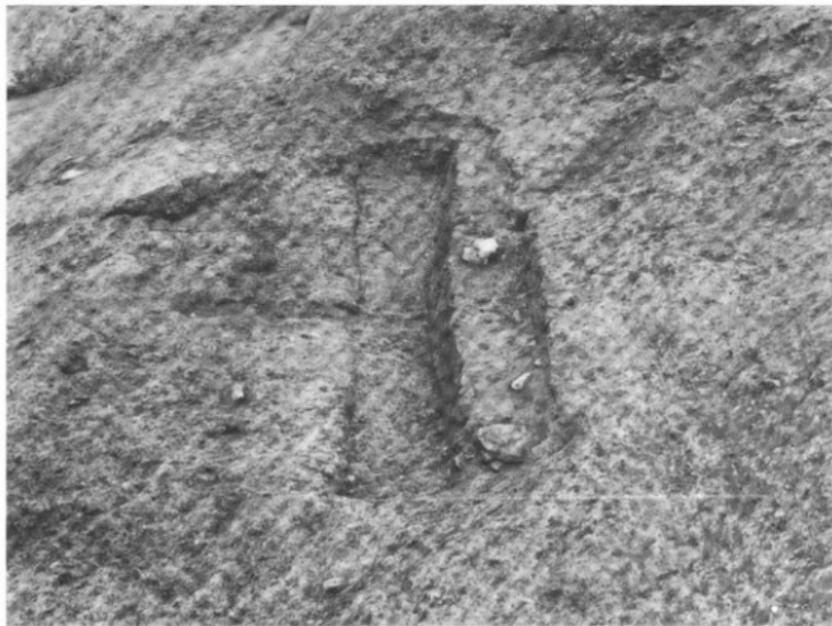
箱式石棺<左>・2号墳<中央>・4号墳<右>・3号墳<手前>（北から）



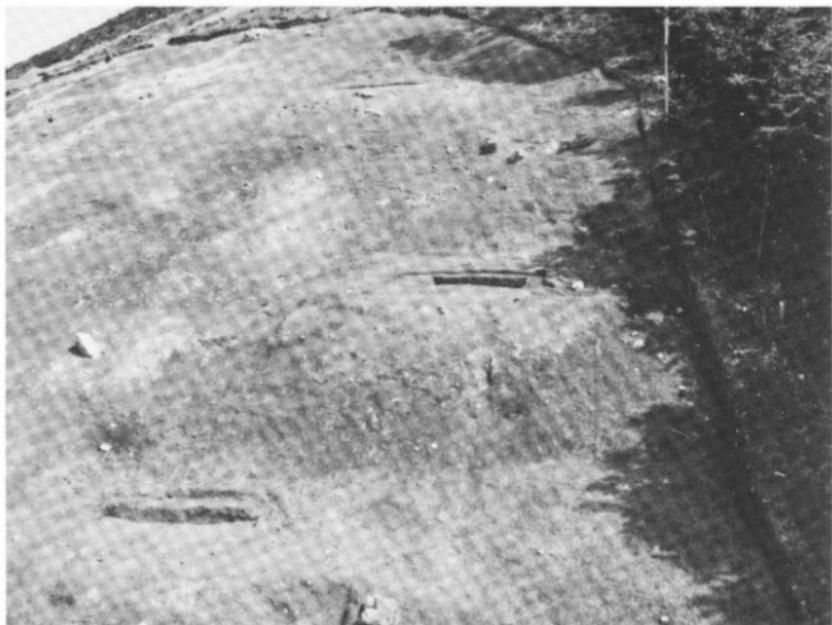
調査前（北から）



全 景（西から）



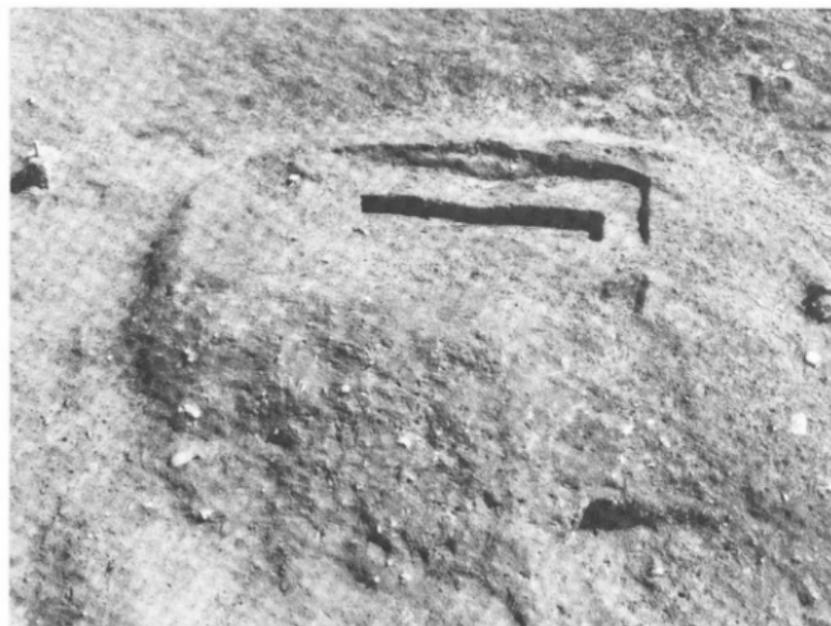
埋葬施設（南から）



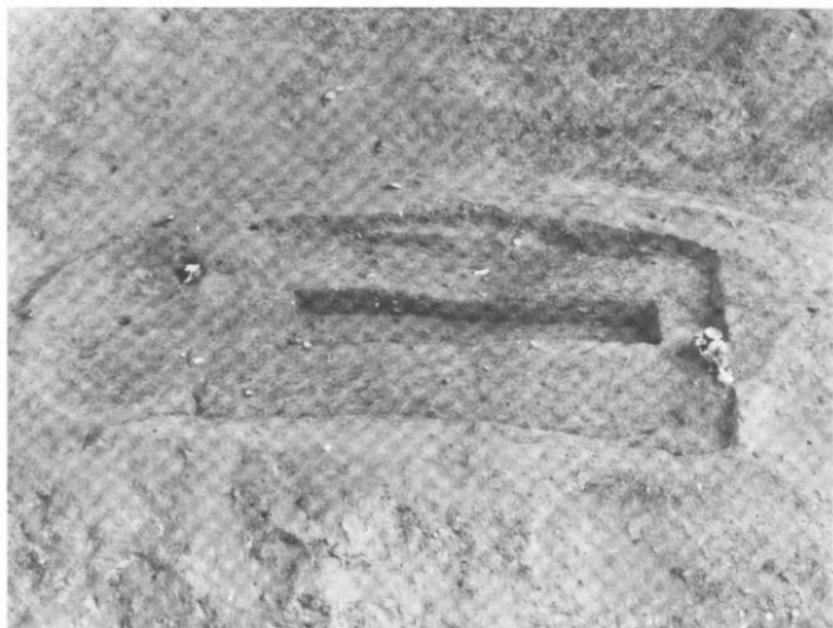
2号墳〈奥〉・4号墳〈中央〉・5号墳〈手前〉（西から）



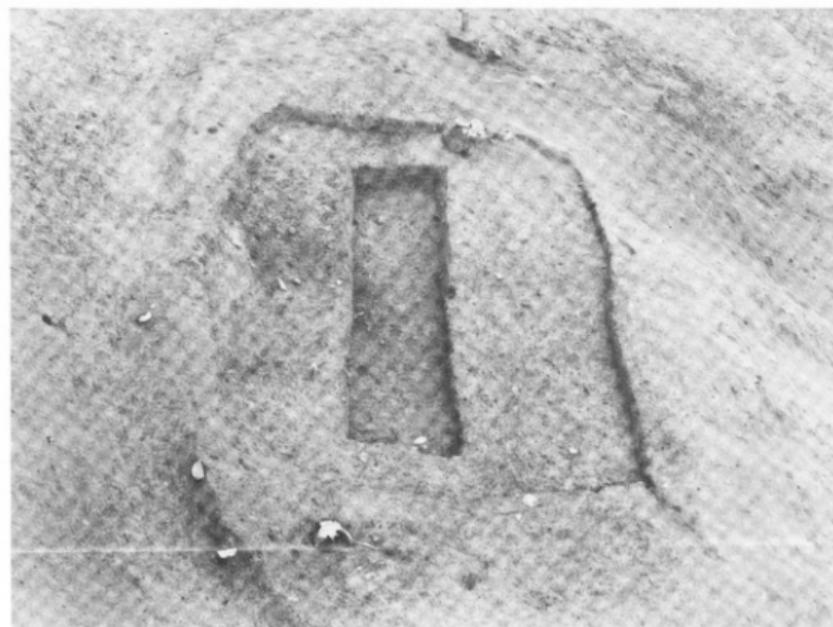
調査前（南から）



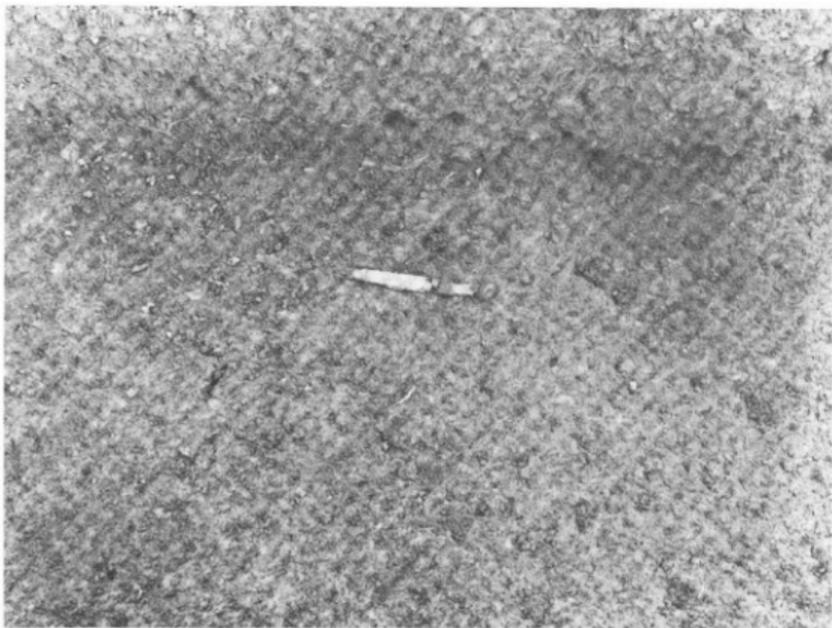
全景（西から）



埋葬施設（西から）



埋葬施設（北から）



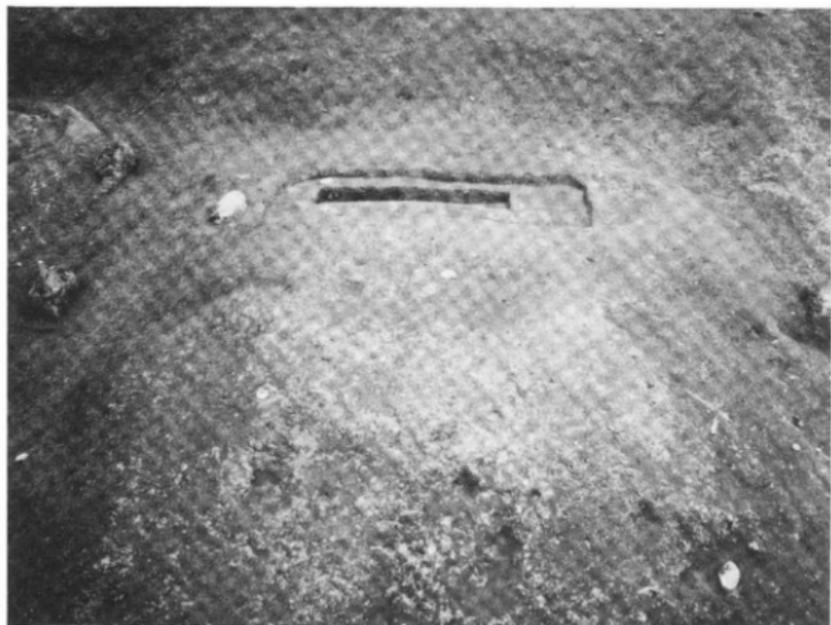
棺内刀子出土状況（西から）



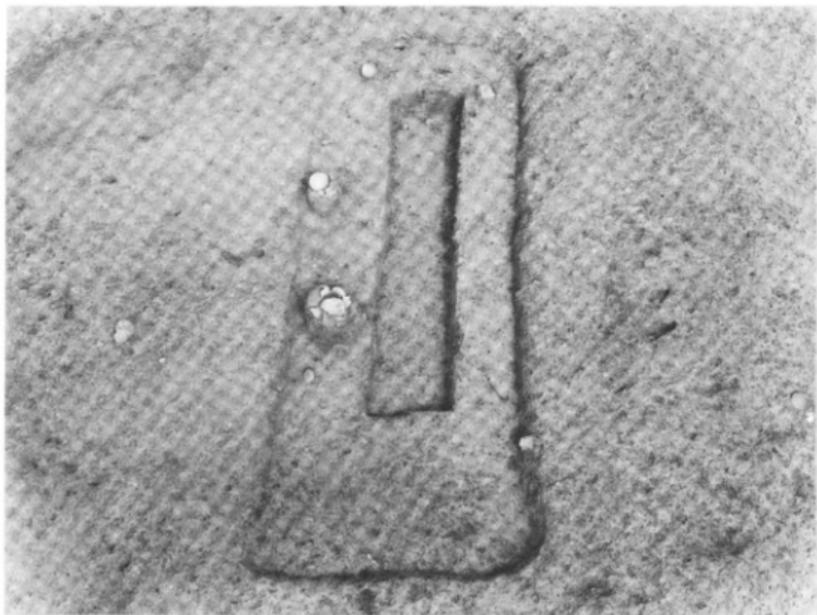
墓塚上土器出土状況（西から）



調査前（南から）



全景（西から）



埋葬施設（南から）



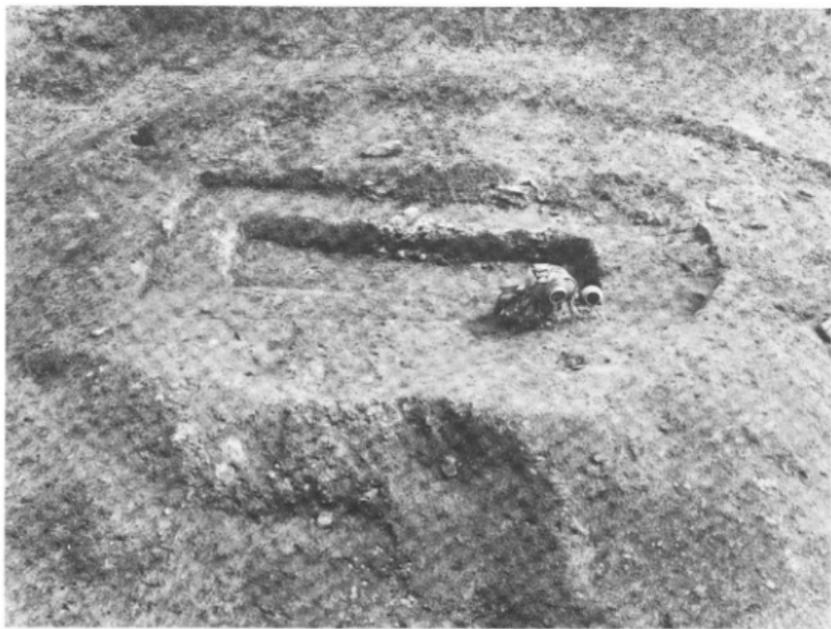
6号墳<左>・7号墳<右>（東から）



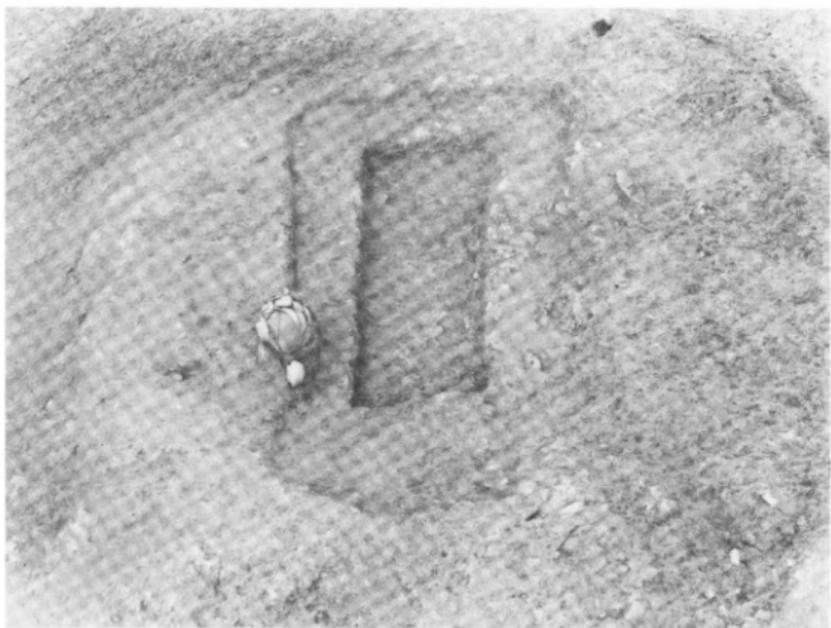
調査前(南から)



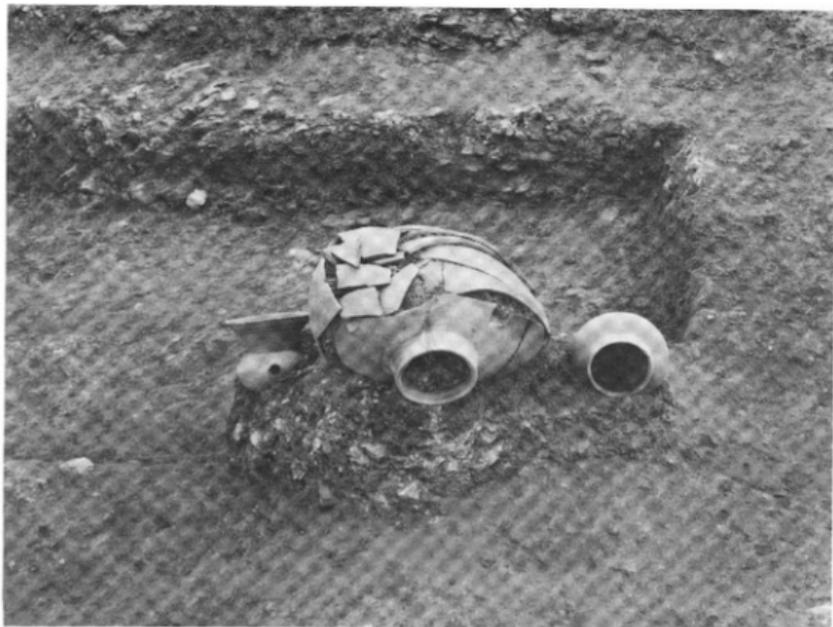
全景(西から)



埋葬施設（西から）



埋葬施設（南から）



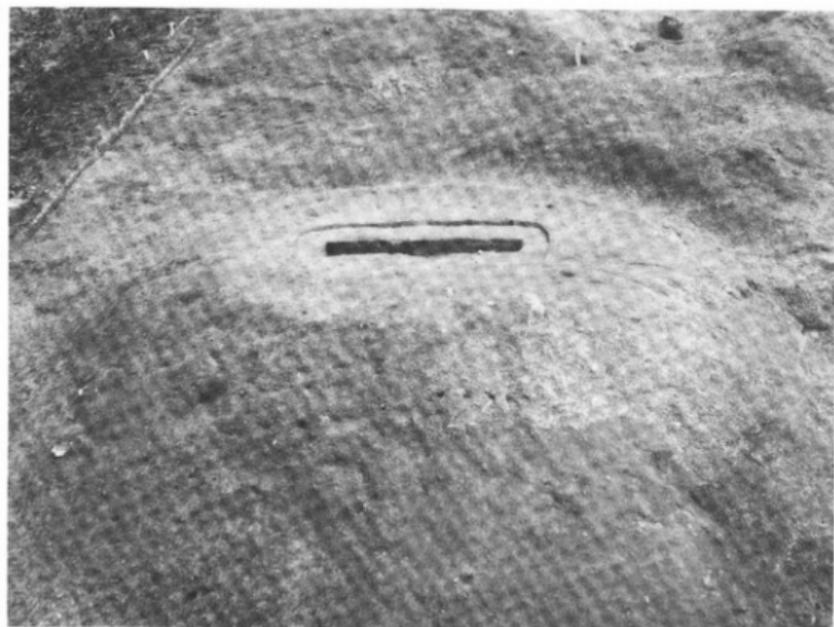
墓坑上須恵器出土状況（西から）



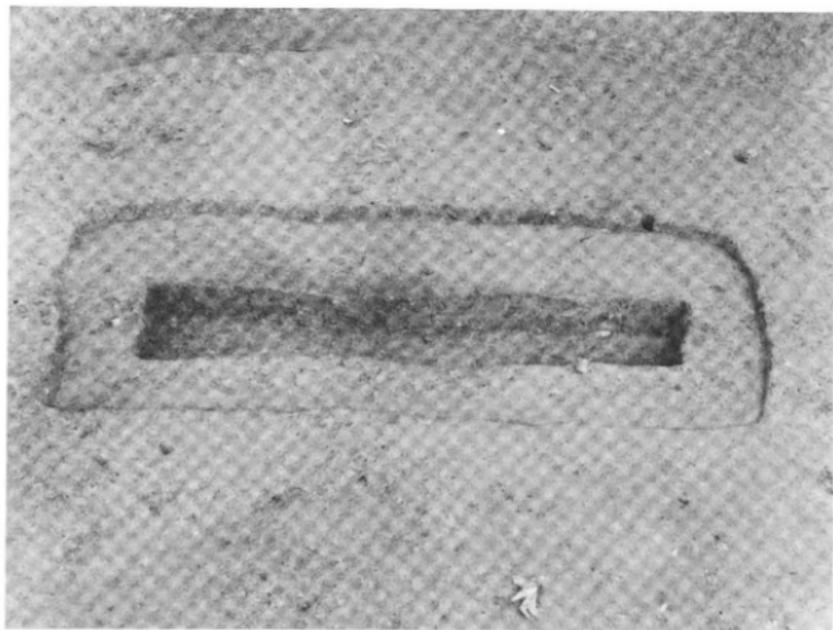
7号墳<左>・8号墳<右手前>・9号墳<右奥>（東から）



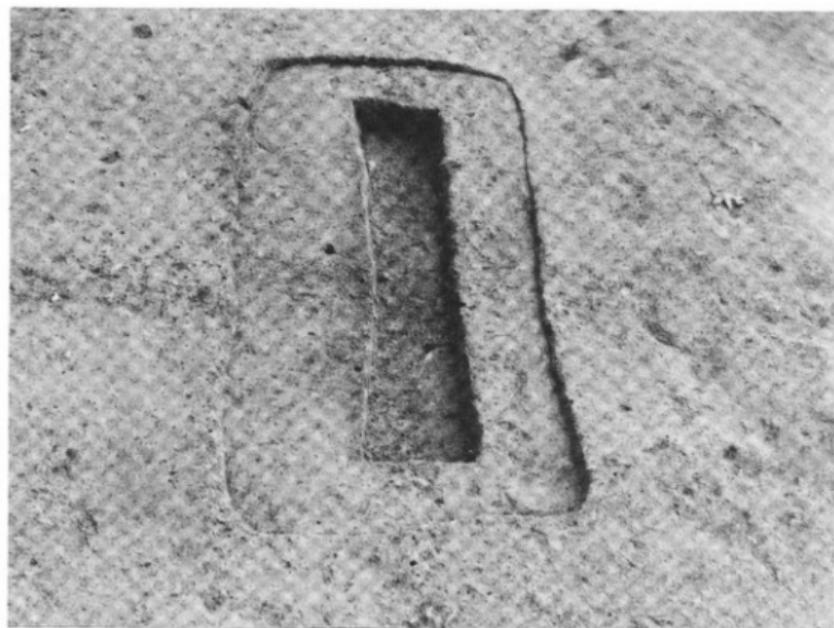
調査前(南から)



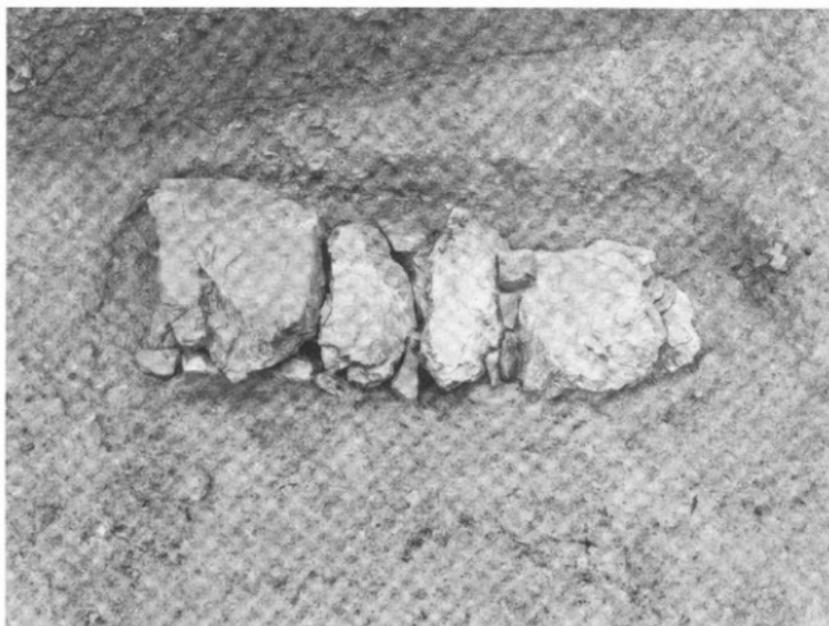
全景(西から)



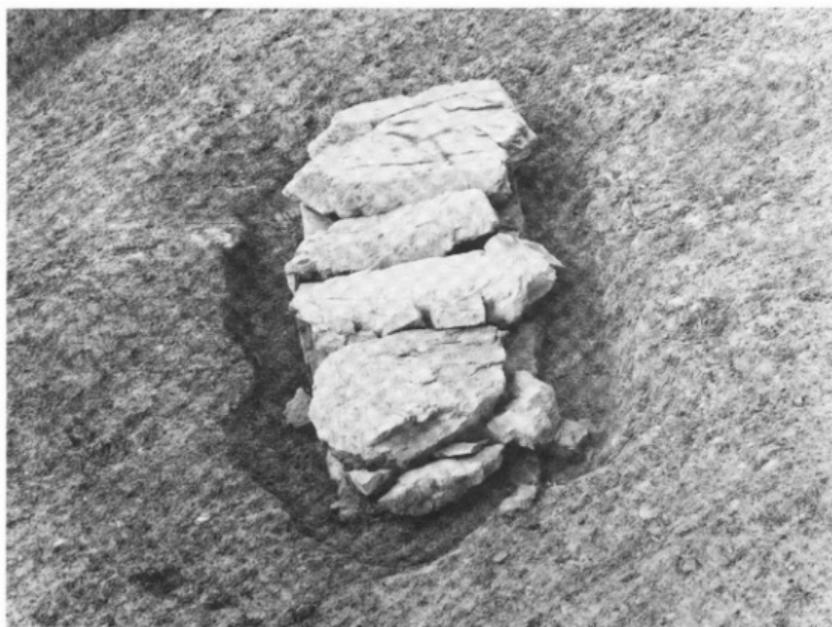
埋葬施設（西から）



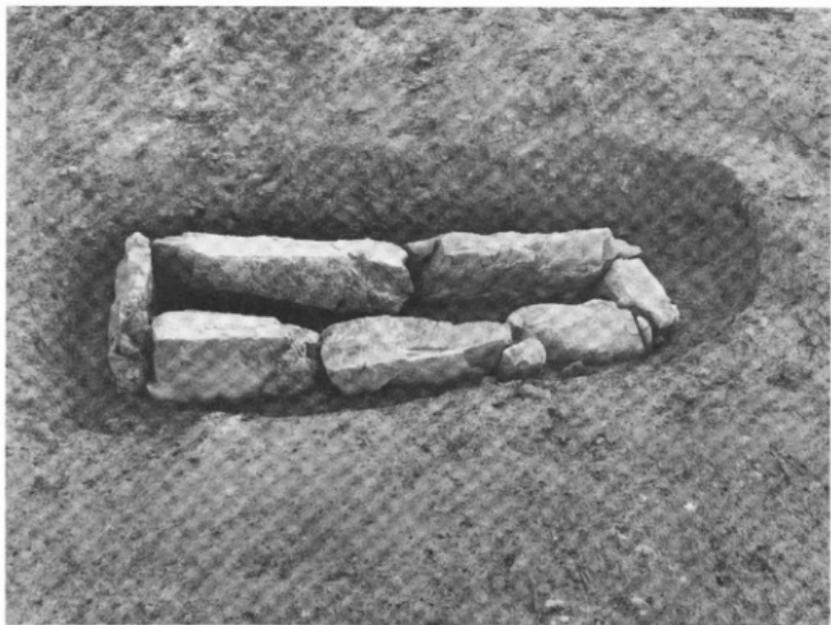
埋葬施設（南から）



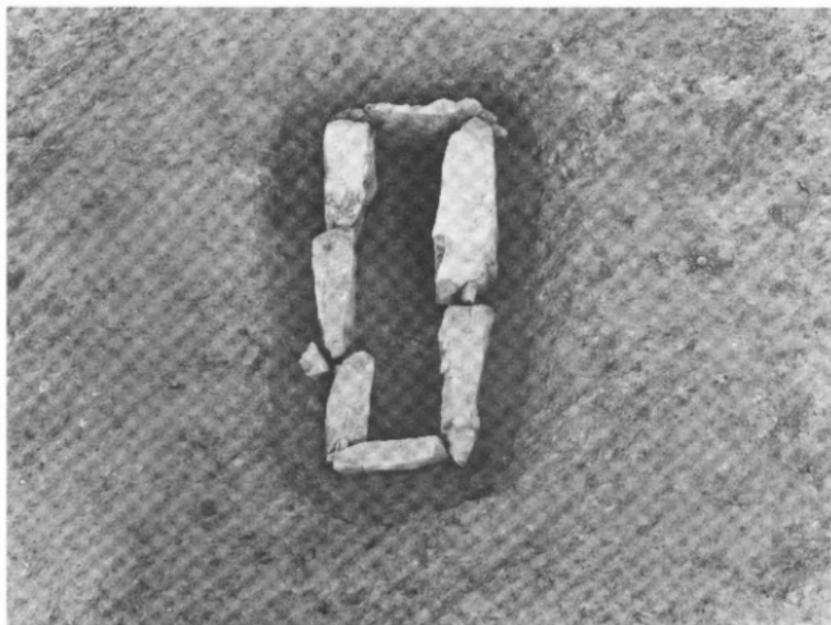
蓋石の状況（西から）



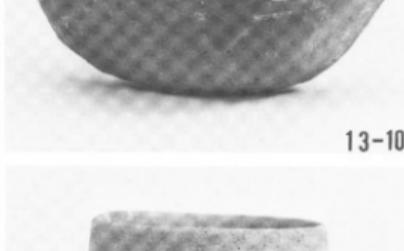
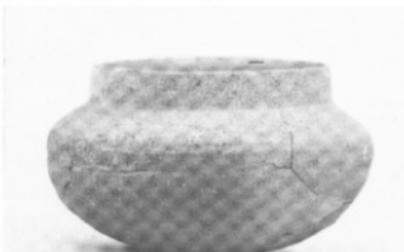
蓋石の状況（南から）



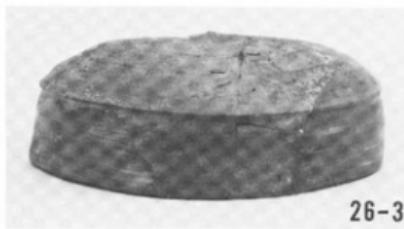
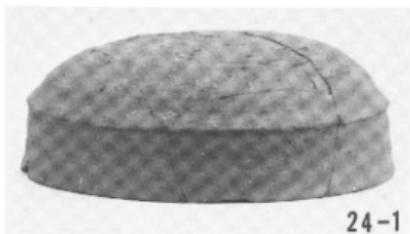
石 棺 (西から)



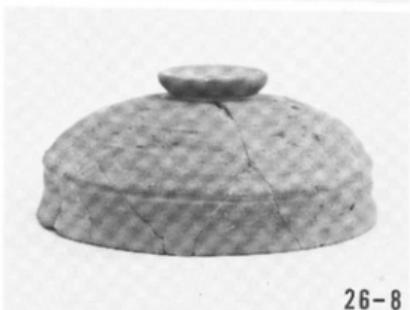
石 棺 (南から)

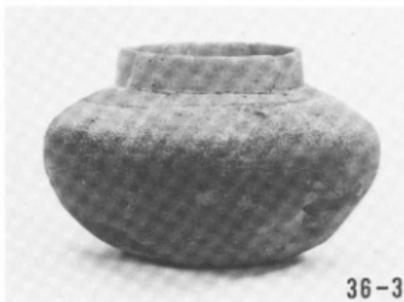
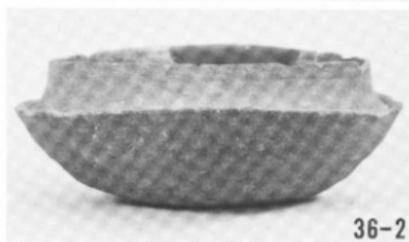
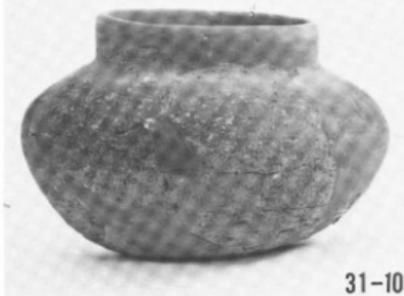
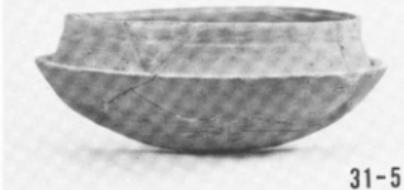
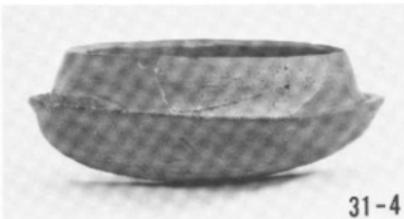
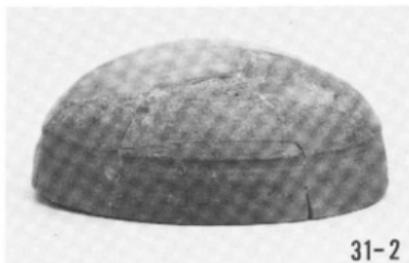


(13-1 ~ 10 2号墳棺内、13-12 2号墳弧状溝)

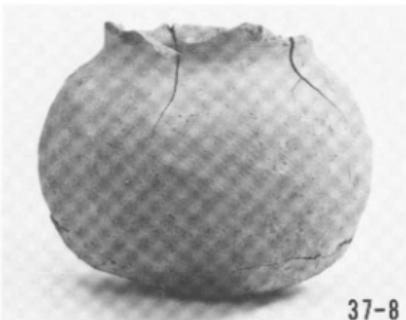


(24-1~8 4号墳墓上、26-2・3 4号墳墓外)





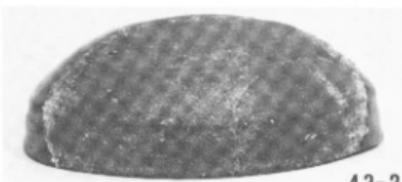
(31-2 ~ 10 5号墳墳丘裾部・弧状溝、36-1 ~ 3 6号墳臺城上)



(36-4 ~ 8 6号墳墓壁上、37-3 ~ 9 6号墳墳頂部・墳丘裾部・弧状溝)



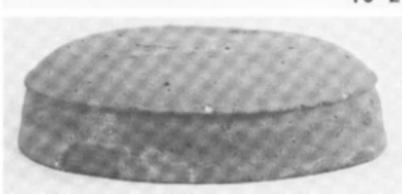
43-1



43-2



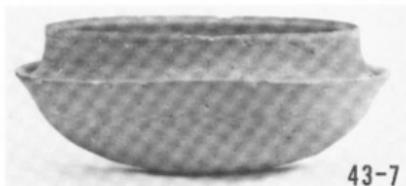
43-3



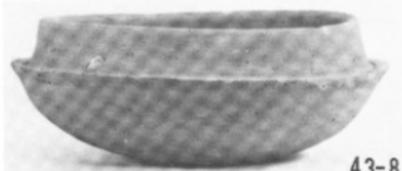
43-5



43-6



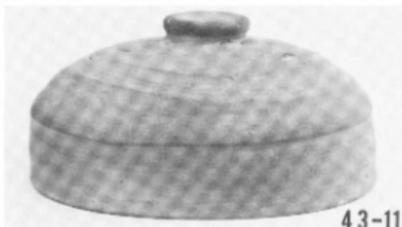
43-7



43-8



43-9



43-11



43-10



43-12



43-13



43-14



43-15



44-3



44-1



44-4



44-2

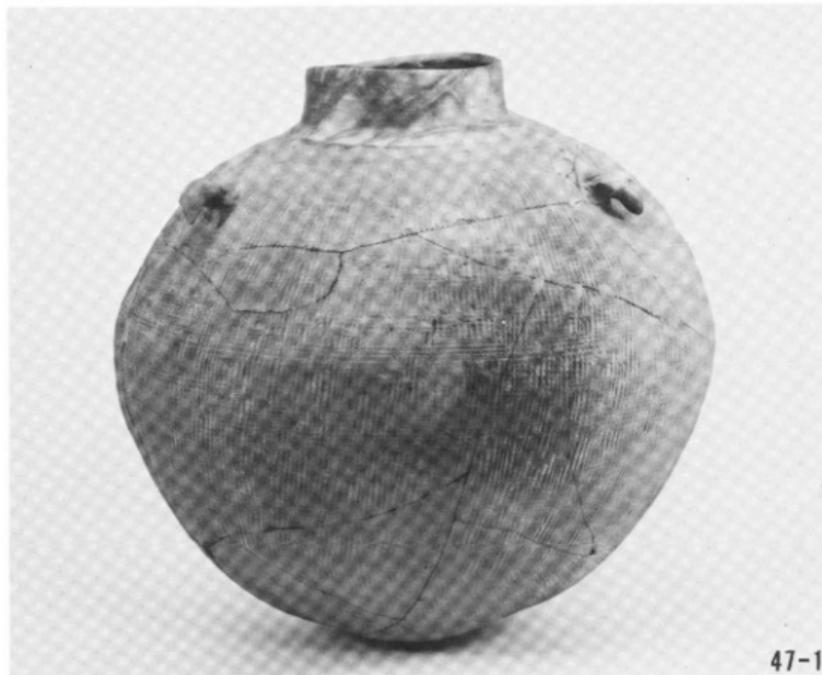
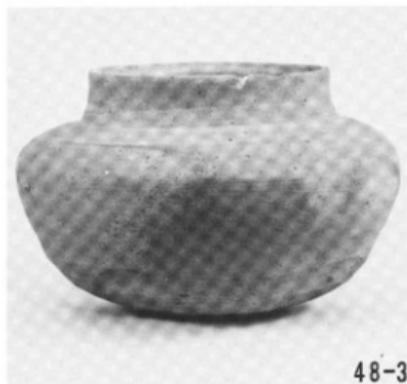
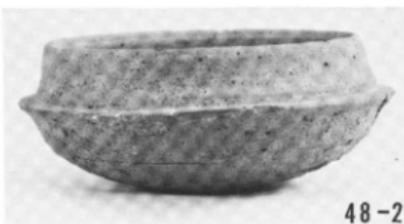
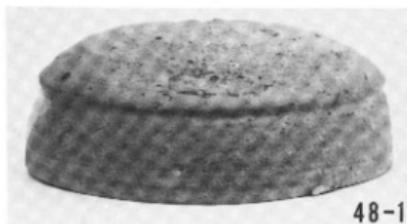


44-8



44-6

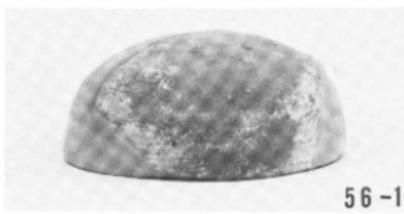
(43-13・14 7号墳棺外、43-15 7号墳墓壇上、
44-1～8 7号墳壇頂部・弧状溝・その他)



(48-1~4、47-1 8号墳墓出土)



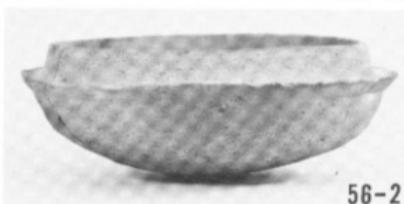
56-3



56-1



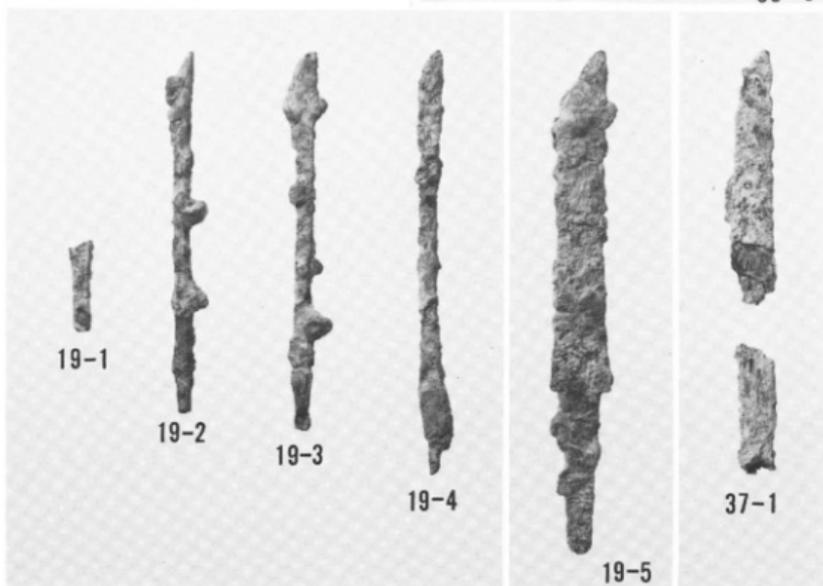
56-10



56-2



56-9



19-1

19-2

19-3

19-4

19-5

37-1

(51-3 8号墳頂部、56-1~10 9号墳頂部・墳丘裾部・
その他、19-1~5 3号墳棺内、38-1 6号墳棺内)

兵庫県埋蔵文化財調査報告書 第26冊

松ノ本古墳群

—近畿自動車道舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)—

1985年3月25日 印刷

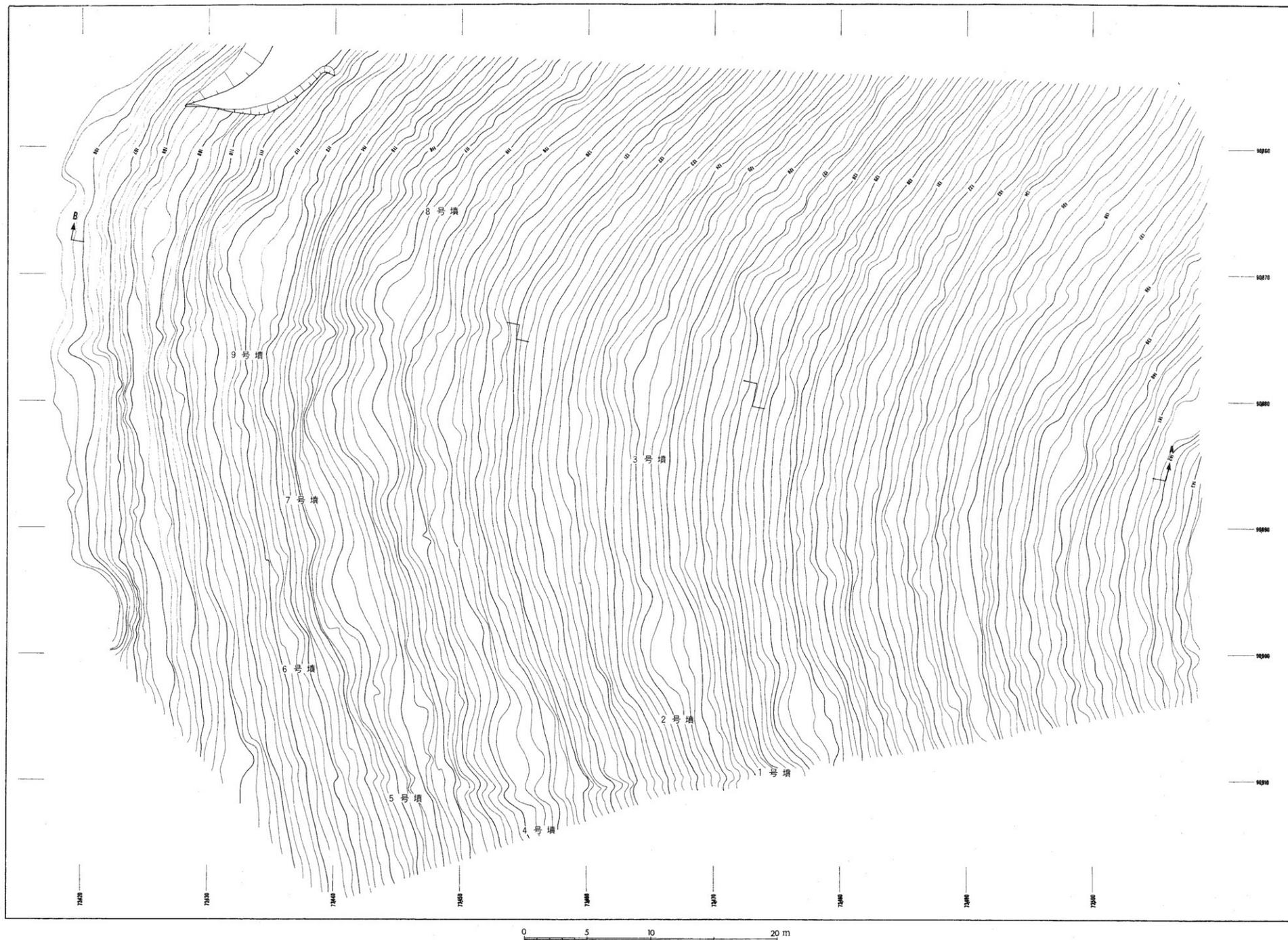
1985年3月31日 発行

編集
発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078) 341-7711

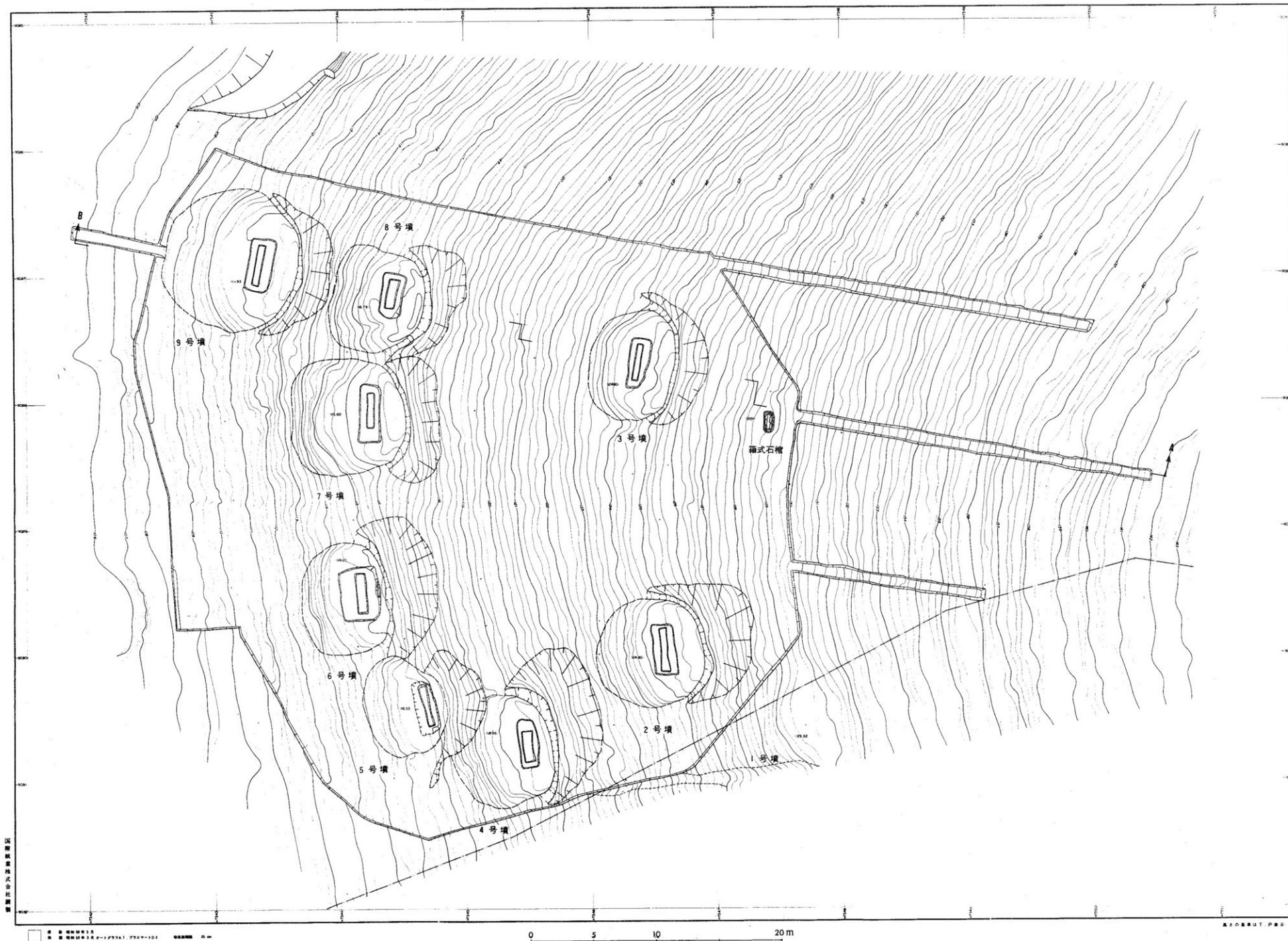
印刷 株式会社 精文舎
〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18
TEL (078) 575-4729

松ノ本古墳群付図(1~3)

付図1 氷上郡春日町多利・松ノ本古墳群測量図(調査前)



付図2 氷上郡春日町多利・松ノ本古墳群測量図(調査後)



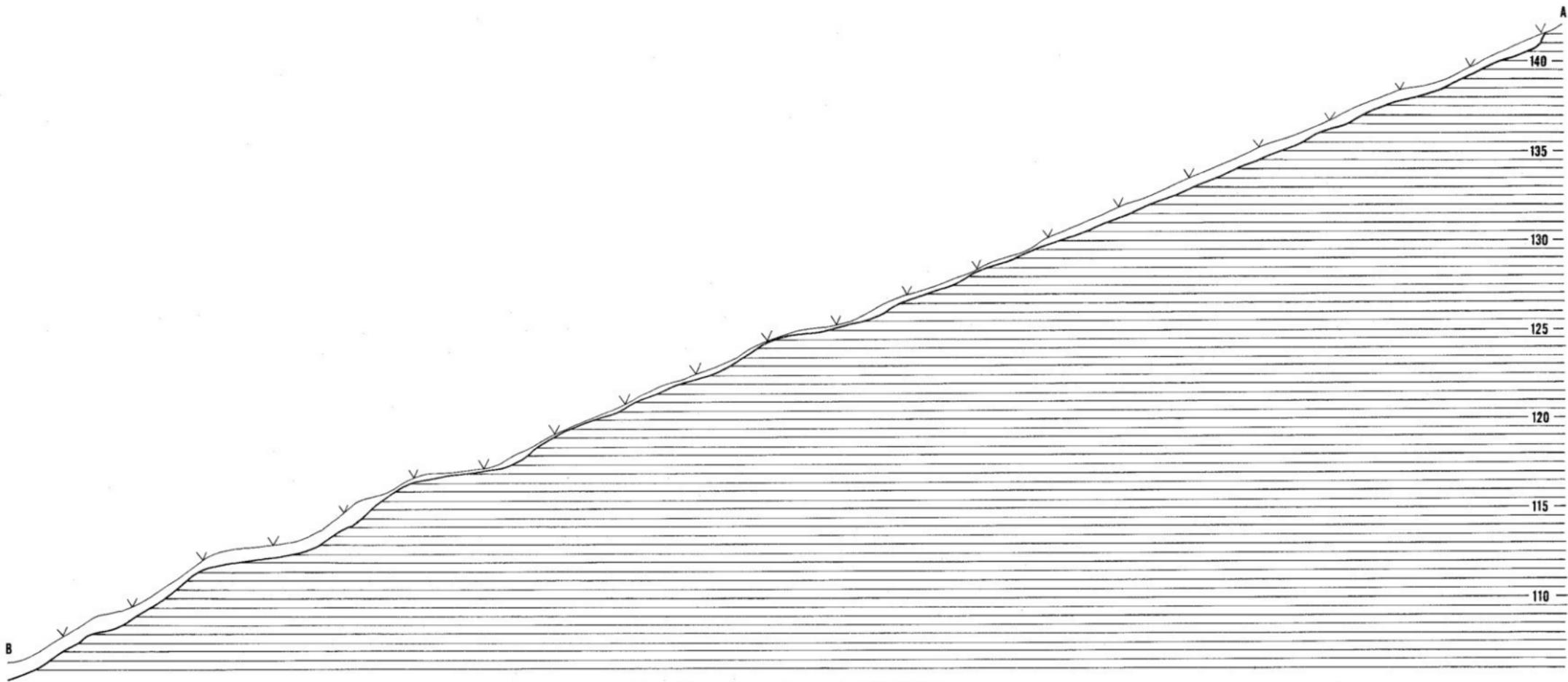
国府教育委員会

国府教育委員会

国府教育委員会
調査報告書
調査年度 昭和二十九年
調査地区 氷上郡春日町多利・松ノ本古墳群
調査者 国府教育委員会

0 5 10 20 m

国府教育委員会



付図3 松ノ本古墳群縦断図